

第十八回 松本清張研究奨励事業

# 松本清張と森浩一

— 定説への挑戦と古代史ブームの牽引 —

フリーライター 深萱 真穂

|     |        |    |
|-----|--------|----|
| 第一章 | 出会い    |    |
|     | 三日月の夜  | 3  |
|     | 突然の電話  | 8  |
| 第二章 | 定説に挑む  |    |
|     | 鏡の製作地  | 15 |
|     | 町人と官僚  | 20 |
| 第三章 | ブームの牽引 |    |
|     | 意欲と馬力  | 24 |
|     | 二つの磁場  | 28 |
| 第四章 | すれ違い   |    |
|     | 厳しい諫言  | 34 |
|     | 広がる交友  | 38 |
| 第五章 | 贈り物    |    |
|     | 山陵の史料  | 46 |
|     | 届いた言葉  | 50 |

資料編

研究の手法

基礎資料

1. 森が清張について書いた／語った文献
2. 清張が森について書いた文献
3. 同席したシンポジウムや座談会が活字化された文献
4. 清張と森が編者または筆者に名を連ねる文献
5. 森から清張宛または清張から森宛の現存書簡類

参考文献

交流年譜

## 第一章 出会い

### 三日月の夜

東京・芝の増上寺門前に「CRESCENT」<sup>クレッシェント</sup>というフランス料理店がある。創業は一九五八（昭和三十三年）といい、優に半世紀を上回る歴史のある店だ。赤レンガが重厚な建物は二代目で、六八年に竣工した。文藝春秋編『新・東京いい店うまい店』（七七年改訂新版第一刷）は次のように紹介する。

「二丁倫敦<sup>ロンドン</sup>」と仇名された青銅葺き赤煉瓦の丸の内の一劃も、いつのまにか無くなってしまうが、それを想起させる典雅な四階建てが増上寺の前に出現した。（中略）宮殿風だの古城風だの山荘風だの、内装の異なる部屋部屋があり、それにふさわしい家具道具が備わっているから、お見合いにも法要にも向き向きの部屋を選ぶことができる。

味の評価は五つ星、サービスは四つ星（いずれも五つ星が最高）。料理の例としてエスカルゴ・ブルギニオン（千五百円）、鴨オレンジ風味（二人前で八千円）などが挙げられ、昼定食は三千五百円と八千円というから、値段の評価にも五つ星（最も高価）が輝くしており、当時から相当に高級なレストランだった。ちなみに手元の『ゲルマン 1985』を開くと、「高級素材を使った料理は、かなり快適になってきた」とあるものの、星は獲得していない。

七四年の春の宵、二人の男がこの店でテーブルに向き合った。年配の人物は作家の松本清張（一九〇九—一九九二年）、当時六十四歳。一カ月あまり後に『松本清張全集』第一期三十八巻の完結を控え、『朝日新聞』朝刊の連載小説「火の回路」もそろそろ後半に差し掛



レストラン「クレッシェント」の現在の外観（東京都港区）

かる。前年は司馬遼太郎に譲った文壇長者番付の首位を、この年は奪還する人気作家だ。少壮の男性は考古学者の森浩一（一九二八—二〇一三年）、当時四十五歳。勤め先の同志社大学で教授に昇任したのが二年前、そのころ奈良県明日香村の高松塚古墳で人物や四神を描いた壁画が見つかり、新聞や雑誌の座談会に呼ばれて忙しい思いをした。翌春は考古学志望の学生が急増したが、さらに一年経ち、過熱気味だった騒動は収まりつつある。

この夜は京都に住む森が東京でシンポジウムに出席する機会をとらえ、清張が招いて食事をともにした。シンポジウムは東京大学の大林太良や京都大学の上田正昭らを交えて二日間に行われ、のちに学生社から「シンポジウム日本の神話」シリーズの第五巻『日本神話の原形』として刊行される。

森は後年『食の体験文化史』全三巻を著すなど、食に対する関心は人一倍強い。体験、という言葉が示すとおり、知的好奇心にとどまらず実生活でも食べることが好きだった。食いしん坊、と言ってもいい。この夜は本格的なフランス料理を食べられるとあって、期待を抱いてレストランへ赴いたはずだ。

残念ながら期待はかなわなかった。のちに森はインタビューを受け回想する。

僕は今でも悔しさを覚えていますが、清張さんは食べるんですよ。一言僕に質問したら、僕ははいねいに説明しなきゃいけない。そうすると僕は食べられない。僕にしたら、あの当時ですから、今でもそうやけど、ちゃんとしたレストランのフランス料理なんて珍しかったのに、食べようかと思ったら、次の質問でまた、答えなきゃならないのですね。あまり食べられなかった。その悔めしさが今も残っています(笑)

(基礎文献①b)

清張が次々に繰り出す質問に答えている間に、高級素材を使ったフランス料理の皿が、手を付けないまま、給仕によって下げられてしまう。当の清張は森の回答を聞きながらフォークを口へ運んでいるというのに。四半世紀を経てなお森は口惜しさを語った。食べ物の恨みは恐ろしい。

清張の質問魔ぶりはこの時に限ったことではない。前述のシンポジウムでも森と同席した古代史学者の上田正昭と、雑誌の清張追悼号で森と対談した考古学者の江上波夫の証言を続けて紹介しよう。

松本さんの古代史への「史疑」は執拗であった。一九七五年の四月十五日、東京で対談したことがある。その対談は「日本神話の世界をめぐる」であった。専ら質問をされるのは松本さんで、私はその疑問に懸命に応えた。すっかりくたびれたが、その翌朝、私の滞在している宿舎のホテルへ電話で長時間にわたる質問があった。納得できるまでねばり強く「史疑」されるその姿に、改めて感動したことはあった。

(上田「松本清張の古代史研究」、基礎文献②と同一書籍)

江上 電話は始終かかってくる。彼からの電話は長いに決まっているから、まず腰掛けを用意してから受話器を取る。普通で三十分、どうかすると一時間以上になる。質問事項を克明に書いておいて、次から次へと質問してくるんですよ。

(基礎文献③b)

クレッセントでの森の悔しい思い出は、別の複数の文献にも記されている。森にとつ

て忘れたい対面だったことは間違いない。

先に、この対面の期日を「七四年の春の宵」と書いた。実は、クレッセントで清張と森がまみえたのは従来、もっと早い七〇〇七一年ごろと考えられてきた。前掲のインタビューで、森は続けて語っている。

その日は清張さんという人に初めて接しましたから、帰りしなにお願いをして記念撮影をした。それから、『芸術新潮』に「遊史疑考」が始まったんです。

清張が雑誌『芸術新潮』で「遊史疑考」の連載を始めたのは七一年一月号だ。同じインタビューで森はこうも話す。

おそらくその芝のフランス料理店で初めて会ったというのはたぶん四十五年ごろじゃないかな。

四十五年は昭和で、西暦だと一九七〇年にあたる。「おそらく…たぶん…じゃないかな」というあたりに、時期についての記憶がいまいだと自覚している様子がうかがえる。このインタビューが行われたのは一九九八年とみられる。

十年あまり後の二〇〇九年に森は、清張の生誕百年を記念して京都で開かれた松本清張研究会の第二十回研究発表会で講演した。ここでは清張との会食を、連載「遊史疑考」が始まって以降のことだと述べている。

連載が始まったころ、ある日突然、清張さんから電話がかかってきて、鏡について実に細かいことを聞かれた。(中略)電話が終わったところに、今度東京へ来る時があれば、ぜひ会いたい。幸い東京へ行く機会があつて連絡をすると、芝の増上寺の近くのフランス料理店に連れて行ってくれた。

(基礎文献④a)

いずれにせよ、連載「遊史疑考」の開始前後にフランス料理店で清張と初めて対面した、という文脈は変わらない。こうした回想に基づいてのことだろう、二〇一六年十二



月に刊行された森の著作集第五巻『天皇陵への疑惑』では、巻末に掲載した年譜の一九七一年の項に、次のような記述がなされている。

松本清張氏から『芸術新潮』に「遊史疑考」(原題)の連載に際して電話があり、その後、東京の芝のフランス料理店へ招待され、そこで多くの質問を受ける。その内容が『遊古疑考』の「三角縁神獣鏡への懐疑」の章で「森浩一の意見」として全部列挙される。

ここでは「多くの質問を受け」た内容が単行本『遊古疑考』(一九七三年刊行)に列挙された、という書き方になっているが、すでに連載「遊史疑考」の第七回(『芸術新潮』七一年八月号)に森の意見は十五項目にわたって列挙され、この部分はほぼ連載の記述のまま単行本に再録されている。すなわちフランス料理店で「多くの質問を受け」た内容は、単行本に収められる前に連載に掲載されたわけだから、『天皇陵への疑惑』巻末の年譜の記述は「森と清張の対面は連載への掲載より前だった」との見方を示している」と理解していいだろう。

先述のとおり、本稿ではクレッセントでの会食を「七四年の春の宵」としている。従来の認識とは三年ほどの差があるが、これは森が遺した手稿を今回の研究で調べた結果に基づく。

森は、自身の行動を大学ノートに一日一行ずつ記していた。旧制中学の生徒のころ、訪ねた遺跡を記録し始め、のちに遺跡以外の訪問先なども書き込むようになった。「調査の記録」と題し、五冊が遺る。森による記述は一九四一(昭和十六)年十月五日に始まり、他界する一年あまり前の二〇一二(平成二十四)年六月十七日で終わる。七十年以上にわたって書き継いだことになる。

少し横道にそれるが、森が「調査の記録」について書いた文章を紹介しよう。

昭和十六年十月五日、この日僕ははじめて遺跡といってよい土地を訪れたのだが、よほどうれしかったのか、その日から今日まで、いつこの遺跡へ行っただけをノートに書きつづけている。ずっと後には泊った土地も書くようになった。

ノートは、表紙のふちが千切れてぎざぎざになっているが、「研究調査見学の日付(調査の記録)」と書いている(中略)表紙に①とか甲とか書いたのは、二冊目になる

ときに付けたもの、二冊めからは「調査の記録」だけを題にしている、今は五冊めである。十三歳から今日まで六十数年間、訪れた遺跡、参加した発掘などをこのノートに書いている。だから変なことだが、僕の今までをふりかえると、人生のどこからが中学生、どこからが大学生、どこからが研究者というような区切りはなく連続している。

(森『わが青春の考古学』新潮文庫、二〇〇二年)

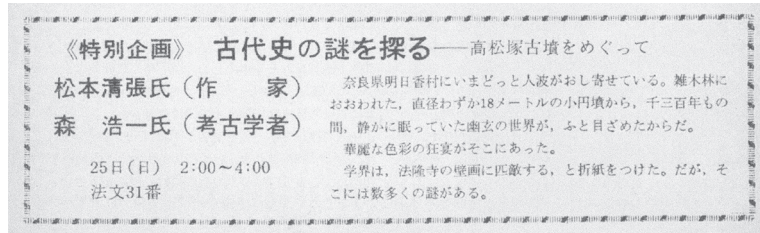
少年時代から書き継いできた「調査の記録」に対して、自身の研究人生が映し出されているように森が感じていることがうかがえる。

今回、清張との交流について研究するため、森の遺族の承諾を得て「調査の記録」を見する機会を得た。清張との出会いについての記述があるとすれば、五冊のうち一九六三年一月から七三年十月までを取めた「調査の記録2」ではないか。七一年初対面に従いそう考えたわたしは、目を皿のようにしてページをめくった。しかし、見当たらない。清張との関係が全く記されていないわけではなく、七二年六月二十五日には黒いペン字の記事がある。

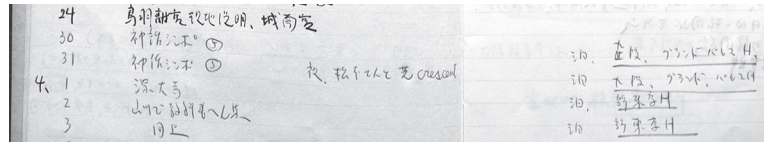
東大五月祭↓松本清張、笹山氏と話

「東大五月祭」には、横書きの罫線に沿って赤い下線が引いてある。この日、東京大学の学園祭「五月祭」で森は清張と対談した。

二〇一七年三月、ちょうど卒業式が行われていた東大の本郷キャンパス(東京都文京区)に五月祭常任委員会の事務局をわたしは訪ねた。保管されている七二年の五月祭のパンフレットを開くと、八ページの下のほうに、ページの四分の一ほどの面積を占める予告が掲載されている。「《特別企画》古代史の謎を探る―高松塚古墳をめぐる」とタイトルを掲げ、「松本清張氏(作家)」「森浩一氏(考古学者)」と太字で対談者を紹介、日時(二十五日二時から四時)と会場(法文三十一番)を記す。この年に高松塚古墳の壁画が見つかり、森が新聞や雑誌の座談会にいくつも呼ばれたと前に書いた。六月二十五日は五月祭の最終日で日曜日、話題の発掘成果をめぐる人気作家と考古学者が対談したのだから、さぞ大勢の聴衆が詰め掛けたのではないだろうか。



1972年の東京大学の五月祭パンフレットに掲載された清張と森の対談予告  
(東京大学五月祭常任委員会所蔵)



森の「調査の記録3」から、1974年3月31日の部分。「夜、松本さんと芝crescent」とある

パンフレットの別のページには「本部企画一覧」が掲載され、対談は「現代の学問」と題する企画の三番目の催しだったことがわかる。ここでは清張と森に続いて古代史研究者の笹山晴生の名が挙がる。「調査の記録2」にいう「笹山氏」であり、当時は東大教養学部の助教だった。三人の名を連ねながらも「対談」となっているから、笹山は司会を務めたのかもしれない。

この対談に関して、森は三十七年後に講演で語っている。

高松塚の壁画が出た年に、東京大学から清張さんと僕に高松塚の壁画について喋れという話が来まして、行ったことを覚えております。五月祭で、謝礼は三千円。(笑)

終わったのが四時頃なんです、清張さんが何と、酒飲みに行こうかと言うんですね。僕は、忙しい作家ですから、済んだら飛んで帰ってね、原稿の続きを書くというやろと思ってたので、驚いた。きたない食堂に入ってビール飲んで、それから六時頃か七時頃になってから、銀座の清張さん行きつけのクラブに連れて行ってくれました。あまり高い所ではなかったですけどね。(笑)しかしね、清張さんという人はそういうゆとりを持った人やった。

(基礎文献④a)

「調査の記録2」で清張の名前を確認できるのは、この五月祭の記事だけだ。クレッセントでの会食について、森は記録しなかったのか。ノートには日付が飛んでいる部分もある。森は三度の食事に出た食材を二十一年間にわたって記録し続けたことで知られるし(著書『森浩一 食った記録』に詳しい)、都道府県ごとに自身が宿泊した回数を一覧表として残すなど、「記録魔」と呼ぶにふさわしかった。しかし、すべての出来事を書き記すことはもちろん不可能だ。清張との会食のことも書き落としたのだろうか。少し落胆しながら、それでも念のため「調査の記録3」に手を伸ばした。黒いサインペンで表紙に書いた森の字によれば、一九七三年十月二十六日から八一年十月二日までの記録を取めている。ノートを開き、ページを一枚めくったところで目を疑った。下から六行目、七四年三月三十一日の項に、青鉛筆の記述が見つかったからだ。

夜、松本さんと芝crescent

店名はなめらかな筆記体で記している。森は学生時代に英文学を専攻した。学んだ同志社大学に予科、学部とも考古学の専攻がなかったためだ。横文字を書くのに抵抗感がなかったのか、「調査の記録」では海外視察で訪れた西欧の地名も、やはり筆記体で書き残している。

クレッセントでの清張との会食が明記されていたことで、わたしの気持ちは晴れやかになった。少し興奮して、「見つかりました!」と森の遺族に報告したことを覚えている。しかし他方で、疑念が次々に頭をよぎった。七四年では、森の記憶とあまりにかけ離れているのではないか。「調査の記録」で会食の年月日がわかるのに、森はなぜイ

ンタビューや講演で日時をはっきり言わなかったのだろう。ひょっとしたら七四年三月三十一日より前にも清張とクレッシェントへ行き、そこで質問攻めに遭ったのではないか。

しかし、それは考えにくい。もしも七四年が二回目のクレッシェントだったとして、そこでフランス料理を堪能できたのなら、森は回想にそう書き添えただろう。逆に、二回目も清張の質問攻めに遭って食べられなかったとしたら、必ずや森はそう付け加えたに違いない。読者や聴衆の笑いを取れるポイントを、サービス精神が旺盛な森が見逃すはずはないからである。

したがって、清張と森の初対面の日時や場所については現在のところ不明というほかない。七二年六月の東大五月祭はひとつの候補に挙げられるが、森の回想には初対面らしさがうかがえない。説明は今後の課題としたい。

クレッシェントでの会食は、清張が森を招いて実現した。なぜこの店を選んだのか。増上寺門前の威厳ある赤レンガの建物の前に初めて立ったとき、高価なフランス料理と、森や清張がどうも結びつきにくく感じた。東大の五月祭で対談したあと「きたない食堂」と森が評するような場所と一緒に飲んだ二人なのだ。森自身、「私は豪華なご馳走にさそわれるのは楽しくなく、飲み屋風の気楽なところが好きだ」と随筆で明かしている。

冒頭で紹介した『新・東京いい店うまい店』にはクレッシェントに関する記述がもう少し続くので、紹介しよう。最初の「石黒さん」はクレッシェントの経営者の石黒孝次郎を指す。

石黒さんはこの四階にある「三日月」という美術商の主人である。(中略)祖父上はわが国の軍陣医学を確立された軍医総監で古美術に明るかった趣味人、父君は農相。

クレッシェントの経営者は美術商をも営んでおり、祖父は軍医総監、父は農相だった。祖父の石黒忠恵(一八四五―一九四一年)は日本の陸軍軍医制度の創設者として知られる。今の福島県伊達市に生まれ、江戸に出て医学所に入學。維新後は大学東校の少助教を経て兵部省へ転じ、軍医として佐賀の乱や西南戦争に従軍した。八九年に陸軍軍

医総監となり、翌年には陸軍軍医の人事権を握る陸軍省医務局長に就任した。三代のちの医務局長が森林太郎(鷗外)である。

日清戦争では陸軍部の野戦衛生長官として広島大本営に従軍したが、戦地の兵員に脚気が大流行し四千人もの死者が出た。海軍は脚気の原因を食料とみて兵食に麦飯を採用したが、陸軍は病原菌説を信じて白米の支給を続けたためだ。陸軍の軍医監だった森林太郎は兵食試験を行い、白米優位を主張。上司の石黒忠恵はその意見を採用した。

一九〇一年、予備役に編入。以後は貴族院の勅選議員、枢密顧問官、日本赤十字社長などを務めた。山県有朋や大山巖、児玉源太郎、益田鈍翁とも懇意だった。口述した自伝『懐旧九十年』は岩波文庫に収められている。

その長男の石黒忠篤(一八八四―一九六〇年)は東京帝国大学を卒業後、農林官僚となり、農政課長や小作課長、農務局長などを経て農林次官に就任。農本主義の立場から農業振興や農村救済に取り組み、「農政の神様」と呼ばれた。一九四一年の第二次近衛内閣で農林大臣、四五年の鈴木貫太郎内閣で農商大臣に就いたが、戦後は公職追放され、解除後に参議院議員を務めている。

クレッシェントの主である石黒孝次郎(一九一六―一九九二年)は、祖父忠恵とも父忠篤とも違う道を歩んだ。旧制成蹊高校から京都帝国大学へ進み、卒業後は三井物産に入社した。徴兵検査に合格し陸軍に入隊、シンガポールで敗戦を迎える。翌年、復員し三井物産を退社、四七年に西洋古美術店「三日月」を芝に開いた。経営の安定を図るため五八年に開いたフランス料理店がクレッシェントだ。

石黒孝次郎の興味は西欧の骨董から中近東の古美術へ移り、五九年には母校京大のイラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査団第一次調査に参加した。古美術品を売買するだけでなく研究者の顔も持ち、のちに日本オリエント学会や古代オリエント博物館の理事に就いた。

石黒と清張はつながりがあったのか。石黒の晩年に秘書を務めた寺下真理子に今研究のためインタビューしたところ、三日月の職員が清張の自宅へ招かれて古美術品の説明をしたことがあるとのことだったが、清張と石黒は特に親交が深かったわけではないようだ。クレッシェントの上階にあった三日月で清張の姿を見かけたこともないという。

一方で、石黒が参加した学術調査団に関連する記述を清張が遺しているのは興味深



い。自身が六五年にテヘランの骨董屋で買った「瑠璃碗」をめぐる一文だ。

おやじが最後に出した品物のなかに一個のガラス碗があった。正倉院の「白瑠璃碗」と全く同じ形で（中略）値段は書かないが、とにかくすぐに買った。（中略）五九年には東大のイラク・イラン遺跡調査団第二次調査が行われ、団員の深井晋司氏がやはりテヘランでギラーン出土の碗四個を購入したとある（正倉院事務所編集『正倉院のガラス』から、この店から買われたのかも分らない。

（清張「瑠璃碗記」）

ここで清張は、東大調査団の深井が碗四個を購入したという『正倉院のガラス』の記述を紹介している。石黒の著書『古く美しきものを求めて』によると事情は少し異なるようで、まず深井が一個買い、別の日に石黒が三個を求めた。京大の第一次調査が終わる、テヘランで東大調査団と同宿した際に、二人は購入した瑠璃碗を見せ合って「熱のこもった長話をした」とある。寺下によると二人は大変親しく、のちに石黒が学術論文を執筆した際には深井が「てにをは」まで校正したという。寺下は、深井が東大教授在任中の八五年に急逝するまで、その秘書だった。

五九年に石黒が参加した学術調査団の団長は、考古学者で京大人文科学研究所教授の水野清一が務めた。石黒の記述によれば、テヘランで購入した瑠璃碗三個のうちひとつを「水野先生にさしあげ」という。ずいぶん高額な贈り物とも感じるが、水野は自費で調査団参加を願った石黒に対し「大阪テレビジョンのカメラマン」という名目で特別参加を許した経緯があり（同様に細川護貞は「朝日の記者」という名目で参加したという）、そういったことへの謝礼の意味もあったのだろう。

この水野と、森は浅からぬ縁がある。初対面は一九四六年、同志社大学予科の学生だった森が京大の東方文化研究所（のちの人文科学研究所）を訪ねた。その際に水野は、対等の研究者と接するようにいろいろ教えてくれたといい、「心のなかでひそかに暖めていた理想にかなった考古学者に出会ったと思った」と森は振り返る。翌年から末永雅雄らと発掘調査した黒姫山古墳（堺市）の現場にも森は水野を招き、指導を仰いだ。森が六五年九月に母校同志社の専任講師として赴任した際は、大学院生を指導する権限のない森に代わって水野が博士課程の授業を担当した。森にとって水野は恩人であり、交

流のあった人々をしのぶ著書『森浩一の考古交友録』でも「水野先生」と敬称を付けている。同書で森が「先生」と呼んでいるのは、見出しに名前が登場する人物五十八人のうち十人に過ぎない。

クレッシェントに話を戻せば、このフランス料理店の主が考古学に造詣が深く、京都の水野清一とも親交があることを、清張は瑠璃碗の一件などを通して知っていた可能性が高い。森を招くにはうってつけの場であり、だからこそ森も「調査の記録3」に店名まで記したのではないだろうか。清張と会食した他の機会については「夜、松本清張さんら」「夜（松本さん）」など、店名を明記しない記述が大半だ。

石黒は、深井の同僚だった江上波夫とも親交があり、石黒のコレクション図録『古く美しきもの』第一巻に江上が序文を寄せている。雑誌の清張追悼号で江上が森と対談したことは前述のとおりであり、『森浩一の考古交友録』では江上も「先生」の敬称付きで登場する。清張、森、江上といった古代史ブームの立役者たちのごく近くに、石黒も位置を占めていたことは間違いない。

ちなみに寺下によると、クレッシェントは石黒の没後、別の実業家が経営者となった。スタッフが代わり、内装も変更されたが、赤レンガの外観は石黒の存命中と変わらぬ姿を伝えている。

## 突然の電話

前節で、清張と森のレストラン「クレッシェント」での会食について紹介した。森が遺した「調査の記録3」を見ると、清張との会食が六回確認できる。日付を順に並べると、一九七四年一月十八日、同年三月三十一日（クレッシェント）、七六年三月二十五日、同年五月九日、七七年五月二日、八一年七月十九日となる。

七四年の一月と三月、七六年の三月と五月、というように、二カ月ほどの間を置いて、東京に住む清張と京都の森が会食している。新幹線「のぞみ」が二時間十分ほどで東京と京都を結ぶ現在よりも、心理的な距離は遠かっただろう七〇年代において、この頻度は親密さを反映していると考えてよからう。もちろん、この六回以外にも、対談やシンポジウム、書籍の編集会議などのあとに食事をもにしている機会はあったに違いない。

こうした二人の会食は、森が東京へ行く機会をとらえて設けられることが多かった

ようだ。森の遺品に含まれる清張からの手紙には、会食の希望を伝えたり、場所や日程を調整したり、また会食後に感謝の意を伝えたりする文面が見受けられ、国民的人気作家が考古学者に対して示した細やかな気遣いが感じられる。

たとえば七四年一月二十五日消印のはがきは、次のようにしたためられた。

この前は失礼しました。有益な歓談を拝謝します。また、早速に資料を御送りいただいて有難う存じました。厚く御礼申上ます。二日ばかり旅行していたので御礼状が遅れて済みません

(基礎資料③)

はがきではあるが、礼状が遅れたことへの詫びも含む、たいへん丁寧な謝辞で、清張の律儀な人柄がうかがえる。「有益な歓談」とは一週間前、一月十八日の森との会食に違いない。このはがきによって、会食後に森がなんらかの資料を清張のもとに送り届けたことも明らかになる。

ちなみに一月十八日の会食は、考古学者の末永雅雄が朝日賞を受賞する際、森が付き添いで十六日から東京へ赴いた機会に実現した。このことは森の「調査の記録3」のほか、森から清張に宛てた手紙(北九州市立松本清張記念館所蔵)でも裏付けることができる。

八一年七月十九日の会食は、清張が原稿執筆などで利用していた東京・駿河台の山の上ホテルでの昼食だった。清張は半年前の同年一月二十八日消印のはがきで、森から贈られた書籍への謝辞とともに「御出京の節に一夕ご高論を拝聴したく存じます。その日時を御教示賜わり度くお願い致します」と面会を森に求めている。五カ月を経て同年六月二十三日付の封書では「先般は御出京の際に光文社の矢島君から御案内を受けながら小生の都合で時間が合わず誠に失礼しました」と詫び、あらためて「次の御出京はいつごろでしょうか。御予定が決まっていれば御一報願います。久しぶりにご高論を拝聴したく存じます」と森に呼びかけた。

森からの返事を受けて、六月二十九日付の封書に清張はこう記す。

七月十九日は滞在の御予定の由。小生は夕刻から折悪しく先約がありますが、昼、

どこかで食事しながら御高話を拝聴したいと思いますが如何でしょうか。日曜日のので、ホテルしか場所がないと思います。

二十日は早朝から旅行に出ますので、この十九日の昼食しか小生には残されていませんので、よろしく願います 貴意をお伺い致します。

(基礎資料⑥)

丁重な文面に、多忙な中でなんとか森に会いたいという清張の強い意向がにじみ出る。森が同意したのを受けて、次の七月四日消印のはがきで清張は「七月十七日、午前十一時四〇分、駿河台 山ノ上ホテル、地下中華料理店。まず同ホテルのロビでお待ちしております。よろしく御願します」と昼食の場所を指定した。返事を書き急いだためか、十九日の面会予定を「十七日」と誤記している。予定通り十九日に会食したことは森が「調査の記録3」に明記しており、清張も七月二十六日消印のはがきで「先日は東京で失礼しました」と謝意を伝えた。ヴォーリズが設計した歴史あるホテルで、森は清張から質問攻めに遭っただろうか、それとも中華料理をゆつくり味わっただろうか。

会食の日程調整が、電話でなく手紙で行われたことも興味深い。多忙な相手を互いに慮ったことだろう。森が清張からの手紙類を大切に保存していたことにより、二人が他界した今もこうしたやり取りを知ることができる。

清張と森がこのような親密な関係を築く以前にさかのぼってみよう。二人が接触した最初の機会は、前節で森の講演録や著作集から記述を紹介したとおり、清張から森への電話だった。このときの電話について森は一九九二年、清張の没後間もなく雑誌の追悼特集に寄せた文章で触れている。

私が同志社大学に勤めるようになり、家が京都に移ったある日、母が「松本清張さんから電話ですよ」というので、半信半疑に受話器をとった。用件をうかがう間もなく、古墳や鏡のことについての質問が矢つぎ早に発せられた。

最初は見繕いの返事をしていたが、鋭い応答がかえってきて、これは大変だと本気になって私見を述べたように記憶している。

(基礎文献⑤)

森は一九五一年に同志社大学を卒業後、大阪府立泉大津高校の教諭となり、十四年半勤めた後、六五年九月に同志社大学へ専任講師として赴任した。年度途中に母校へ転任した背景には、教授だった酒詰伸男（一九〇二―六五年）が同年五月に急逝した事情がある。後任として何人かの名が挙がったようだが、最終的に迎えられたのは森だった。

森が京都市東山区の東福寺近くへ転居したのは翌六六年の八月下旬だ。学生時代には大美野（現・堺市東区）の家から朝五時過ぎの始発に乗り、地下鉄や国鉄を乗り継いで京都の同志社大学まで休まず通った。しかし立場が教員となり、しかも各地の発掘現場へ足を運ぶことも多かったから、通勤の負担を軽くする必要を感じたのだろう。

京都へ転居した際、森の家族は妻、母との三人だった。父の於菟次郎は六年前に亡くなっていた。生前は高島屋の図案部長を務めたデザイナーで、満州帝国の皇帝旗をデザインしたともいわれる。画家や工芸家、歴史家たちと幅広い交友があり、東洋史学者の内藤湖南（一八六六―一九三四年）から贈られた墨跡が残る。森は比較的裕福な家庭で不自由なく育ったようだ。

清張からの電話を取り次いだのは、森が記した前掲の追悼文に従えば、母の雄子（九七年他界）ということになる。

この電話について、森による別の回想をみてみよう。

ある日いきなり清張さんからばくに電話がかかってきたんです。僕が同志社大学へ移ってからだから、昭和四十年代だと思います。受話器をとったらこちらの都合を訊くでもなく、どんどん質問をしてくる。最初のうちは作家が尋ねることだからと、適当に端折って答えていたら、なかなか細かいところまで質問が及んできたので、これは大変だと本気になって応答しました。優に一時間は話してましたね。

（基礎文献③b）

ここには「昭和四十年代」と、幅をもってではあるが時期が示してある。前節でみたとおり、この「優に一時間は話し」という電話によって、清張は雑誌『藝術新潮』七一年八月号に寄稿した連載「遊史疑考」の第七回で三角縁神獸鏡に関する森の国産説を



清張は森の三角縁神獸鏡国産説を連載「遊史疑考」第7回で詳しく紹介した（『藝術新潮』1971年8月号）

十五項目にわたり列挙した。したがって、森が清張から電話を受けたのは京都へ転居した六六年八月から雑誌に森説が列挙された七一年八月までの五年間に絞ることができる。昭和でいうと四十一年から四十六年までだから、「昭和四十年代」という森の記憶とも合致する。

もう少し時期を絞るとすれば、前節で紹介した二〇〇九年の清張生誕百年行事における森の講演が参考になる。重複するが、再度その発言を引用しよう。

連載が始まったころ、ある日突然、清張さんから電話がかかってきて、鏡について実に細かいことを聞かれた。

（基礎文献④a）

清張が「遊史疑考」の連載を始めたのは七一年一月号で、『藝術新潮』は毎月二十五日に翌月号を発売するのが通例のようだから、連載初回の掲載誌は七〇年十二月に発売されたと考えられる。連載が始まった「ころ」という表現はあいまいさを含んでおり、



電話の時期を特定するには不十分だが、ひとつの目安として七〇年十二月から七一年八月までを想定することは許されるかもしれない。

この時期を含む森の「調査の記録2」に、清張からの電話に関する記述は残念ながら見当たらない。けれども「調査の記録2」の記事から森の当時の行動を抽出し、併せて清張の連載「遊史疑考」を検討すると、電話の時期について、ある類推が可能だと感じることができた。

まず「遊史疑考」の連載状況をみると、『藝術新潮』七一年の新年号に初回として「序にかえて」が掲載され、二月号から「前方後円墳の謎」が三回続く。五月号に「神奈備山の起源」が掲載されたあと、六月号は「筆者の都合により、本号に限り休載いたします」という巻末の断り書きとともに休載となる。そして七月号は連載第六回「三角縁神獣鏡への懷疑(上)」が掲載され、翌八月号の第七回「三角縁神獣鏡への懷疑(中)」で森の国産説が十五項目にわたり列挙される。

ところで五月号の「神奈備山の起源」は、連載をまとめて七三年に刊行された単行本『遊古疑考』に再録されていない。六月号の休載と合わせ、その意味はのちほど考えたい。森の「調査の記録2」で七一年の記述をみると、前半の大きな出来事として考古学者の伊達宗泰(一九二七—二〇〇三年)とともに東南アジアを旅している。伊達は森が著書『森浩一の考古交友録』で「第一の親友」と位置付けた人物で、奈良県立橿原考古学研究所で森の同僚、のち京都の花園大学で教授を務めた。同書で森は、幕末の紀州藩士で尊王攘夷運動に加わった伊達千広(一八〇二—一八七七年)を親友の祖父だと紹介しているが、千広は明治期に外交官として活躍した陸奥宗光(一八四四—一九七七年)の実父として知られており、宗泰の祖父とするには年齢が上過ぎる。伊達宗泰は戦国武将・伊達政宗の四男と同じ名前を与えられたが、いたって温厚な人柄だった。『歴史と人物』一九八二年五月号に、伊達が森について書いた文章がある。

ちやうど敗戦時の混乱期から高度経済成長期の多事多難の時期をすき腹を抱えながら身を挺して考古学一筋に打ち込んだわけで、不屈の魂と強靱な実行力、的確な現実的対応はこれらの間に培われたものであろう。(中略)十数年前に共に歴訪した東南アジアの旅の途中種々雑談をした中に、すでに東アジア的視点に立ったいろいろな問題を聞き、その先覚的意見に驚いた思い出がある。

その東南アジア歴訪の旅は、「調査の記録2」によれば七一年三月二十日に沖縄を出発し、以下のような道程をたどった。

|      |           |
|------|-----------|
| 21   | 台平(注・台北か) |
| 22   | 〃         |
| 23   | 〃         |
| 24   | 香港        |
| 25   | 香港        |
| 26   | 香港・九龍     |
| 27   | バンコク      |
| 28   | 〃         |
| 29   | クアラルンプール  |
| 30   | 〃         |
| 31   | シンガポール    |
| 4. 1 | 〃         |
| 2    | ジャカルタ     |
| 3    | ジョクジャカルタ  |
| 4    | 〃         |
| 5    | ジャカルタ     |
| 6    | 〃         |
| 7    | デンパサール    |
| 8    | 〃         |
| 9    | シンガポール    |
| 10   | マニラ       |
| 11   | 〃         |
| 12   | 〃         |
| 13   | 〃         |

二十四日間の長期旅行である。このころ森は同志社大学の助教授で、春休みを利用し

たのだろう。『森浩一の考古交友録』によれば、伊達と「旅のあいだホテルでは同室だった」というから、相当な親しさだ。このうち「調査の記録2」の記事は二十九日まで二週間ほど間があく。旅の疲れと帰国後の忙しさで記録する余力がなかったのかもしれない。

三月下旬から四半月ばまで森は海外にいた。これを清張の「遊史疑考」の連載状況と照らし合わせてみるとどうだろう。雑誌によって編集の手順に違いがあるだろうし、寄稿者が原稿をメール送信する現代と、手書きの原稿を読んで活字を組んでいた四十五年前とは、原稿の締切も異なるはずだ。それを承知の上でわたしの乏しい雑誌寄稿経験からいうと、月末近くに発行される月刊誌に記事を掲載する場合、発売月の初めには入稿するよう求められる。六月号が五月末近くに発行されるなら原稿の締切は五月初め、執筆は四月中にはほぼ終える必要があるだろう。五月号の原稿なら三月中に書くことになる。四十五年前はさらに前倒しして考えたほうがいいかもしれない。

以下は憶測にすぎないが、清張が六月号の連載を「筆者の都合により」休んだ理由を、予定していた「三角縁神獣鏡への懐疑」の原稿が四月中に仕上がらなかったためだと考えてみてはどうだろう。森は四月十三日まで海外におり、昼間は遺跡を訪ね歩いてははずだ。携帯電話もメールもない当時の通信事情では、仮に清張が森に電話取材をしたと願っても、相当な困難を伴っただろうと考えられる。さらに憶測を重ねれば、五月号に向け三月に「三角縁神獣鏡への懐疑」の原稿を書こうと思っても、森は三月二十日には沖縄に行っていたから、やはり取材が難しかったかもしれない。そうした事情により原稿を仕上げられず、五月号は手持ちの材料で一回限りの「神奈備山の起源」を載せたものの、内容が気に入らず単行本から落とし、六月号は穴埋めの原稿を用意することもままならず、休載に至ったのではないか。

いささか大胆な憶測を重ねすぎたかもしれない。清張は文壇長者番付の上位の常連であり、七一年は梶山季之から首位を奪還する。当然ながら多忙を極め、同年三月時点で連載は「遊史疑考」のほか『文學界』に「古代への探求」、『別冊文藝春秋』に「砂の審廷——小説・東京裁判」、ほかに『朝日新聞』の「私の教科書批判——歴史」も受け持っていた。五月には同紙で「身辺的昭和史」、『週刊文春』で「西海道談綺」の連載が始まる。それらの準備も重なり、忙しくて『藝術新潮』の原稿を書けなかった、との見方もできるかもしれないし、なにか健康上の不調などが「筆者の都合」となった可能性も考えうるかもしれない。

海外旅行中の森に連絡がつかず七一年六月号の「遊史疑考」を休むに至った、という仮説を検証するため、『文學界』の連載「古代への探求」が同じ号でどうだったかをみてみよう。「古代への探求」は「遊史疑考」と全く同期間、七一年一月号から七二年十一月号まで連載された。七一年六月号は『文學界』の創刊四百号記念の特別号と位置付けられている。目次は清張の「宗像紀行（古代への探求）」を二七四ページからと示し、そこを開くと本文は次のように始まる。

本号は記念号で掲載原稿が輻輳するので、枚数も減らしてくれという編集部からの注文により、予定を少し変えて随筆体にする。お祭りにカタ苦しい出しものをつけることはあるまい。

四月初旬、九州の講演旅行の途次、福岡県の宗像神社に立寄った。（以下略）

清張は「古代への探求」を休載していない。のみならず、『文學界』編集部から特別号の原稿が多いので枚数を減らしてほしいと頼まれている。つまり、他の月よりも執筆の負担はむしろ軽かったといえそうだ。

「九州の講演旅行」については同誌の四月号、一三三ページに全ページの予告が載っている。文藝春秋の文化講演会を四月六―九日に福岡、北九州、柳川、唐津の四市で順に開く、との内容で、講師は清張、佐藤愛子、開高健の三人だ。六月号の「宗像紀行」には予定通り連続講演の旅へ赴いたことが記しており、健康状態も特段悪くなさそうな様子がかかる。

超多忙でも健康不良でもなかったとすれば、「遊史疑考」を休載した「筆者の都合」とはなにか。休載明けの七月号から「三角縁神獣鏡への懐疑」を開始し、八月号では森の国産説を十五項目にわたって列挙した。森説を詳細に紹介するためには、やはり森への取材が不可欠だっただろう。森が東南アジア歴訪の旅に出たため連絡が取れず、やむなく六月号を休載した、という仮説が説得力を増してきたのではないだろうか。

ちなみに「三角縁神獣鏡への懐疑」の項は、七月号の（上）、八月号の（中）に続いて九月号は（下ノ一）となり、十月号の（下ノ二）で完結する。清張は連載「遊史疑考」で三角縁神獣鏡の問題を取り上げるにあたって、森への取材を欠かせないと考え、そのために休載という非常手段すら採用した。森に取材することなく三角縁神獣鏡をめぐる原

稿を書くことは、清張にとつてあり得なかつた。そして電話取材をした結果、三回で終わる予定が不規則なたちで四回に延びた。それだけ森に初めて話を聞いた手応えが大きかった、というのが、現時点でのわたしの考えである。

森が受けた突然の電話は、清張にすれば待ちに待った森への取材の機会の到来であり、それほど待った甲斐は十分にあったに違いない。その時期は、森が東南アジア歴訪から帰国した七一年四月半ば以降だろう。そうやって書かれた「三角縁神獸鏡への懷疑」の内容については、次章「定説に挑む」で詳しく紹介する。

森と清張が初めて言葉を交わしたのは、七一年に清張が森にかけた電話によつてだった。ただしそれ以前から森は清張の作品を読んでいたし、清張も森の著作に目を通していた。

清張は連載「遊史疑考」において三角縁神獸鏡の国産説を紹介する中で、森の著作を挙げている。森説を十五項目にわたつて列挙する上でまず参考にしたのが七〇年刊行の『シンボジウム 古墳時代の考古学』（學生社）で、連載の中では「三角縁神獸鏡への懷疑」の項に先立つ「前方後円墳の謎」の項でも同書を参照している。清張はまた、学習研究社の『日本と世界の歴史 第1巻 古代』（六九年）に森が分担執筆した「銅鏡・銅剣 神獸鏡をめぐるなぞ」からも引用しているが、同書について「このシンボジウム（注・學生社刊の前掲書）のあと」と清張が書いているのは、刊行年次からみて「シンボジウムの前」の誤りだろう。このほか森が携わつた大和天神山古墳（奈良県天理市）の発掘調査報告書（六三年）も挙げている。ただし「（森が同書で）この説をはじめのぞかせているそうだが」という書き方からみて、清張はこの報告書を読んでいなかったようだ。

森が初めて三角縁神獸鏡の国産説を活字で発表したのは、清張のいう大和天神山古墳の報告書ではなく、六二年に刊行された學生社『古代史講座3 古代文明の形成』に収まる「日本の古代文化―古墳文化の成立と発展の諸問題―」だった。この論文の題名は清張の「遊史疑考」に見当たらない。

清張は、先行する研究に幅広く目を通し、それらの的確な分析を通して自説を展開する、学者はだしの研究態度で古代史に臨んでいた。その点は、専門の研究者たちが口を揃えて称賛したところだ。たとえば森は次のようにいう。

松本氏は、実に丹念に研究史を整理する。私のようなずばら者は研究史を軽視しがちであるが、今日的にはあまり評価されていないような学説でも、原典にあたつてずらりと配列してみる。そうして凸凹している箇所をみつけるとそれが生じた原因を考える。すると忘れられていたような先人の説、あるいは同時代のいわゆるプロの平凡そうな説や要約が輝きをもったりする。もちろんおびただしい研究書のことだから、すべてを点検することはできないが、とにかく可能なものについては自分で探索されているようである。

（基礎文献⑦a）

清張は学術書にもためらわず手を伸ばした。自伝的作品『半生の記』の昭和二十二（一九四七）年ごろの記述には、京大に日本初の考古学教室を設けた濱田耕作（青陵）が著した『豊後磨崖石佛の研究』（一九二五年刊）を以前読んだと書いているし、この研究書を清張は小説『陸行水行』にも登場させた。こうした文献資料に対する清張の博搜ぶりを知るにつけ、森の重要な論文を挙げていないのは意外な気がする。

二〇一六年八月、わたしは今研究の調査を行うため、北九州市立松本清張記念館を訪ねた。あらかじめ、清張の蔵書のうち森関係のものを閲覧したい、と願ひ出ていた。学芸員の下澤聡は七十九冊のリストを用意して待っていてくれた。これもまた意外なことだが、「遊史疑考」にあれば引用された『シンボジウム 古墳時代の考古学』が三万冊の蔵書に含まれず、書名さえ挙がっていなかった『古代史講座3 古代文明の形成』は遺されているという。学芸員室で閲覧した同書は昭和三十七（一九六二）年の初版本で、函が少し傷んでいるが本文は線引きも書き込みもなく、読み込んだ気配は薄かった。もつとも下澤によると、清張はあまり蔵書に書き込みをしなかったようだという。清張は、ひとつのテーマでの執筆を終えたあと、用の済んだ書籍を古書店に引き取らせていた。文藝春秋の編集者として清張を長年担当した藤井康栄が、私物の資料まで処分された苦い思い出とともに著書『松本清張の残像』で証言している。『シンボジウム 古墳時代の考古学』もそうした道をたどったのだろうか。森と清張の関係の始まりを物語る数少ない物証となり得ただけに、惜しい気がした。

森が初めて読んだ清張の著作は、旧蔵の掲載誌が愛知県春日井市の森浩一文庫に保



管されている。小説「風雪断碑」を載せた一九五四年の『別冊文藝春秋』第四十三号で、森から寄贈を受けた後、テープで補強し整理ラベルを貼ってある。この雑誌を手に入れた経緯について、森は二通りの説明を遺している。

「別冊文藝春秋」を人から貰いましてね、たまたまそこに載っていた『風雪断碑』（中略）を読んだんですよ。おそらく、松本清張という名も知らないころでした。

（基礎文献⑧）

必要な専門書だけは何とか買っていた程度の給料なんです。ところがこの雑誌だけは買っているんですよ。しかも不思議にいまだに持っている。

（基礎文献①）

譲り受けたか購入したかを「思いだせない」と書いた文章もある（基礎文献⑦a）。どちらであったかは別にして、早世した考古学者の森本六爾（一九〇三—三六年）をモデルにした短編小説「風雪断碑」を読み、森は感銘を受けた。森が大学で英文学を専攻したことは前節で触れたが、若いころの森は考古学一辺倒ではなく、映画や音楽を楽しみ、小説も読んでいた。旧制堺中学の郷土史班で二年後輩だった田中英夫は、古墳を見学に行く際に森が「軽騎兵」序曲やシューベルトのセレナーデを口ずさんでいたのを覚えている。田中の手元にある地元青年会の機関紙（四八年刊）は、二十歳の森が「K・M生」の筆名で発表した掌編小説「ローランサンの横顔」を掲載しており、考古学青年であると同時にロマンチックな文学青年でもあった一面がうかがえる。

森は考古学の専門書以外に数多くの随想を発表した。そうした著作は大勢の読者を得たが、そこには森の文才が一役買っていたに違いない。「風雪断碑」の読後感も、森は印象的な表現で随筆に記した。

森本六爾は、中学校をでただけの学歴で、あとは独学、実家も普通の農家であって、その財力が能力にプラスすることはまずなかった。この経歴で、当時のいわゆる官学の大学者と対等に、それどころか気力と着想の鋭さでははるかに優れた業績をのこし、弥生文化が原始農耕文化であることの学問的体系の骨組みをたてた。だが学



森旧蔵の『別冊文藝春秋』第43号。清張が短編小説「風雪断碑」を発表した（愛知県春日井市・森浩一文庫所蔵）

問とさしちがえたといつてよいほどの凄じい生涯をおえたことは考古学界ではよく知られていて、多少インテリ風に傾斜した角度を修正すると、戦後の若年層の研究者にはひとつの生きる目標であった。

その森本六爾が、考古学の閉じられた社会からまるで小説という魔術によって万人注視の天空へ向って浮遊させられたのであったから、われわれが驚いたのは無理なかつた。

（基礎文献⑦a）

森本六爾を「浮遊」させた清張の小説への驚きは、同年代の考古学者に共通していたようで、森より二歳上の大塚初重は二〇一三年におこなった講演で次のように回顧している。

読んでショックを受けました。私だけではなく、全国で考古学を勉強していた若手研究者は、違いはあっても、非常に感動したと思うんですね。

森本六爾は（中略）かなり個性の強い研究者で、京都大学でも東京の上野の博物館



でも就職ができなかった。しかしその学問的な系統は、京都大学の小林行雄とか諏訪にいた藤森栄一、明治大学の杉原莊介など、当時二十一、二歳の若い、在野の考古学研究者に非常な影響を与えて、後の「東京考古学会」を創った。その生涯を清張先生がお書きになった。すばらしいなと、この作家はすごいなと思いました。

（講演録「清張先生のウラ・オモテ」）

大塚は森本の影響を強く受けた杉原莊介（一九一三—一八三年）の門下生にあたるから、感激はひとしおだっただろう。

森は五四年に発表された「風雪断碑」の作者として清張の名を記憶し、六六年に大阪から京都へ転居する際も掲載誌を手放さなかった。ただし、清張の小説を愛読するようになったわけではない。「風雪断碑」から十七年後に清張の電話を受けたとき、森の頭に電話相手の作品が浮かんだとしたら、その短編を聞いてほかになかっただろう。高校教諭から同志社大学の教員となったころには、森は考古学に全力を注いでいた。

## 第二章 定説に挑む

### 鏡の製作地

清張が突然の電話で森に意見を聞き、雑誌『藝術新潮』に連載していた「遊史疑考」の「三角縁神獸鏡への懷疑」の項で森の意見を十五項目にわたって列挙したことが、二人の関係の始まりだった。ここで、森が一方の立役者を演じた三角縁神獸鏡をめぐる論争について概観しておこう。

古墳を発掘調査すると、人物を埋葬した棺や石室から、副葬された銅鏡がしばしば見つかる。三角縁神獸鏡は、日本の古墳から最も多く見つかった鏡で、五百面以上が確認されている。多くは直径二十センチを超える大型の鏡で、文様のある面（裏面）をみると、三角縁の名のとおり、周囲を取り巻く縁の断面が三角形に盛り上がりついている。縁の内側に鑄出された文様は、これも名のとおり神（中国の神仙思想に由来する西王母や東王父）と獸の姿を主題としている。この「三角の縁」「神獸の文様」「大型」の三つの要素が、三角縁神獸鏡の特徴とされる。

考古学者の間では、この鏡の製作地をめぐる論争が今も続いている。中国の史書『三国志』の魏書の東夷伝、倭人の条（いわゆる魏志倭人伝）に、魏の皇帝が景初三（二三九）年、倭の女王卑弥呼に銅鏡百枚を与えた、との記述がある。下賜されたこの銅鏡は三角縁神獸鏡だった、とする説があり、邪馬台国大和説の論拠として、これもいまだに決着しない邪馬台国の所在地論争につながるためだ。

大正時代に京都大学の東洋史学の富岡謙蔵（一八七三—一九一八年）が銘文の研究を基に三角縁神獸鏡は魏で製作された鏡だと唱え、こうした魏の鏡が大和を中心とする近畿地方で多数見つかることから、邪馬台国大和説の物証だと論じた。この説を梅原末治（一八九三—一九八三年）が引き継ぎ、魏の鏡である三角縁神獸鏡が百年以上ものちに築造された古墳から見つかる理由として、鏡が伝世したためだと説明した。小林行雄（一九一一—一九九九年）は、全国各地の古墳で見つかった三角縁神獸鏡に、同じ鑄型（范）から鑄造された鏡が複数存在することを指摘。一九五三年に国鉄奈良線の拡幅工事で三角縁神獸鏡が三十二面見つかった樺井大塚山古墳（京都府木津川市）の被葬者を、邪馬台国の中枢にいた人物と位置づけて、関東から北部九州まで各地の豪族に



新山古墳（奈良県広陵町）出土の三角縁神獸鏡（宮内庁書陵部陵墓課編『山陵の遺寶 宮内庁書陵部所蔵出土品選』から転載）

大和の王権から三角縁神獸鏡が配布されたとする説(同范鏡理論)を打ち出した。

彼ら京大の研究者たちが主として担った魏鏡説に対して、三角縁神獸鏡は国産だと唱え、真つ向から反論したのが森だった。

前章でも触れたが、森は一九六二年に學生社が刊行した『古代史講座3 古代文明の形成』に「日本の古代文化―古墳文化の成立と発展の諸問題―」を執筆し、初めて三角縁神獸鏡の国産説を公にした。論拠は極めて明快だ。

魏鏡と推定されてきた三角縁神獸鏡は、邪馬台国大和説、ひいては古墳文化の成立を大和に求めようとする学者が掲げる有力な資料である。小林氏らが中国鏡だと推定している古墳出土の三角縁神獸鏡はすでに三百枚以上に達しているが、その大部分を魏鏡と断定することには賛成できない。魏鏡とできない理由は簡単であって、三角縁神獸鏡は中国大陸からかつて一枚も発見されていないからである。

近年、中国で三角縁神獸鏡が一面見つかったと報告されたが、これも発掘調査によるものではない。学術的に資料として検討する価値のある出土例は、中国大陸においていまだ皆無だ。

森は続けて、素材である銅の質が三角縁神獸鏡は後漢鏡や画文帯神獸鏡に比べて悪い▽神獸の表現も三角縁神獸鏡は簡単である▽中国文字の銘があるだけでは中国鏡の根拠とはならない―と指摘。「小林氏も、鏡そのものの説明から魏鏡としたのではなく、この鏡が大和を中心に分布する実態を魏鏡であることの傍証としているが、これは大和が邪馬台国であるとの先入観にたつてのことであり、三角縁神獸鏡が魏鏡であることについては何の証明にもなっていない」と批判した。「小林氏」とは先述の小林行雄で、当時の肩書は京大考古学研究室の専任講師。五四年に日本学士院恩賜賞を受賞するなど、有力な論客として知られていた。清張が小説「風雪断碑」のモデルにした森本六爾の影響を強く受けた一人でもある。

森の国産説を学界はどのように迎えたのだろうか。三十六年後のインタビューで、森は次のように語っている。

当時ばかりは高校の教師だったからね、「素人が何をいうか」みたいな批判がきた。た

だその中で、東大の大学院で授業を持っておられた斎藤忠先生が、それをテキストにしてくれた。そういう違いがでたわけです。(中略)片一方は素人に近いようなやつ这种事情は読むな、というわけですよ。

(基礎文献①a)

「京大系の人たちは、素人の考えだといって無視したんです。無視したということが今悲劇になっているわけです」とも述べた。思い出すほどに怒りがこみ上げる、といった風情だ。この点について、京大系の流れをくむ考古学者で森より二十九歳若い大阪大学の福永伸哉は、魏鏡説の立場をとりながらも、三角縁神獸鏡の研究史として森の学説の先進性と学界の反応を率直に語っている。

最初にそういう反論を唱えたのは、同志社大学におられた森浩一先生です。(中略)今から思えば非常に早い時期に、たいへん鋭い指摘をされたわけです。しかし、その後研究者の間では森先生の指摘が充分に吟味されることはありませんでした。

(福永「魏晋の銅鏡生産と三角縁神獸鏡」)

ただし、「無視」といっても無反応ではなかったようだ。同志社大学での森の教え子で考古学者の中村潤子は、当時の師の口ぶりまで想像させるこんな思い出を森の没後に記した。

国産説に対する批判の声は先生が予想していたよりも遥かに大きなものであったという。「そこで、わし、さすがに自分が間違<sup>まちが</sup>うてるんじゃないかと不安になってきたから、自分の考えたことを一からひとつひとつ間違いはないか考えなおしてみたんや。そのうえで、おんなじ結論に達したから、わしの考えは間違<sup>まちが</sup>うてないと確信したんや。」というようなことを話されたのである。

(中村「三角縁神獸鏡の国産説」)

森が自説に不安を抱くほど批判は強く、けれども国産説が正面切って吟味されることはなかった。森の回顧のなかの「素人が何をいうか」という言葉が象徴するように、

学説の是非よりも森の研究者としての適性を問うような、ねじ曲がった批判が渦巻いたのではないだろうか。

森は「素人」扱いされたと証言するが、同時代に京都大学で考古学を講じた教官たちの学歴は、新制の同志社大学を出た森に比べて特段に高かったわけではない。京大に考古学教室を開いた濱田耕作こそ東京帝国大学を卒業していたが、梅原末治は同志社普通学校（現・同志社高校）卒、小林行雄は神戸高等工業学校（現・神戸大学工学部）卒だった。奈良県立橿原考古学研究所の初代所長を務めた末永雅雄（一八九七—一九九一年）も大学は出ていない。梅原や末永は濱田に才能を見いだされ、考古学者の道を歩んだ。

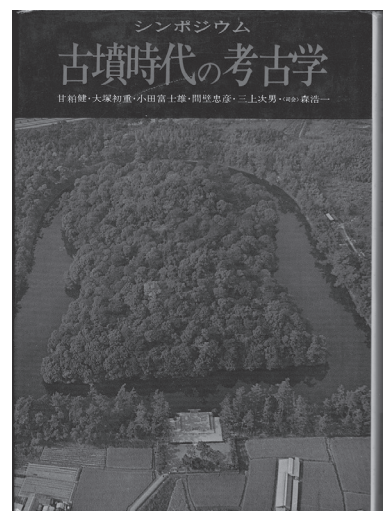
森は小学五年生のとき自宅近くの川で須恵器の破片を拾い、考古学に目覚めた。十七歳で敗戦を迎える直前、和泉黄金塚古墳（大阪府和泉市）で陸軍が塹壕を掘った痕跡を見つけ、末永に働きかけて一九四五年十一月から発掘調査を行った。きわめて早熟な考古学少年であり、同世代の大塚初重は「根っからの、生え拔きの考古学者」と森を評する。その森が京大の小林らから、高校教諭だからと「素人」扱いされたのであれば、理不尽だと憤ったとしても無理はない。

付け加えれば、末永は梅原と対立して京大考古学研究室を離れた経緯があり、のちには京大の梅原と小林の間にも確執が生じた。森は十代から末永の協力を仰いで古墳の発掘に携わり、周囲からは末永の一番弟子のように受け取られる一方、京大の梅原の研究室にも出入りした。学生時代には、研究者間の派閥争いに巻き込まれるのを避けようと「学生考古学研究会」を組織している。考古学者たちが織り成す複雑な人間関係が森の三角縁神獣鏡国産説への批判の背後にあったことは留意すべきだろう。

この状況に一石を投じたのが、清張の「遊史疑考」だった。『藝術新潮』の七一年七月号から十月号まで、四回にわたって「三角縁神獣鏡への懐疑」を執筆し、特に二回目で森の国産説を詳しく紹介した。

原稿を書くにあたって清張が参照したのは、森が編集した『シンポジウム 古墳時代の考古学』だ。考古学者五人（甘粕健、大塚初重、小田富士夫、間壁忠彦、三上次男）を相手に森が展開した国産説は、清張に感慨をもたらしした。

わたしは、これを読み、かねての疑問を専門の考古学者も抱いていることを知った。



森が司会、編集した『シンポジウム 古墳時代の考古学』（学生社）

もちろんわたしはこれほどまでに森説のような根拠を持っていたわけではないが、これによってわたしの中にあつた疑問が相当具体的にされたのである。

（基礎文献①a）

森の国産説に接するまでに、三角縁神獣鏡の魏鏡説に対して清張が抱いていた疑問は、やはり中国から一面も出土しないことに基づいていた。

わたしは三角縁神獣鏡が、明らかに仿製鏡と分るものは別として、その他のことごとくが舶載鏡であるかどうかを以前から疑問に思っていた。中国・朝鮮から一面の発見もなく、日本の出土古鏡のなかで爆発的に多い以上、この疑問はだれもが当然に抱くであろう。

（基礎文献①a）

清張が三角縁神獣鏡に関心を寄せたのは、おそらく邪馬台国の所在地論争が起点だろう。清張が『中央公論』の連載「古代史疑」で邪馬台国九州説の立場を明言したのは、「遊史疑考」より五年早い一九六六年のことだ。邪馬台国大和説の有力な物的証拠とされた三角縁神獣鏡の魏鏡説に対して疑念を持つのは不思議ではない。そうした「だれもが当然に抱く」疑問はしかし、富岡謙蔵以来の研究を受け継いできたと自負する小林行雄によって次のように一蹴される。



もし三角縁神獸鏡が魏の鏡でないとすると、たしかに魏の鏡といえるものは、さきの景初三年鏡一枚だけが、日本の古墳から発見されているにすぎないということにもなりかねない。事実、そういう議論が、近ごろも横行しているのは、あまりにも先学の研究を無視したものである。

そういう思いつきの議論はべつにすれば、三角縁神獸鏡のなかには、たしかに魏の鏡と考えなければならぬものがあることは事実である。

#### (小林「古鏡」)

清張は、小林によるこの批判の前半部分を「遊史疑考」に引用し「先学の研究無視は先学の結論に背徳することであって、それは非難するべきことだと反論はいつているかのである」と皮肉った。研究の世界に身を置かない清張だからこそできた反駁といえよう。

小林のいう「景初三年鏡」とは景初三年（卑弥呼が魏から鏡百枚を下賜された年）の年号が銘文に刻まれた平縁の画文帯神獸鏡で、森が末永雅雄に働きかけて実施した和泉黄金塚古墳（大阪府和泉市）の発掘調査で見つかった。小林の論調は、あたかも森が国産説によって自己の発掘成果のみを正当だと主張しているかのような印象も与える。

「思いつきの議論」という小林の厳しい言葉は、ある面では森への意趣返しかもしれない。森は大和天神山古墳の発掘調査報告書（六三年）で、鏡の伝世をめぐる小林らの見解を取り上げ、次のように断じた。

古墳の推定築造年代と製作年代との間に極端なひらきのある舶載鏡については、まず資料そのものの集成と戦後の中国本土での鏡の出土例を調べ中国での伝世の有無を検討することがまず重要であろう。性急な解答もそのような基本的検討を踏んだ上でのものでない限り単なる想いつきの域をでない。

「中国本土での鏡の出土例」が、三角縁神獸鏡は中国で一面も見つかっていない事実を指しているのはいうまでもない。そうした本質的な指摘はしかし、「単なる想いつき」という言葉のインパクトに押され、「思いつきの議論」という小林の応酬を呼んだのではないだろうか。その大和天神山古墳の報告書をめぐり、小林は著書『古鏡』で次

のような森批判も展開した。

こうして大和政権の内部にあつめられた鏡は、時にはある個人の所有品として、一つの古墳に副葬されることもあった。たとえば、奈良県天理市柳本町の天神山古墳の鏡群などが、それにあたるもので、古い後漢の鏡もあれば、まったく中国鏡とは無関係な文様を鑄出した仿製鏡もまじっている。この古墳の報告書の執筆者は、この鏡群のなかには魏の鏡をふくんでいないということなどを理由にして、古墳の年代をかなり古いもののように思いこんでいるらしいが、仿製鏡があるという点などからいっても、このようにちがった解釈をくだす余地が多いのである。

三角縁神獸鏡をめぐる論議は、感情的な批判合戦の様相を帯びてくる。そこへ森説の支持者として、人気作家の清張が現れたのである。

清張の強みは、素人だと自認していることだった。「素人が何をいうか」という批判をのちのちまで記憶から消せなかった森と異なり、清張は素人としての自己を前面に押し出し、その地点から専門家を批判し返す。

三角縁神獸鏡は中国鏡に擬し、しかもオリジナリティに富んだ和製鏡ではないかと疑いたくなる。これは素人の疑いであろう。学者は、兎角こうした素人の疑いを喰い、頭から受けつけようとはしない。だが、素朴な疑問の中には真理として考えてみなければならぬものがある。かえって学者のほうに、あまりに専門的に知り過ぎたために、既成概念（先学の業績からくるものが多い）にしばられて視点の固定化、思考の硬直化がありはしないか。

#### (基礎文献①a)

批判合戦のなかで見失われてしまいそうな本質の議論に、清張が再び光を当てた。そのことを森は感謝を込めて振り返った。

これは昭和三十七年に『古代史講座』（学生社）に書いたときからの考えですが、その頃はほとんど賛成者もいなくて、悪戦苦闘していました。ところが、清張さんはそれ



をしつかり読んでくださった。(中略) 清張さんはきちつと本をお読みになるし、重要な意見としてその特徴を捉えてくれる。そういう意味では、やっぱり僕はうれしかったな。

(基礎文献②)

自説の支持者であることよりも、清張が双方の論をきっちり読んだうえで判定を下した点をこそ、森が喜んでいることに注目したい。

「ほとんど賛成者もいなくて」と森が述懐するとおり、論争相手は小林だけではなかった。清張が連載で触れているが、『シンポジウム 古墳時代の考古学』で森が討議した五人の考古学者も、小林のような感情的な態度はとらなかったものの、森の国産説に同意していない。「三世紀という時期の日本にあれだけの鏡ができたかどうか、ということが一番大きな問題だと思う」という三上次男の発言を、清張は「最大公約数的な批判的疑問である」と評している。

三角縁神獣鏡の製作地をめぐる論争は、森の存命中には決着しなかった。森は一九九〇年、魏鏡説に立つ考古学者の金関聖、佐原真との座談会に臨んだ。その席で金関は、江戸時代の両替商が小判を、現代なら銀行員が紙幣を、触り慣れていくうち手で偽物をチェックできるようになる、としたうえで「物に沈潜して鏡をずっと見ていれば」「一種の暗黙知のように」「確信を持って例えばこれは舶載鏡だとか、これは仿製鏡だとかいう一つの基準ができる」と述べた。

この論理では、鏡の実物に触れる経験こそが、鏡を見分ける能力を生むことになる。鏡に触れる経験などできないアマチュアの研究者に、製作地を論じる力があるはずがない、という結論に至りそうだ。これに対して森は、専門家が「舶載」と位置付けてきた銅矛の鑄型が吉野ケ里遺跡で見つかり、一転して日本製だと位置づけられるようになった事例を挙げ、金関に反論した。

例えば北部九州の銅剣やら銅矛の場合でも(中略) 鋭利なもの、つまり武器として実用になるのは舶載なんだ、朝鮮半島で作って持ってきた、そして武器として使えないような物、つまり非実用的な物はこちら製だろうということで、舶載と仿製という言葉で分けてきた。

しかし今度、吉野ケ里から銅矛としてはほぼ一番古い段階の鑄型も出た。吉野ケ里だけではなく、その横の大和町惣座遺跡からも鑄型が出た。(中略) 当時はそういう銅剣・銅矛の研究者のブロミたいな人が、懸命におやりになって、その努力はそれで認めるけど(中略) 十年二十年の研究は一気に、今度のあの吉野ケ里から銅矛の鑄型が出たことによって、出た瞬間に消えた。

両者は互いに納得せず、「三角縁神獣鏡の鑄型が見つければ、製作地をめぐる論争は決着する」という先送りの結論で、座談会は次の話題へと移る。

わたしは、森が編集した『シンポジウム 古墳時代の考古学』(一九七〇年)に出席した考古学者の大塚初重に二〇一六年九月、今研究の調査の一環としてインタビューした。森が提起した三角縁神獣鏡の国産説について「森さんは関西の若手として相当勉強してるし、自由な発想力、理解の仕方があった。既成の考古学の考え方から飛び出ちゃうのが森浩一の本質だな。そこに清張さんが飛びついた。ほとんどの考古学者が中国鏡説だったが、清張さんは邪馬台国九州説だったから。僕は戦後に大学に入って考古学という学問があるのを知ったくらいで、当時はコチコチの畿内説でした」と八九歳の考古学者は振り返り、数年前に森と同じく国産説へと自説を改めたことを明かした。そして、こう付け加えた。「森さんは全国を股にかける行動力もあり、考古学者として一流だった。そして考古学以外の世界にも窓が開くというか、道が通じる人でしたね」

連載「遊史疑考」で四回にわたり三角縁神獣鏡をめぐる論争を紹介した結論として、清張は三角縁神獣鏡について「全部が日本製作であろうという考え」を披露した。森の国産説は当時、一部を除いて大半が仿製(国産)鏡である、との内容だった。清張を追悼する雑誌での江上波夫との対談で、森はこんな思い出を語っている。

あるとき清張さんがぼくのところへ電話をかけてきて、「あなたの説は、一部がまだ中国製の可能性を残している。しかしぼくは全部が日本製だと思う。こう言うのはぼくが初めてだよ」と言うんですね。その後も会うたびに「ぼくが初めてだよ」と力説される(笑)。そういった稚氣あふれる面も清張さんにはありましたね。

(基礎文献③b)

## 町人と官僚

三角縁神獸鏡をすべて日本製だと言ったのは自分が初めてだ、という清張の「稚氣あふれる」主張は、学界で有力な魏鏡説に対して単身、国産説を掲げ立ち向かう森への敬意が言わたのかもしれない。清張が抱いた素朴な「三角縁神獸鏡への懷疑」は、大学で考古学を教える専門家の森によって、学問的な裏付けを得た。清張が連載で森の国産説を取り上げた一九七一年当時、森は同志社大学助教授で、名著『古墳の発掘』を世に出して六年が過ぎていた。

一方の森にとっても、絶大な人気を誇る芥川賞作家からの支持は心強かったに違いない。国産説を初めて唱えたころ、森は大学を卒業後に赴任した大阪府立高校の教諭だった。「当時頃は高校の教師だったからね、『素人が何をいうか』みたいな批判がきた」という森の回想には、大学に籍を置かない研究者が考古学の専門家として認知されなかった時代の苦い経験が込められている。

のちに日本を代表する考古学者のひとりとして高い知名度を得るようになった森を知る身には、若いころの苦衷を想像するのは容易でない。しかし、国産説を初めて発表した六二年の学生社『古代史講座3 古代文明の形成』を開くと、巻末に掲げた各巻の執筆者一覧で森の肩書が空欄になっているのに気付く。全十三巻の執筆者は延べ百五十七人にのぼり、その中で肩書が空欄なのは森を含めて延べ三人だけだ（実数は二人）。同書に付随する月報（一九六二年四月）には第三巻の執筆者紹介が載っており、ここには大阪府立泉大津高校教諭と明記してある。書籍の肩書が空欄である理由はさだかでないが、森と同年の東京大学講師や一歳下の京都大学助手、六歳下の岡山大学副手や東京大学大学院（院生であろう）さえ書籍の執筆者一覧に肩書入りで名前が載っているのを見れば、森の複雑な思いも理解できそうだ。

私、森浩一はこの三月末で大学勤務を終り、宿願の肩書なしの研究生活にひたろうと思います。

森は一九九九年春に同志社大学を定年退職し、こんな書き出しで始まる「ご挨拶」と題した四月八日付の書面を知人たちに送った。筆者の知る晩年の森は、大学名誉教授

| 第3巻 古代文明の形成      |                   |
|------------------|-------------------|
| 第1章 序 説          | 東大教授 三上 次男        |
| 第2章 古代文明の類型      | 関西大学助教授 加藤 一郎     |
| 一、オリエンツの灌溉文明     | 東京大学大学院教授 山 本 茂   |
| 二、東部地中海文明        | 東京大学助教授 定 金 右源二   |
| 三、インドスの古代文明      | 東京大学助教授 曾 野 寿彦    |
| 四、ヨーロッパに於ける青銅器文明 | 東京国立博物館技官 増 田 精 一 |
| 五、黄河 文明          | 京大教授 貝 塚 茂 樹      |
| 六、朝鮮の古代文明        | 京大教授 三 上 次 男      |
| 七、日本の古代文明        | 東大教授 森 浩 一        |

学生社『古代史講座3 古代文明の形成』の巻末に掲げた各巻の執筆者一覧。森の肩書は空欄になっている(左端)

の称号とともに紹介されるより、考古学者として遇されることを好んだ。肩書をめぐる若いころの苦い体験が反映されていたのかもしれない。

肩書や立場で研究するのではない——森の国産説に説得力を感じたことに加えて、こうした森の信念に共鳴したからこそ、清張は森への電話取材を敢行して「三角縁神獸鏡への懷疑」を連載で取り上げたのではないか。そんな思いをわたしは抱く。

清張が『風雪断碑』で主人公のモデルとした森本六爾は、「官学の大学者と対等に、それどころか気力と着想の鋭さでははるかに優れた業績をのこし（森）たものの、「中学校をでただけの学歴で」（同）、「京都大学でも東京の上野の博物館でも就職ができなかった」（大塚）。「学問とさしちがえたといつてよいほどの凄じい生涯」（森）が清張の関心をとらえたのだろう。

清張と親交のあった古代史学者の門脇禎二（一九二五—二〇〇七年）は、森との対談で次のように指摘した。

門脇（前略）『遊古疑考』の清張さんほど、長く丹念にあなたの説を引用された人は専門家にもいないでしょ。

森 僕はうれしかった。

門脇 しかも「森説へのきびしさ」といって、あなたの説に対する当時の反論を挙

げている。きつと森本六爾のイメージをあなたにダブらせたに違いないと思うな。

(基礎文献②)

清張は森に、優れた業績を上げながら研究職に就くことができず、不遇の中で学問と刺し違えるように早世した森本を重ねていたのか。

そうした清張のまなざしは、森自身も感じ取っていたかもしれない。インタビューに対して語った言葉を、少し長いが引用しよう。

考古学というのは、きちんとした学歴のいわゆる専門家たちのみが、「重要な研究」を行っているのではない。そういう人たちは「研究」なるものはいっぱいやっているけれど、それはまあ、月給に見合うだけの研究ですね。ところが、新しい展望を開くような大研究が、旧制中学出の、小学校の代用教員をしながら研究して来た男にできた。それはなぜなのか。逆に、一流の大学を出て、大学院で勉強して、留学もさせてもらったような連中からはおぎなりの学問しか育たないのはなぜなのか。(中略)そういうところに清張さん自身の小説家になる以前の問題、生い立ちというか成長の過程かな、そういうものから見た時に非常に共感を持たれたんじゃないかな。(中略)

清張さんという人は三角縁神獣鏡というのは何かというのを最初から自分で考えたんじゃない。具体的な名前をいうと、当時京大におられた小林行雄という先生——神格化された面が多い学者だけど、その人の説と、高校に勤めながら研究しているやつの言い分と、なんでこんなに違うのかという疑問があったんでしょう。

(基礎文献① a)

清張の「生い立ちというか成長の過程」とは、高等小学校卒業という最終学歴を含んだ経歴について述べているのだろう。藤井康栄の『松本清張の残像』によると、清張と同年の男子は三割以上が尋常小学校を最終学歴とする。中学への進学率は八％に満たず、清張の学歴はその時代としては特別に低いものではなかった。そうではあるのだが、自伝的作品『平生の記』には、新聞記者になりたくて地元の小さな新聞社を訪ねた折に、年輩いた社長から「新聞記者というのはみんな大学を出ている、君のように小学校しか出ていない者は、その資格がないといっぺんに斥けられた」経歴を記している。

学歴の壁は厳然として清張の前にそびえていた。電気会社の給仕や印刷工を経て朝日新聞西部支社に仕事を得了のちも、大阪から一時の腰掛けのように九州へ赴任しては出世して戻っていく大学出の記者たちを横目で見ながら、異動とは縁のない地元採用者の鬱屈を清張は抱いた。

ある年に、清張は出席する資格を与えられなかった新聞社の新年会から若い記者が戻ってきて、会場から持ち帰ったミカンで清張の机に置いた。「汚れ松」とあだ名されていた清張がいきなり立ち上がり、そのミカンで床に叩きつけた、との逸話は、元同僚の証言により、よく知られている。

作家となった清張が大学出の編集者に対して厳しい質問を浴びせた思い出を、藤井は前掲書で紹介している。実生活にとどまらず小説の中でも、内実を伴わない肩書や権威に向けて清張は仮借のない批判を加えた。

俗事に疎い学究の徒が世に落伍しながらも、学問に情熱を燃やしていたとすれば、これは立派なことである。むしろ、象牙の塔という幻影城に立籠り、さしたる勉強もせず、十年一日の如く講壇で同じ内容の講義を繰り返している教授連にくらべると、よほど尊敬すべきことであろう。

これは短編「陸行水行」からの引用だが、前段の「俗事に疎い学究の徒」には「風雪断碑」の主人公が重なる。後段は「一流の大学を出て、大学院で勉強して、留学もさせてもらったような連中からはおぎなりの学問しか育たないのはなぜなのか」という森の清張論と響き合う。清張は長編小説『火の路』でも「東京公立美術館」の「佐田久男」という登場人物の口を借りて、研究よりも上司の顔色伺いに余念がない「T大学」の研究者たちをこき下ろした。

清張が「陸行水行」に記した専門研究者と非専門研究者の対比を、森は「官僚学者」と「町人学者」という独自の用語を使って論じた。清張と江上波夫が編集した『日本古代学の始まり』(一九七五年)に、森の講演録「日本考古学入門——町人学者の系譜を求めて」が収録されている。この中で森は、近年の考古学ブームについて述べたあと、奈良時代から現代に至る考古学史を概説する。江戸時代の先覚者として木内石亭(一七二四—一八〇八年)や青柳種信(一七六六—一八三五年)、蒲生君平(一七六八—一八一五



年）や藤貞幹（一七三二？―一九七？）らを挙げ、業績を紹介したあと次のように述べた。

一つ言えるのは、当時の考古学は国家権力側の要請や必要でやったのではないということですが。つまり幕府の都合、あるいは藩の都合上、考古学的な研究がやられたのではありません。それらはすべて各人の、（中略）自己の内部から発する意欲でもって学問をおこなっている。（中略）自己の内発的な動機で、江戸時代の人たちは、生活の苦しい人が多かったにもかかわらず、生涯を考古学研究につき込んでいたのです。ですから、私はその精神によりまして、たとえ下級武士というような階級の人でも、その人たちをひっくるめて「町人学者」と呼びたいのであります。

森は明治以降へ話を進める。大正元（一九一二年）年に県知事の発案で行われた西都原古墳群（宮崎県西都市）の発掘調査を、「為政者側の動機」で発掘が計画され「研究者たちがそれに従事した」として「内発的な考古学」というものが潰された「事例と位置付け」。町人学者の系譜を引く研究者は以後も「独立・自由の気宇壮大と内発的な研究意識の旺盛」を示したが、京大や東大に考古学教室が設置され「ほんの一握りの人たちに学問が集中しだした」と指摘。国公立大学に考古学専攻が増え、国や地方自治体が埋蔵文化財の専門職員を置いて遺跡の指定や史跡の整備を手掛けるようになったいま、考



森の講演録「日本考古学入門 ―町人学者の系譜を求めて」を収めた『日本古代学の始まり』（読売新聞社）

古学を「国家が独占しつつある」と警戒心をあらわにした。森はこんな言葉で講演を締めくくる。

私の理想は、やはり学問をもう一度国家の手から奪いもどすこと、そうして町人学者の精神をかみしめることにあると存じます。

「町人学者」と対極をなす「官僚学者」については二〇〇三年、雑誌のインタビューにこう語った。

江戸時代に考古趣味の人は数えきれないほどいて、彼らは生物学や鉱物学にも通じていた。おもしろいのは、こういう学問を支えたのは幕府や藩の禄を食んだ学者ではなく、町人や農民たちが多かったことです。（中略）これは日本のエネルギーですよ。おもしろいと思ったことは、自発的に金にならないけどやる。その伝統が明治、大正、そして昭和、一ケタ代まで続いていた。ところが、今は国が研究所をつくったりして、官僚学者が多すぎるでしょう。（中略）吉野ヶ里遺跡は何百万という人が見に行っている。しかし官僚学者たちの多くは出張でないと行かない。出張となると旅費はもちろん手当てがつく。自分の食い扶持から旅費を捻出して来た人と、出張として来た人では、見方が違うものです。官僚学者というのは、ぼくの目から見たら精神的に落ちぶれてるね（笑）。

（森「考古学は地域に勇気を与える」）

厳しい言葉だ。国立大学や国立の研究機関は、今や特別な存在ではない。それだけでなく現代人は、生活のあらゆる場面で公権力による介入に慣らされている。「官僚学者」に対する森の懸念がどれほど伝わるだろうか。

もつとも、近代の日本国家が歴史や考古学をねじ曲げた事実、今も忘れ去られたとは言いがたい。「神風が吹いて日本は勝つ」と幼少期に教え込まれた世代は、国家による歴史の捏造が敗戦を機に暴かれ価値観が一転した記憶を、実体験として胸に刻み込んでいる。

清張は考古学と近代日本国家について、次のような覚え書きを遺した。

明治・大正から戦前までの政府は帝国大学に考古学教室をほんとうは置きたくなかった。しかし、外国学者の手前、形だけそれを置き、予算措置を極端に制限した。(中略) 天皇家の祖先の形態や生活を知られるのを政府は恐れていた。政府は日本の考古学を危険視していた(鎌倉市・米村正一氏からの来信)。

(清張「創作ヒント・ノート」)

わたしは第二次大戦の終結から六十年を経た二〇〇五年に、森や門脇たち関西在住の考古学者と古代史学者計五人に戦中戦後の思い出を聞き、新聞の連載記事にしたことがある。戦時中に海軍予科練の教官となった直木孝次郎(一九一九年生まれ)は「天皇の万世一系は信じなかったが、日本は戦争で負けたことがないから、あるいは今度もーと思っていた」と振り返り、群馬の飛行機工場へ勤労働員された上田正昭(一九二七―二〇一六年)は「厳しくなる戦況に対して、ひよっとしたら神風が吹くのではないかと、期待も抱いていました」と明かした。国家とは何か、権力に歪められる以前の歴史とは何か―という真理への欲求が、無惨な敗戦を経て、彼らの歴史研究の原動力となり、また広く国民の知的欲求となって、古代史や考古学のブームを呼び起こす。

そうして歴史を国家から一度は取り戻しかけたにもかかわらず、森によれば国家は国立の研究機関や科学研究費の支給をとおして、巧みに学問をみずからの手に集約しようとする。森や清張にとつて、学問はあくまで自由で伸びやかなものでなくてはならなかった。権威を笠に着る研究者が先学の研究成果を金科玉条のように奉る半面、肩書や学閥と無縁な「素人」や「町人学者」の学説を軽くあしらう風潮を、二人が見て見ぬふりできなかったのも、真理とは無縁な権力が学問に介入するのを嫌悪したためではないだろうか。

一部の専門家が学問を独占することの弊害を説いたのは、私立大学に籍を置いた森や、学界の外にいた清張だけではない。たとえば考古学者の江上波夫(一九〇六―二〇〇二年)は東京大学という日本の学界の中核で教授を務めたが、「素人学者」を称揚する文章を遺している。

あなたは書きなさい  
専門と称する狭い視野で

誰が何と騒ごうと

あなたは書きなさい

リカードの「地代論」

モーガンの「古代社会」

エンゲルスの「家族・私有財産・国家の起源」

タイラーの「原始社会」

ラボックの「先史時代」

ウェスターマークの「道徳観念の発達」

そんなような椽大の筆で

太い線をぐーと引いたような

作品をあなたは書きなさい

それらは後世の専門家が守護本尊と

どんな勿体をつけようと

いはば専門家以前の

素人学者の作品だ

にもかかわらず

電子計算機の結果のような

専門家の無数の論文よりも

ずばぬけて長く生きている

そんなような生命力ある作品を

あなたは書きなさい

素人学者の自由と情熱と

野心をもって

(江上「あなたは書きなさい」)

かつて文化人類学者の中根千枝に贈り、九四年に学者と市民が学び合う「東アジアの古代文化を考える会」の同人誌の第三十号(江上の米寿記念論文集とされた)のため揮毫した。「専門家」への批評も垣間見えるこの詩の作者と、清張や森との間に親交があったことはよく知られている。江上は、森との対談などを収めた自著の序文に「私の

最も親しい考古学者森浩一」と記した。

清張と森には、国家への抵抗感や権威への批判精神が共通していた。二人は、奈良や京都など都を中心として日本の歴史を叙述する「中央史観」への疑念も共有していた。清張は晩年に広島生まれだと明かしたが、小倉で育ち、成人後も芥川賞を受賞後に四十代半ばで東京へ移るまで小倉を生活の拠点とした。森は大阪生まれだが、祖父や祖母は九州の出身で「先祖は熊襲」と題した随筆も書いている。邪馬台国の所在地論争においては、清張は九州説の立場をとり、森は九州から大和へ移ったとする東遷説に近い。それを郷土びいきと考えるよりも、大和偏重の中央史観を相対化する視点を二人が持ち合わせていたためだと理解したい。

### 第三章 ブームの牽引

#### 意欲と馬力

「ブームの牽引」と章のタイトルに掲げ、これは今研究の副題の一部でもあるわけだが、「ブーム」という単語は森が生きていればあまり良い顔はしなかったかもしれない。まず「森が考古学ブームをどうみていたか」から、この章の記述を始めよう。

考古学ブームという言葉が新聞や雑誌に盛んに現れだしてから、もうざっと二十年ほどになります。(中略) 私の物心ついて以来のことを申しますと、やはり考古学ブームは太平洋戦争に敗れ、そのあとの激しいインフレが下火に向かったところから次第に激しくなってきたようであります。(中略)

しかし、新聞に報道される記事は正確にいいますと、遺跡の発掘のニュースであつたり、あるいは遺物の発見のニュースであり、そのまま考古学のブームとは言えないわけなのです。世間はそれでもって考古学が盛んになったと勘違いしているので、学問のためには喜ばしいことではありません。

これは『日本古代学の始まり』(一九七五年)に収録された森の講演録「日本考古学入門——町人学者の系譜を求めて」の冒頭に近い部分だ。

遺跡の発掘や遺物の発見のニュースが新聞で連日報じられているが、それを「そのまま考古学のブームとは言えない」と森は論じる。当時も現在も、遺跡の発掘調査は大半が開発に伴う事前調査で、調査後は遺跡が破壊されることが前提とされている。ごくまれに発掘成果が重要だとして開発計画が変更され、遺跡が保存されるケースもなくはない。しかし、いたすけ古墳(堺市)で日本でも極めて早期の社会的な遺跡保存運動に取り組んだ森からすれば、開発前に義務的な調査が行われただけで大半の遺跡が日々消滅していく事態は、きわめて憂慮されるものだったに違いない。

さらに「世間はそれでもって考古学が盛んになったと勘違いしているので、学問のために喜ばしいことではありません」という言葉には、ブームをおおる新聞や雑誌と、報道をうのみにする世間とに対する苦言が込められている。

わたしは二十四年間、新聞社に勤務し、埋蔵文化財に関する報道に専門的に携わった経験もある。反省を込めて振り返れば、新聞社には他紙との競争という側面があり、それが自由な言論と密接に結び付いているのは確かなのだが、他紙を意識するあまり「見劣りしない紙面」を目指す傾向があるのは否めない。発掘調査の報道がしばしば新聞の一面を飾るのも、他のニュースに比べて価値が高いと判断された場合ももちろんあるだろうが、大きく扱っておけば無難だろうという意識が働いていないとは断言できない。さらに、三角縁神獣鏡など邪馬台国の所在地論争にかかわる遺物が見つかりてもすれば、読者の関心も高きろうとの配慮が編集スタッフに働きもする。その結果、研究者が首をかしげるほど扱いの大きな記事になる場合もあり、「マスコミがブームをおおっている」といった批判を招くことになる。他方、発掘調査の担当者は成果が大きく報道されて困ることはあまりないから(むしろ記事が大きければ自身が手掛ける調査の意義を強調できる)、マスコミとの共犯関係が生じることも珍しくない。

森は同じ講演で「考古学ブーム」というものの、決して学問そのものが社会に浸透しているわけではない」ともくぎを刺した。浮ついたブームに踊らされてはならない、という戒めを込めた言葉だ。

半面、「ブーム」という単語の是非は措くとして、考古学や古代史への市民の関心が、ある時期に大きく盛り上がった事実是否定できない。一つの契機は七二年の高松塚古墳における壁画の発見だった。それは単なる興味や珍しいもの見たさだけだったのだろうか? そうではなく、考古学や古代史への関心が高まったのは、前章で述べたような「国家とは何か」「真実の歴史とは何か」という知的欲求が根底にあったはずだ。戦



前や戦中には国家権力によって、そうした欲求は押さえられ、国民は偽りの歴史を教え込まれていた。発掘成果に基づいて国家や天皇のルーツを堂々と論じられることに、人々は戦後の国民主権を実感したのではないだろうか。

人々のそうした知的好奇心の発露を、森は肯定的にとらえていた。実はその好奇心こそが「町人学者」への第一歩なのだ。

近畿地方の発掘の現地説明会（現説）に、八七年だけで八十カ所ほど参加した市民を知っているが、こういう人は決して珍しくなくなってきた。（中略）現説に集まる人を野次馬あつかいして、冷ややかに見る専門家もいるが、それは間違っている。市民には自分の住んでいる地域や国の歴史を知る権利があるし、日本人のこうした知的好奇心の旺盛さこそが、日本の一つの知的資源というか、日本の繁栄の基盤をつくってきたものであって、これから大切にしなければならぬと思う。

これは森が雑誌『アサヒグラフ』で七八年から二〇〇〇年まで担当した、年間あるいは半年間の発掘成果を紹介する連載「古代史発掘総まくり」のうち、八七年の記事の一節である。こうした市民の知的好奇心に応える役割を、森や清張は担った。単にマスコミに踊らされただけではない、市民主体の古代史ブームを牽引した立役者として、森と清張をみていきたい。

古代史ブームの牽引役として、清張と森は具体的に何をしたのか。清張は小説を発表する傍ら、古代史に関しても著作や講演会などをおして精力的に発言した。北九州市立松本清張記念館の『松本清張研究』第六号が「清張古代史の軌跡と現在」を特集し、巻末に「清張古代史の軌跡」と題する年譜を掲載した。小説家として知られる清張の、巨大な創作の山脈に、古代史という高峰が疑いようもなくそびえていることが明示されている。

森も大学で考古学を教えるにとどまらず、研究書や一般向けの書籍を数多く執筆し、地方自治体から連続シンポジウムの企画を任されることもあった。森の没後にまとめられた著作集の第五巻『天皇陵への疑惑』巻末の年譜が、そうした幅広い活動を伝える。

ここでは、ふたりが共同で取り組んだ事例に絞って紹介しよう。清張死去の翌月に

あたる九二年九月号の雑誌に寄せた追悼文で、森は端的にこう書いている。

座談会や講演会をご一緒したり、シンポジウムも何度か同席するようになった。

（基礎文献⑤）

たとえば第一章で紹介した七二年の東京大学五月祭における対談などがこれに含まれる。加えて、出版企画で同じ書籍に原稿を寄せたケースや、一方が編者となり他方に原稿を依頼したケースも少なくない。

そうしたコラボレーションは一体、どれくらいの数に及ぶだろう。森信勝編『松本清張索引辞典』日本図書刊行会、二〇一五年）は巻末に収録人名索引を掲げ、森浩一は四十六項目が挙がっている（清張の作品を年代順および五十音順に整理している関係上、項目数は重複を含む）。これに先述の『松本清張研究』第六号や、森の『調査の記録』および森家に遺る清張からの書簡などを参照し、ふたりの共同作業を年代順に抽出したのが、資料編に添付した交友年譜である。七二年から八三年まで、かなりの頻度で共同作業を進めた様子が見て取れる。

清張と森が同席したシンポジウムは「ヤポネシア古代学の未来」（七四年）、「邪馬台国シンポジウム」（七七年）、「古代史シンポジウム国家成立の謎」（七九年）、「正倉院シンポジウム」（八一年）、「日本海文化を考えるシンポジウム」（同）、「国際シンポジウム古代日本の国際化」（八九年）の六回が確認できた。このうち「正倉院シンポジウム」は非公開、他の五回は公開とみられ、いずれも書籍として公刊されている。

七七年の「邪馬台国シンポジウム」と七九年の「古代史シンポジウム国家成立の謎」はいずれも朝日新聞社が主催し、清張が司会を務めた。福岡で開いた「邪馬台国シンポジウム」で森は、初日は記念講演を行い、二日目は討論のパネリストとして参加した。

あれは超満員だった。（中略）清張さんはこの時はかなり「倭人伝」に対する自説をお持ちだった。これは非常にうまくいったんです。

（基礎文献①）

成功した背景には、清張が「倭人伝」についてしっかりした自説を持っていた点と同



第1回「日本海文化を考えるシンポジウム」のレセプションで乾杯の発声をする清張。このあと会場を抜け出し、自作の舞台とする富山新港を訪ねた

時に、その自説を展開することを清張が司会者として自制した点もあったようだ。自説に対して井上光貞から記念講演の中で批判を受けた清張は、討論の場で反論したが、司会の本分を見失わず、一時間延長した討論を巧みに差配した。

ちなみに清張は初日に森を紹介する際、「今の考古学者の中では、私の考えでは最も広い視野を持っておられる学者だと思っております」と、井上光貞や直木孝次郎、岡崎敬についての紹介よりはるかに多くの言葉を用いて賛辞を贈っている。

翌年に東京で開いた「古代史シンポジウム 国家成立の謎」も「千人くらい」(基礎文献①)の来聴者があった。森によれば前回ほどの成功を収められなかったというが、この点については次章で触れよう。

八一年に富山市で開いた「日本海文化を考えるシンポジウム」は、十五人からなる実行委員会を組織し、企画の中心を森が担った。このシンポジウムは中断を挟み九四年まで計十回にわたって続くことになる。

第一回目の特別講演を、清張さんをお願いしたのです。清張さん、やってこられて非常におもしろい提案をされた。「せっかく来たんだから、勉強になるからばくもシンポジウムに入れてくれ、講演だけでは損や」と。ぼくはほろっとして「どうぞどう

ぞ」とすすめました。すると、シンポジウムが始まる直前に、「ぼくは司会が上手いや。司会もやらせてくれ」と(笑)。困ったが、司会者に決まっていた地元大学の先生にサブに回ってもらって、清張さんを司会にした。考えてみたら、それくらいやはり、意欲があったのですね。

(基礎文献④b)

別のところでは「清張さんの強引さにはくは振り回された。あの時はくは清張さんという人の馬力と強引さを感じたな」とも森は振り返っている(基礎文献①b)。

話が少し脇道にそれるが、清張の「馬力」に関する逸話を紹介しよう。このシンポジウムのレセプションのさなか、清張は「途中で抜きたい」と事務局を担当する富山市教育委員会の主幹に依頼した。富山新港へ行きたい、というのだ。当時の社会教育課長だった奥澤利治が同行し、二〇〇四年に富山市日本海文化研究所が発行した「日文研ニュース」六十九号にこう証言している。

先生の真意がよくわからないので、とりあえず新港の突端の越ノ潟と堀岡まで行っただ。もう一遍廻ってくれと言われて、港や町並みなどをだいたいぶかかって廻った。富山のホテルへ帰ってきたら、翌朝6時にもう一度迎えに来てくれといわれた。(中略) 清張さんは、草茫々の所とか、電話ボックスだとか、10箇所ほどを一人で歩いて、写真をパシャパシャと撮られた。

シンポジウムの前夜と当日の早朝の二回にわたって清張が取材した港の風景は、翌八二年に発表した推理小説「昇る足音」(のち「疑惑」と改題)に生きた。今研究の調査のためわたしは二〇一七年六月に富山を訪ね、八一年当時は市教委の学芸員でシンポジウム開催を提案した藤田富士夫に面会した。藤田は富山市の中心部から直線距離で十二キロほど離れた富山新港へ車で案内してくれた。清張の小説では岸壁から車が転落し、乗っていた男女のうち女だけが助かって公衆電話から通報する。堀岡の渡船所射水市)で電話ボックスの明かりと夜の海を眺め、早朝にここを訪れたあとシンポジウムの講演と司会をこなした清張の「馬力」をかみしめた。

藤田によれば、シリーズ化された日本海シンポジウムで毎回、作家を招いたのは「市

民に関心を持つってもらうには学者だけの力では不十分」という当初の森の意向に沿ったためという。初回は討論のパネリストに黒岩重吾を招いており、清張とともに著名な作家二人が顔を合わせた。その効果もあって、シンポジウムは千人の来聴者を迎えて成功した。森は第二回の特別講演を司馬遼太郎に依頼し、第三回は江上波夫とともに黒岩を再び招いた。のちに森は清張、司馬、黒岩という順序に「当時の僕の無意識の序列が現れている」と明かした（基礎文献①b）。

この連続シンポジウムは、森が「地域学」を提唱する起点となり、森は愛知県春日井市で二十回続いた「春日井シンポジウム」に携わることになる。また、富山でのシンポジウムをおして、かつて日本海側の諸地域を指した「裏日本」という差別的な用語が使われなくなった、と社会への影響を森はのちにインタビューで語った。藤田によると、NHKの放送用語から「裏日本」が抹消されたという。「高志の国文学館」など富山市の公共施設には、日本海を日本列島より下に配した通常とは上下が逆の地図が掲げているが、これも日本海を視点に据えた連続シンポジウムがきっかけとなって広がった。

富山市がシンポジウムを機に開設した日本海文化研究所は、二〇一一年に活動を休止した。しかし、行政が主催する生涯学習講座に今も千人近い市民が登録しているし、シンポジウムの精神を受け継いで市民たちが独自の研究会を立ち上げた、とも藤田は教えてくれた。ひろく市民の知的好奇心を刺激して、自主的な学習へと導く役割を、森や清張は果たしたわけだ。

福岡で八九年に開かれた「国際シンポジウム古代日本の国際化」は、清張と森が直接対面した最後の機会になった。第五章で触れる。

シンポジウムから座談会へ目を移すと、古墳時代の王朝交代説を唱えた早稲田大学教授の水野祐を交えた『週刊読売』の「研究座談会」（七五年）や、中西進、青木和夫と同席した『國文學』の「古代を検証する」（八三年）が確認できる。意外なのは、清張は考古学や古代史の研究者たちとの対談を三冊の単行本にしているが、森との対談が含まれていないことだ。東大五月祭で対談したのは前述のとおりだが、活字になったものは『週刊読売』に掲載された「ナゾの原日本人と大和民族形成の秘密」（七七年）しか見当たらない。考古学をテーマにした対談では森の専門性に太刀打ちできない、と清張は思ったのかもしれない。三角縁神獣鏡をすべて日本製だと言ったのは自分が初めて

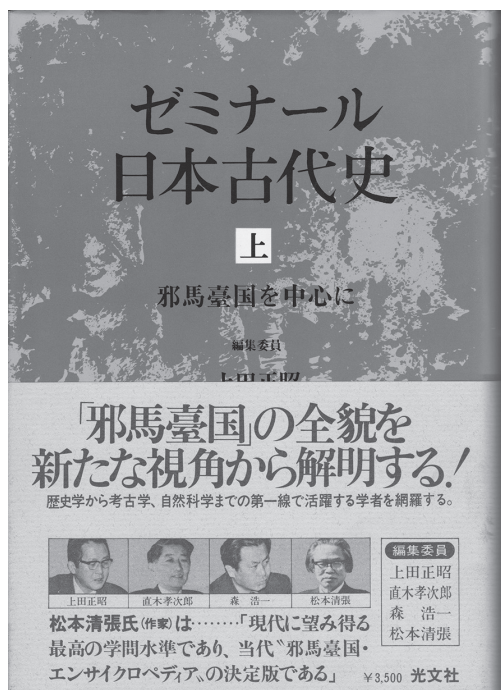
だ、という「稚氣あふれる」主張を清張が森に繰り返したのは、森に対するアドバンテージがそこしかないことを清張が熟知していたためだとも考えられそうだ。

清張と森は書籍で協力し合うことも多かった。森は光文社から『ゼミナール日本古代史』上下巻（七九―八〇年）の企画を相談され、清張を編集委員に抜擢した。のちに森は述懐する。

上田正昭、直木孝次郎、考古学ではぼく、もう一人を松本清張という四人を思い切って編集委員にした。編集委員の人は選はぼくがさせてもらった。そりゃ清張さんのほうがはるかに年上だし、世間的には有名な人だけれど、学界で認められているかという、それは別のことやからね。

（基礎文献①a）

「邪馬臺国を中心に」と副題を掲げた上巻は、森が四項目、清張は三項目を執筆した。「清張さんはちゃんと責任は果たされたわけです」（基礎文献①a）



光文社『ゼミナール日本古代史』上巻。森は清張を編集委員に抜擢した



専門書の編集委員に迎えることで、森は清張を研究者として遇した。論文に清張の著作を引用して、清張が「ほくも研究者の仲間にいれてくれるのか」と非常に喜んだ、とも森は振り返っている(同)。清張が連載「遊史疑考」で三角縁神獣鏡を取り上げた際、自身を「素人」と位置付けたことを思い出す。清張が古代史への傾斜を深めていく経緯には、大学教授の森から研究者として扱われたことも反映しているに違いない。

コラボレーションを進めるなかで、森は清張に専門家としてのお墨付きを与えた。逆に、出版界の寵児である清張と組むことは、結果的にマスコミのなかでの森の存在感を高めることにつながったと考えられる。清張も森もそのあたりの事情を書き残していないから、以下はあくまでもわたしの想像に過ぎないのだが、古代史関連の書籍に清張が筆者として名を連ねる場合、すくなくとも版元は人気作家の盛名を最大限に利用して販売に生かそうとしたはずだ。

先の『ゼミナール日本古代史』上巻は、帯に清張の言葉を掲げている。

ここに収録された論文・解説は、私を除き、一流の専門学者・研究家の書下ろしによる総合的な邪馬臺国論である。現代に望み得る最高の学問水準であり、まさに当代「邪馬臺国・エンサイクロペディア」の決定版である。

清張は同書の編集委員であるから、自画自賛の趣も感じないではない。それを措いて、仮に清張以外の編集委員三人のいずれかが同様な帯の言葉を書き得たかと考えると、やはり清張の知名度に出版社が宣伝効果を期待した結果なのであろう。ちなみに下巻の帯の文章は、騎馬民族征服王朝説で世間にもよく知られた江上波夫が上巻に寄せた序文から引用している。

帯についても一例挙げれば、森の著書『古墳の旅 中国と日本』(七九年)に清張が長い推薦文を寄せている。「考古学者と詩人 松本清張氏激賞」の見出しに続いて、「森浩一氏は現在の考古学界でもっとも広い視野と、鋭い感覚と、ゆたかな発想をもっている第一人者だと思う」と始まる横書きの文章が十行あり、裏へ九行続く。四十一字詰めで計十九行、かなりの力の入れ具合だ。

森もこの当時、決して無名ではない。高松塚古墳で壁画が見つかった際には新聞や雑誌の座談会に呼ばれ、以後も考古学界で独自の説を掲げる森はマスコミに登場する

機会が少なくなかった。けれども「清張さんのほうがはるかに年上だし、世間的には有名な人だけれど」と述懐したとおり、清張の知名度がまさったのは確かだ。

水野祐を交えた『週刊読売』の「研究座談会」は七五年に二回に分けて掲載された。初回「卑弥呼が死んでから」の掲載誌は表紙に「座談会―松本清張ほか」とある。二年後に同じ『週刊読売』で清張と森が対談したときは「対談 松本清張・森浩一」と表紙に記されている。週刊誌の表紙に名前が出るかどうかは、その号の他の記事によっても左右されるだろうが、三人から一人を選ばなら人気作家の清張は外せない、というのが雑誌販売上の要請であつただろう。そして森にとっても、清張と並んで週刊誌の表紙に名前が出ることで、社会的な知名度が一段と上がった可能性はあるのではないか。

書籍の企画に戻れば、『ゼミナール日本古代史』に四年先立つ清張編の『邪馬台国99の謎』(産報、七五年)に森は「三角縁神獣鏡はどこで作られたか」など十二項目を執筆している。新書サイズの一般向けの装丁だが、水野や上田正昭、大林太良、直木孝次郎ら一線の研究者が執筆陣に名を連ねている。森が同書に主體的にかかわった様子はいかがえず、出版社が清張に企画を持ち込み、森に原稿依頼が回ってきたのかもしれない。

こうしたシンポジウムや書籍の出版をとおして、ふたりは考古学や古代史をわかりやすい言葉で市民に伝えた。複数回にわたつてもテレビ出演したことも、森の回顧や「調査の記録」に記されている。清張は古代史に造詣の深い作家と認知されるようになった。森も考古学や古代史に関心のある市民から高い支持を得るようになる。

## 二つの磁場

この節では、作家と研究者そして市民が古代史の研究や学習をとおして交流を深めた二つの在野の運動について考えたい。ひとつは一九七二年に東京で設立された「東アジアの古代文化を考える会」、もうひとつは六九年に関西で創刊された季刊誌『日本のなかの朝鮮文化』だ。清張と森はこの二つの運動にかかわり、他の作家や研究者、古代史に関心を寄せる市民たちと関係を結んだ。

「東アジアの古代文化を考える会」の初代会長は清張や森と親交のある考古学者の江上波夫が務めたが、創設の実務を担ったのは若いドイツ文学者と弁護士だった。こ

のうちドイツ文学者の鈴木武樹（一九三四―七八年）の名を、森は晩年の著作に記している。

昭和四十七（一九七二）年に、鈴木武樹という人の訪問をうけた。たしか高松塚で壁画が見つかったすぐ後だった。鈴木さんは古代史の専門の学者ではないけれども、市民の立場から古代史に関心があるという。関心があるだけでなく、市民のあいだに古代史をひろめたく会を作りたいとのこと。（中略）会長には江上波夫先生になってもらいたく、内諾はもらっているとのことである。僕は暫く様子をみることにしてその日は別れた。その会は昭和四十七年十二月に一回めの研究会をひらいた。半年ほど様子をみていると、真面目な会のようなのである。それと活発な動きを始めた。僕は翌年の九月に、この会で初めて講演を引き受けた。会場はたしかお茶の水で、なかなか盛況だった。

（森「田村節子さん」『森浩一の考古交遊録』）

タイトルの「田村節子さん」とは、森と同一歳の俳優・田村高廣（一九二八―二〇〇六年）の夫人で、この会の会員だった。この縁で森は田村高廣とも知り合い、対談している。

森の記述は、少なくとも当初は会の性格を慎重に見極めようとの姿勢だったと感じさせる。これに対して、鈴木が遺した文章は異なる印象を与える。

四月末、わたしと後藤孝典とは京都に行き、『古墳の発掘』の著者である同志社大学の森浩一氏にお会いして、副会長就任の内諾を得た。

（鈴木「未来史としての古代史」）

わたしの知る限り、森は「長」のつく役職に就くことを好まなかった。自分の研究をする時間がなくなる、というのが、わたしが聞いた理由だった。学長や学部長といった役職に就きたがる研究者仲間への冷やかな視線も森は持っていると感じた。だから「副会長就任の内諾」には意外な気がした。

鈴木の記事にもかかわらず、森が実際に副会長に就任した様子はうかがえない。一

方、清張はこの会の顧問幹事を引き受けた。鈴木によれば会の役員は次の顔ぶれだった。

会長は上智大学の江上波夫、顧問幹事は評論家の久野収、作家の松本清張の各氏で、幹事としては、作家の金達寿、評論家の谷川健一、成城大学の上原和、東京大学の大林太良の各氏が一般市民とともに名を列ね、（以下略）

（鈴木「あとがき」『東アジアの古代文化を考える会編『日本文化の源流』』）

清張は、会が主催した第一回連続講演会をまとめた『邪馬臺国の常識』（毎日新聞社）の編者を務めた。森の記述に「翌年の九月に、この会で初めて講演を引き受けた」とあるのは、同書に収めた講演録「三世紀の考古学」に該当するとみられる。清張も講演録「倭国の大乱と女王卑弥呼」を収め、「あとがき」も書いている。

清張はまた、同会が読売新聞社と共催した講座をまとめた「市民講座 日本古代文化入門」シリーズ（全五巻）も江上とともに編者を務めた。清張と森が同席したシンポジウムとして前節で紹介した「ヤポネシア古代学の未来」（七四年）はこの会が読売新聞社と催し、シリーズ第一巻『ヤポネシア古代学の魅力』に収められた。ヤポネシア、とは作家・島尾敏雄（一九一七―八六年）が考案した造語で、日本列島を意味する。鈴木は好んでこの言葉を使った。

会の正式な発足は七二年十二月だった。同年六月、高松塚古墳の壁画をテーマに、清張と森は東大の五月祭で対談している。清張が森の三角縁神獣鏡国産説を連載で詳しく紹介したのが前年の夏だから、二人の交友の始まりに近いころから世間でも古代史に関する市民運動的な動きが盛り上がりつつあったことには留意する必要があるだろう。

会の創設当初の雰囲気、毎日新聞記者の原田三朗が記している。

七二年一二月の曇った肌寒い日、東京・深大寺に一六〇〇人の男女が集まった。鈴木武樹は、いつもの「スピーカー要らず」の大声を張り上げ、この集まりの目的を説明した。

「わたしたちは、日本の古代文化を東アジア史全体の中に正しく位置づけて理解するとともに古代文化研究の成果を専門家の手から市民一般に広く解放しよう」と

するものである。」

それから人びとは鈴木武樹のあとについて、付近の史跡をまわった。これが「東アジアの古代文化を考える会」の旗上げ興行である。

一年後、「会」は最盛期を迎えた。会員は一二〇〇人を超え、「会」の活動は日本の古代史学界に衝撃をもたらした。

（原田「解説」武樹・古代史・東アジアの古代文化を考える会）

「古代文化研究の成果を専門家の手から市民一般に広く解放」することを、会は目的として掲げていた。その会の顧問幹事に、「素人」の立場から古代史への傾斜を深めつつあった清張が就いたことは納得できる。

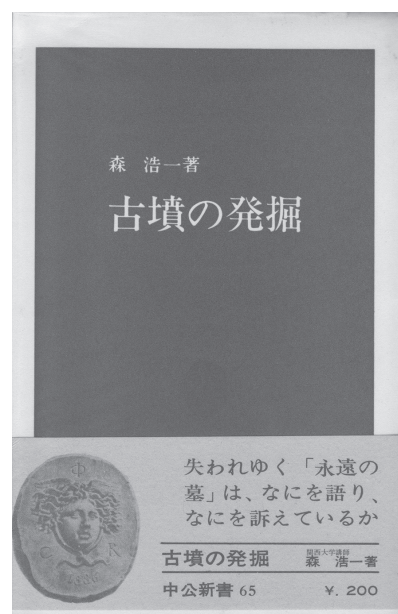
ちなみに、もう一人の顧問幹事だった評論家の久野収（一九一〇—一九九九年）は、「専門家としらう」との共同」を次のような文章で称揚した。

歴史家の知識は、かえって人間表層、文化表層の知識にとどまり、人間深層、文化深層からの変革のエネルギーに支えられなければ、視座の転換を実現しにくいという傾向がはつきりしてくる。だからここでも、現代という時代は、専門家としらう」との共同を要請しているといえるであろう。

（久野「新しいバロックの時代」）

他方、同志社大学で考古学を教える森は古代の研究については「専門家」そのものだが、先述のように「町人学者」を重んじる姿勢をもち、研究の材料や成果を学者が独占することには否定的だった。そのような森を鈴木たちがどう評価していたか、次の文章が示している。

同志社大学教授森浩一は、現役の考古学者としては最も多くの発掘例を持つ貴重な存在だ。彼が参加した発掘例は「明治から終戦までの古墳の学術発掘の全国数をはるかに凌いでいる」しかもアカデミズムに媚を売る必要も、セクトの中で屈折しなくてもいいという立場の学者は、日本では異例である。彼がこの運動に参加してきた事によって、広い学問的視野の中で市民運動を学問的基盤に強くコンクリート



森の著書『古墳の発掘』（1965年）。宮内庁による天皇陵の治定の妥当性を学問的に検討し、多くに疑問があることを指摘した

するという、従来忘れられていたベースを一つ設定した事になったのである。

（水戸岩雄「東アジアの古代文化を考える会」—その生誕—）

すなわち、日本の学者のほとんどは「アカデミズムに媚を売る必要」や「セクトの中で屈折しなくて」はならない立場にあると、彼らはみなしていたことになる。学界において他とは異なる森の立ち位置は、市民にもこのころになるとよく理解されていた。

この引用部分には明記されていないが、天皇陵古墳に対する森の姿勢も、鈴木の間を受ける要因となったに違いない。森は六五年に発表した著書『古墳の発掘』で宮内庁による天皇陵の治定を学問的に検討し、三十一基のうち「ほとんど疑問がない」はわずかに四基と結論づけた（二〇一一年の著書『天皇陵古墳への招待』では三十二基のうち七基が「ほとんど疑問がない」。そのうえで森は「天皇陵や陵墓参考地になっている古墳を、いまや調査することが必要な段階にきているのではなからうか。調査とはいっても、埋葬施設の発掘をすぐにやるべしと提案しているのではない。墳丘になかばあらわれている埴輪や露出している石材をしらべてその資料を公開するだけでも、どれほど学問的に有意義なことであろうかと思うのである」と天皇陵古墳の調査を同書で提唱した。

前出の水戸岩雄による文章は、江上を会長に戴いた経緯に触れている。

七二年の四月、江上波夫は何度目かの海外旅行から帰り、天皇陵調査の必要性和意



義を『東京新聞』紙上に載せた。鈴木たちの運動にとって、時とタイミングが、仕かけられたマシンの刻みのように合っていたのも不思議である。江上会長が決定した。

会にとって、天皇陵古墳の調査の実現が目標の一つだった。鈴木はのちに、教科書裁判で知られる歴史家の家永三郎（一九一三—二〇〇二年）との対談で、天皇陵古墳の調査に及び腰な研究者たちを批判した。

森浩一さんが「日本の現在発見されている天皇陵古墳で、被葬者名と古墳が確実に一致しているのは、天智天皇陵と文武天皇陵の二つしかない」とおっしゃる。それなのに、発掘どころか表面に出ているものの調査すら許されていない。

それでいて、専門の研究者は、江上波夫さんや上田正昭さんや森浩一さんを除けば、ほとんどだれも天皇陵古墳の調査や好太王碑の調査を要求する運動は起こさない。学界もそれらを要求しない。

（鈴木「教科書と真実の古代史」家永三郎氏との対談）

天皇陵古墳の調査を果敢に唱える数少ない専門家のひとりとして、鈴木は森を評価していたことがわかる。もともと、高松塚古墳の壁画が見つかり大きな話題となった後、森は同じころに線刻の壁画が確認された玉手山横穴群（大阪府柏原市）を引き合いに出して、次のように世論の飛躍を戒めた。

高松塚の壁画が出現すると、飛鳥に残されている他の古墳や各地の天皇陵などを発掘してはどうか、との興味本位の発言があるようだが、私は賛成できない。

玉手山での今回の壁画の発見が端的に物語っているように、子供の遊び場になっていたような一見ありふれた古墳、言いかえると学界からも文化財行政からも見過ごされていたような古墳が全国にはたくさんあって、それらには基本的検討が、あまりなされていない現状を、まず知ってほしい。現時点では、飛鳥にある残された古墳には保存中心でのぞみ、玉手山のように、一見ありふれた古墳への地味な調査を徹底して行う必要がある。

（森「高松塚古墳発見のあとにくるもの」）

先走る世論への違和感が、副会長就任の要請に対して森に「暫く様子を見る」慎重な姿勢を選ばせたのかもしれない。「真面目な会のように」だと判断した森は雑誌『東アジアの古代文化』創刊号（七四年）に「鷹狩で考えること」と題する論考を寄せた。

会は鈴木が事務局長として切り盛りし、講演会やシンポジウム、遺跡巡りなどの企画、雑誌や書籍の編集など精力的に活動した。鈴木は、作家の小田実（一九三二—二〇〇七年）や哲学者の鶴見俊輔（一九二二—二〇一五年）たちが主導したベトナム反戦運動「ベトナムに平和を！市民連合」（ベ平連）への参加経験もあるといい、「東アジアの古代文化を考える会」も市民運動の色彩を濃く帯びていたようだ。しかし運営に関する内紛から鈴木は七四年に退任し、江上は会長にとどまったが会の市民運動的な性格は薄れた。

鈴木は会を離れた後も古代史への発言を続け、歴史教科書の記述が正確さを欠くとして井上光貞や家永への批判を繰り返した。明治大学教授のかたわらテレビのクイズ番組のレギュラー解答者となり、タレント文化人として名を馳せた。七七年には参議院議員選挙に立候補したが落選し、病を得て翌年、四十三歳で早逝する。

森は京都に住んでいたからだろう、大阪に拠点を置く「東アジアの古代文化を考える大阪の会」と深い関係を築いた。八七年から毎年末に、その年の考古学の成果と問題点を振り返る講演を担当するようになり、二〇〇一年末の講演を終えてすぐ腎不全で入院するまで続けた。大阪の会の世話役を務めた松下煌を、森は晩年の著書『森浩一の考古交遊録』でしのんでいる。

季刊誌『日本のなかの朝鮮文化』は六九年、関西に住む鄭詔文（一九一八—八九九年）が兄の貴文と創刊した。詔文は日韓併合の八年後に朝鮮の慶尚北道醴泉郡慶忘里で生まれた。祖父は朝鮮国王に謁見できる高位の官吏だったという。二五年に家族と日本へ渡り、両親は京都で西陣織の織り手となったが、三六年に母が他界し、翌年には奢侈禁止令により父が失業する。詔文は朝夕に新聞配達をして小学校を卒業、大阪で肉体労働の後、東京の軍需工場へ徴用される。日本の敗戦後は食用油の精製工場を経て京都でパンコ店を手掛けた。

五五年、古美術店で李朝の白磁の壺と出会い、祖国の文化のすばらしさに目覚める。

日本に持ち込まれた朝鮮の美術工芸品を収集するかたわら、各地の朝鮮関連の遺跡を訪ねるようになった。六九年に「朝鮮文化社」を設立し、創刊したのが『日本のなかの朝鮮文化』だ。

この季刊誌の編集に、作家や研究者三人が当初から協力する。古代史研究者で京都大学教授の上田正昭、在日の作家の金達寿（一九二〇—一九七七年）、そして作家の司馬遼太郎（一九二二—一九六六年）だ。

司馬は六〇年に『梟の城』で第四十二回直木賞を受賞した。六四年、大阪市西区のマンションから大阪府布施市（現・東大阪市）へ転居する。その近所に詔文の兄・貴文が住んでいた。

私は、毎日近所を散歩してまわる習慣をもっている。ときどき近所の友人である——といっても年齢は私のほうがずっと弟だが——鄭貴文氏と一緒に歩いてもらったりしてきた。（中略）鄭貴文氏とその令弟の鄭詔文氏は極貧のなかでそだち、少年期には西陣で奉公もされていたという。私は鄭貴文氏が平明でうつくしい日本語の文章を書かれるということは若いころの氏の小説作品である『民族の歌』（東方社刊）で知ったが、しかし実際のしごとは多くの在日朝鮮人や韓国人がそうならざるをえないように、食堂経営などをされていた。

何年か前のある日、一緒に歩きながら、「自分も五十二歳になったのです。このままではつまりません」といわれた。（中略）

そのとき鄭貴文氏が言いだされたのが、「日本のなかの朝鮮文化」という雑誌を出してゆきたい、ということであった。（中略）最初、どういう内容の雑誌にすべきか見当がつきにくい、だから座談会でもしてそこから方向を見つけてゆきたい、と鄭貴文氏がいうので、私も門外漢ながら加わった。その座談会がそのあと恒例のようになり、湯川秀樹氏・松本清張氏ら多くのひとびとの協力をえてみのり多いものになった（中略）

どうせ三号でつぶれるかもしれない、と私はひそかにたかをくくっていたのだが、鄭兄弟はどうやらそういう人ではなかったようであった。

（司馬『朝鮮』私語『座談会 日本の朝鮮文化』）

最初の座談会は「日本のなかの朝鮮」と題して、司馬と金、上田、文化史家の村井康彦に加えて、考古学者の李進熙（イジンヒ）も匿名で参加し、京都の京大楽友会館で行った。『日本のなかの朝鮮文化』第一号はA5判、モノクロの五十ページで六九年三月二十五日に発刊した。一部百五十円で千部を刷ったが、新聞で好意的に紹介されたことなどから売れ行きが伸び、増刷したという。

司馬が言及した清張の座談会参加は七〇年十二月刊行の第八号で、「神話と歴史について」と題して東京の瓢亭で行い、上田と金、井上光貞が同席した。この号は座談会に通常の倍近い三十一ページをあてたが、再録した単行本『座談会 日本の朝鮮文化』をみる限り、清張はあまり活発に発言していない。特に前半、神話の共通性などを論議するあいだは存在感が薄く、後半に古代の豪族・蘇我氏の渡来系説が話題となったあたりから持論を展開する長い発言があらわれる。上田と井上は、清張が「古代史疑」を連載していた『中央公論』の六七年一月号に掲載されたシンポジウム「古代史疑」を考証する」で清張と顔を合わせている。古代史の専門家の中でも、いわば旧知の二人なのだが、清張の発言はふるわない。日本と朝鮮の神話というテーマ自体が、清張にとって邪馬台国の所在地論争ほどお手のものではなかったのかもしれない。

『日本のなかの朝鮮文化』は八一年六月刊行の第五十号で発刊を終えるまで毎号、座談会を掲載した（そのうち五回は朝鮮文化社が主催もしくは後援した公開シンポジウムを収録し、二回はNHKでの座談会。清張が座談会に参加したのは一度きりだが、誌面にはもう一回、登場した。七三年三月刊行の第十七号で、そこでは同年二月二十四日に東京・京橋の中央公論社で開かれた「日本のなかの朝鮮文化」を励ます会」の様子が十五ページにわたり報告されている。座談会をまとめた単行本が同社から刊行されるのを機に、司馬と上田、金が発起人となり開いたこの会に、清張は百八十人余りの参加者のひとりとして来場し、祝辞を述べた。この祝辞はあまり知られていないかもしれないので、少し長いが全文を引用する。

古代史をやっております、古い日本の人名とか地名に朝鮮人、あるいは朝鮮の地名が入っているということが、前からどうもみんなくさいと思っていたのですけれども、金達寿さんはじめ、その同好の方々が明確にそれを実証されてゆくということとは、たいへん意義のあるお仕事だと思います。私もアマチュアとしていろいろ書

きまして、ここにお見えになっている上田正昭さん、井上光貞さん、和歌森太郎さん方のテリトリ（専門分野）を何度となくお騒がせしておりますけれども、しかし専門学者はいろいろな事情があつて、思うことがよう言えない。そこへいくとわれわれはたいへん強うございまして、そういう配慮はいつさいいらない。そこで勝手なことを言っておりますけれども、しかし勝手なことを言つてはおりますが、司馬遼太郎君のように、「街道をゆく」とかなんとかいって、そのかたわら着々と古代史の方にも実績を上げているということでもわかるように、きわめて実証面からアプローチしております。いろいろと影で批判があるように聞いておりますけれども、私どもは、金さんも同じですけれども、一つのアイディアがやがては、史家によって認められ、先見の明があつたということが必ずあると期待しております。そういう意味でこの雑誌の発刊がひじょうに繁栄しているということについて、ご挨拶を自他ともにしたいと思います。ありがとうございます（拍手）。

作家は歴史家と異なり、思うように書くことができる、けれども作家の「アイディア」は歴史家によって認められて初めて価値を持つ——というような清張の考え方が垣間見えて、興味深い。



あちこちと訪ね歩きました。そして本を読んだり、調べたりしているうちに、「日本のなかの朝鮮文化」という小さな雑誌が創刊されるきっかけになり、司馬先生や上田先生の門をたたくことになったわけです。それがはや五年をむかえて、二冊の本にまとめていただきました。うすべらな雑誌のときはそれほど感じなかったのですが、二冊の本を手にしたときは一人で泣いたものです。本当にうれしかったのです。

きようはご本でお目にかかるか、テレビなどでお目にかかれぬような先生方から、この名もない雑誌がいろいろな激励のお言葉をいただいたというところは、鄭詔文個人の問題ではなくて、われわれ朝鮮人に対する励ましだと私はありがたく受け取らせていただきます。本日、私はあつかましくも、このようなながましい舞台に立つ柄ではないのであります、あえて

- 63 -

『日本の中の朝鮮文化』第17号に掲載された「励ます会」の報告には、清張と司馬が1枚の写真に納まる

司馬の名前が出てくるのも見逃せない。金と上田の名も清張は祝辞に織り込んでおり、三人の発起人に配慮したとも考えられるが、「街道をゆく」という作品名にも言及するあたり、司馬を意識していたことがうかがえる。二年前と前年に司馬を抑えて文壇長者番付の首位に輝いた清張は、この年は三位に甘んじた（司馬が首位）。『日本のなかの朝鮮文化』の編集者も人気作家の同席に注目したようで、立ち話す二人の写真を掲載している。

励ます会では、金と司馬のあいさつに続いて歴史家の和歌森太郎が乾杯の発声をし、哲学者の谷川徹三、作家の中野重治や陳舜臣、美術家の岡本太郎たちが祝辞を述べた。森が会場にいたかどうかは分からない。森の「調査の記録2」には七三年二月の行動が一行も書かれていない。

森が『日本のなかの朝鮮文化』に初めて登場するのは七一年三月刊行の第九号で、「古墳をめぐって」と題する座談会に金や直木孝次郎たちと同席している。清張が前号の座談会に出ているから、まだ面識のない二人はこの雑誌でも一号違いでいわば「すれ違って」いたわけだ。

森はそれ以前からこの雑誌を読んでいたらしい。

昭和四十四（一九六九）年、京都のマチの一角から『日本のなかの朝鮮文化』という雑誌が出た。季刊誌で、早速一冊を買って求めた。薄い雑誌ではあるが、まず雑誌の名が日本と朝鮮との交流史の真相を標榜できている。そのころは日本史で語られている朝鮮像には、どこかにゆがみがひそんでいた。この雑誌を手にした時、僕は強いカルチャーショックを感じた。

（森「鄭詔文さん」）

森はこの文章を「在日韓国人の鄭詔文さんは僕の親友だった」と書き出している。森は第十一号の「河内飛鳥をめぐって」や第十四号の「高松塚壁画古墳をめぐって」など、全五十号のうち十七の号で座談会に参加し、朝鮮文化社が主催する文化講座や長野での遺跡見学会の講師を務めるなど、すっかりこの雑誌の常連となった。司馬とは第十四号と、第三十五号「古代製鉄と朝鮮をめぐって」、第四十号「日本のなかの朝鮮文化」の十年、「第四十四号」難波の古代文化」の座談会で同席し、第三十七回「新沢千



塚と古代朝鮮」では黒岩重吾とともに参加、作家たちとの親交を深めていく。

雑誌『日本のなかの朝鮮文化』は、八一年六月刊行の第五十号で休刊した。本来は創刊から十年、四十号で区切りをつける予定だった。最終号の休刊のあいさつには「装いをあらたにした、第二次『日本のなかの朝鮮文化』を期しております」とあるが、実現はしなかった。鄭詔文は晩年、所蔵品を公開する美術館の建設に熱意を傾ける。八八年十月二十五日、京都市北区の詔文の自宅跡地に高麗美術館が開館した。館長は歴史家で前京都国立博物館長の林屋辰三郎が就き、森は司馬や上田、随筆家の岡部伊都子たちとともに九人の理事として名を連ねた。詔文は理事長に就任したが、ほどなく体調を崩し、翌年二月に七十三歳で他界した。

日本の古代史の中で朝鮮が果たした役割を、各地の遺跡や伝承などから確かめようとする『日本のなかの朝鮮文化』の試みは、日本が第二次大戦に負けるまではとうてい許されなかっただろう。日韓併合以後の朝鮮は、「内鮮一体」などというスローガンとは裏腹に、実質的に日本の植民地であり、その植民地が宗主国である日本に多大な影響を及ぼしたとする研究は、どれほど実証的であったとしても、アジアの盟主を目指す日本の指導者層には受け入れられなかったに違いない。ましてや、天皇の祖先に朝鮮からの渡来人がいるなどと言おうものなら、不敬罪に問われかねなかったのではないだろうか。

「東アジアの古代文化を考える会」が主張した天皇后古墳の調査もまた、戦前には冗談でも口にすることが難しかっただろう。歴史をめぐる二つの運動が相次いで民間から沸き起こった七〇年前後は、天皇を絶対視する国家主義が敗戦によって後退する一方、焦土と化した国土が復興して人々が食うや食わずの生活から抜け出し、朝鮮戦争の特需などにより日本経済は成長のレールに乗っていた。生活にゆとりが生まれた人々は、みずからのルーツへ目を向ける。もちろん、国家からの抑圧の記憶や、迎合して偽りの歴史を書いた専門家への不信は、まだ生々しい。清張と森が出会うころまでに、古代史ブームの下地は用意されつつあった。朝鮮半島との関連を濃厚にうかがわせる高松塚古墳の壁画の発見（七二年）が、ブームの爆発に向けた導火線の役割を果たすことになる。

## 第四章 すれ違い

### 厳しい諫言

「非常に勉強になったけど、最近はいいい感じを持っていないんだ」。清張が森に関して、このような心証を漏らしていた。

わたしは今研究の調査のため二〇一六年八月、佐賀県在住の考古学者・高島忠平が福岡市で講演した機会をとらえインタビューした。邪馬台国九州説の有力な論者としても知られる「ミスター吉野ケ里」に、すでに故人となった清張と森の思い出などを尋ねたいとおもった。そこで高島が語ったのが、清張が述べたという冒頭の言葉だ。

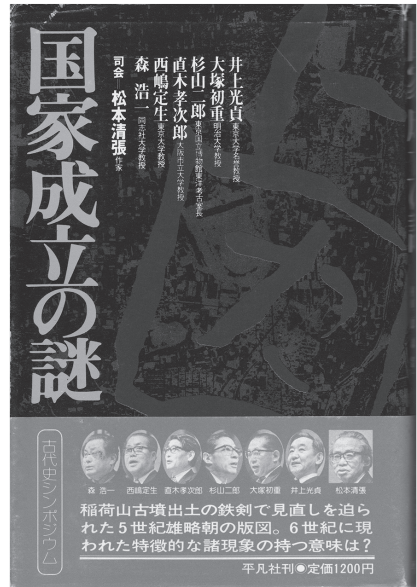
清張がそこまではつきり森との不和を言葉にしていたとは初耳だったが、さほど意外な印象はなかった。二人に関係が遠のいた時期があったことは、森による回顧などをおして何となく感じていたからだ。

高島は、清張がそう語った時期をはつきり覚えていなかった。高島が清張と知り合ったのは一九七〇年代半ば、佐賀県吉野ケ里町の二塚山遺跡を発掘調査したとき、清張が見学に訪れて以来という。そのころ清張と森はきわめて親密だったはずで、その良好な関係がいつ冷え込んだのか、わたしは著作や資料をおして確かめたいとおもった。

前章で二人の各方面にわたるコラボレーションを紹介した。その中で、七九年の「古代史シンポジウム国家成立の謎」は千人近い来聴者があったが、二年前の「邪馬台国シンポジウム」ほどの成功は収められなかった、と森が回想したことにも触れた。

「国家成立の謎」の司会は「邪馬台国シンポジウム」と同様、清張が務めた。その進行をめぐって、パネリストだった古代史学者の井上光貞と清張の間に意見の対立があった。

午前の部で清張先生が司会をされて、しかもテーマが三角縁神獣鏡でした。（中略）清張先生は午後もこの三角縁神獣鏡でいこうと言われる。ところが、東京大学の井上光貞先生は文献の方の先生ですから、考古学的資料を扱うのはもう午前中で十分、「午後はおれは三角縁神獣鏡はやらん」と言われる。お二人が進行上の意見の違いで、控室で相当にはげしく口論されているところを実際に見ました。



古代史シンポジウム「国家成立の謎」の舞台裏では、司会の清張とパネリストの井上光貞が進行上の意見の違いで対立した。写真は平凡社が刊行した書籍

これは、パネリストだった考古学者の大塚初重が二〇一三年六月の「松本清張研究会」第二十八回研究発表会で講演した内容の一部だ（「松本清張記念館館報」第四十三号所収）。この証言については、今研究のため二〇一六年に大塚の自宅を訪ねておこなったインタビューでも直接、確認した。「井上光貞さんは東大の主任教授で、そう簡単には譲れない。松本さんも考古学に造詣が深く、俺にもその世界があるんだ、と思っている。両雄相譲らずというか、それは感じましたね」

七七年の「邪馬台国シンポジウム」を書籍化した『論争邪馬台国』をみると、ここでも三角縁神獣鏡をめぐる議論を森と考古学者の岡崎敬が十四ページにわたって繰り返し広げている。このときも井上はパネリストに名を連ねていたから、二年後に再び、というのはさすがに気が乗らなかつたのかもしれない。

清張と井上の衝突を、森も江上波夫との対談でこう振り返った。

井上先生と清張さんとはよくシンポジウムを二回御一緒したことがあるんです。さすがの清張さんも井上先生の前では緊張していましたね（笑）。ところが二回目のシンポジウムのように、二人の意見が対立してしまつた。いま憶えていないくらいですから論点は些細なものだつたと思うんですが、両者とも譲らず、控室で調節役のぼくはえらく苦労しました（笑）。

（基礎文献③b）

その対立の結果、シンポジウムは方向性がうまく出ないまま終わってしまった、と森はいふ（基礎文献①）。

清張と井上の対立を収めようと森が苦労したのは訳がある。井上は、森が三角縁神獣鏡の国産説を初めて発表した学生社刊『古代史講座3古代文明の形成』の編者の一人だつた。さらに森は、六五年刊行の井上の著書『日本の歴史1神話から歴史へ』で考古学分野を助言した経験がある。奥付の著者名はあくまで井上だが、巻末の索引で森浩一の項は六カ所に及び、本文中で井上は次のように書いている。

以下しばらくの間の記述は、考古学者の森浩一氏に資料を提供していただき、かつ同氏との討論のなかから生まれたものである。

同書で井上は三角縁神獣鏡について「小林説への疑問」の項を設け、森説を紹介した。同書は中央公論社から出版された二十六巻本の第一冊目にあたる。そのような本で東大助教授の著書に実名入りで所論を引用されたことは、当時まだ高校教師だつた森にとって望外の出来事だつただろう。井上は「素人扱い」されてきた森の恩人であり、前掲の江上との対談でも森は井上に「先生」の敬称をつけている。その恩人と、「遊史疑考」で森説を列挙してくれた清張とが対立したのだから、森は板挟みになつた。

一方、清張にとつても井上は旧知の相手だ。清張は『中央公論』六六年六月号から『古代史疑』の連載を始め、本格的に古代史へ発言するようになった。翌六七年『中央公論』一月号は連載に代えて「シンポジウム 松本清張『古代史疑』を考証する」を掲載し、古代史や考古学の専門家が清張の古代史を正面から論じた。その場で司会を務めたのが東大助教授の井上だつた。井上は清張と同じく邪馬台国九州説の立場をとる。その後、清張と七〇年に『赤旗』紙上で対談し、清張編の単行本に収められた。十年以上にわたる関係があつたからこそ、シンポジウムの進行をめぐる意見が対立したとき互いに譲れなかつたのかもしれない。

実は、清張が井上と対立した『古代史シンポジウム国家成立の謎』の半年前、森は清張への苦言を雑誌で公表している。

どうやら学者扱いが学界で定着しつつあるようである。だが考古学は野外調査を伴

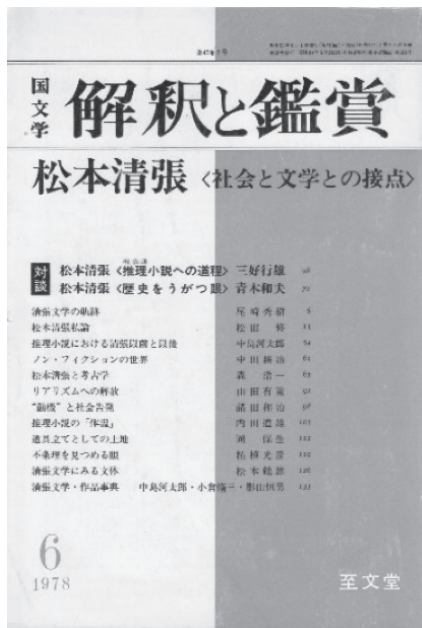
うものであって、その難関を越えないと物から歴史をよみとる力がふえない。一度弥生集落の遺跡でも古墳でも、発掘があると土掘りや図面づくり、さらには土器洗いまで経験されることを期待する。

(基礎文献⑦a)

当時、清張は六十八歳だった。それまでまったく経験のない「土掘り」や「土器洗い」をやれ、とはきわめて厳しい言葉だ。のちのインタビューで森は、少しくだけた言葉で語っている。

もともとは小林説（魏鏡説）と森説（倭鏡説）がどうして同じものをめぐってこれだけ食い違ふのかというスタンスの清張さんだから、このときも得意の推理から入ったらよかったわけでしょ。ところがだんだん、この段階まできたら、ぼつぼつ自分にもわかるというふうになってきた。僕は一回清張さんにいったことがあるのです。「あんたね、考古学のことわかるというのであれば、うちの研究室にきて、土器のかから一万ほど洗ってからにしてください」と。そうでないと本当の専門家にはなれませんよと。（中略）しかしご本人の、自分も専門家の一人でないやないかという思い込みが、東大の井上光貞さんと衝突してしまった。

(基礎文献①b)



清張を特集した雑誌『国文学 解釈と鑑賞』  
1978年6月号に、森は厳しい諫言を寄せた

清張が当初の「素人」というスタンスを離れて、自身を専門家だと位置づけるようになってきた。森は清張の研究態度に良からぬ変化を感じて、厳しい諫言を發した、というのが事の次第のようだ。

井上和清張はその後、関係を修復できたのだろうか。八〇年一月に東京で朝日新聞社主催の古代史シンポジウム「大化改新と東アジア」が開かれ、井上和が司会を務めた。清張も森も出席しなかったが、関係する記述が「清張日記」の一月二十一日付にある。朝日新聞社OBからの手紙として「(前略) 昨年はあなたのあざやかな司会で大変盛りあがりでしたが、本年は(中略) I先生の司会がモタモタしていたものですから、氣勢があがりませんでした。(後略)」と引用し、清張は断じる。

司会者は問題点や相違点を拾い出し、それをめぐって相互にディスカッションさせるべきで、ときには「激突」のために司会者が列席者を挑発するくらいの進行をなすべきだろう。司会者が学者で、出席学者たちに遠慮してははじまらない。

(基礎文献②)

この調子では、うまく修復できなかったのではないだろうか。『松本清張索引辞典』巻末の収録人名索引で井上光貞を引くと十七項目が挙がるが、『シンポジウム国家成立の謎』の書籍化(八〇年)以降の共同作業は見当たらない。他方、清張と森は、厳しい諫言やシンポジウムのトラブルを経たのちも、親交を続けた。

清張と井上和が衝突したシンポジウムから半年後の七九年七月十八日、森と清張は古代史学者の上田正昭を交え、隼人をテーマとしてNHKテレビの番組収録を行ったことが、森の「調査の記録3」から読み取れる。十一月には森と清張、上田、直木孝次郎が編集委員を務める『ゼミナール日本古代史』上巻が刊行され、翌八〇年一月には下巻が続く。「清張日記」同年二月九日付は清張が京都で講演の際に森が控室を訪れたと記す。以後も「清張日記」に森は何度も登場し、清張から森に届いた手紙類も八一年一月から七月までに六通が遺る。何事もなかったかのように、交友は続いた。

今研究のための調査で確認できた清張から森宛ての手紙は、八三年四月十三日付のはがきが最後だ。三日前に清張と森は、雑誌『國文學』九月号に掲載する座談会「古代を検証する」に青木和夫、中西進とともに出席した。そこで清張が言及した万葉集の相伴



卿の和歌について、はがきは出典を伝えている。この座談会は同年十二月に刊行された清張の著書『小説と古史への旅』に再録された。以後は、わたしが調べた範囲で二人の交流を示す著作や資料が見当たらない。そして八九年四月十九日に福岡で国際シンポジウム「古代日本の国際化」に同席し、それが最後の対面となる。

このシンポジウムを振り返る森の文章に、次のような一節があった。

十年ほどまえ（一九六〇—七〇年代）にくらべると清張さんと考古学との関係が薄れていたこともあって頻繁にお会いすることはなかった。

（基礎文献⑨）

八〇年代は清張と考古学の関係が薄れていた、と森はいう。そうだろうか？ 『松本

清張索引辞典』で八四年以降の著作を年次別にみると、八五年に清張編『古代出雲王権は存在したか』、翌年に清張編『銅剣・銅鐸・銅矛と出雲王権の時代』、八七年には清張編『古代出雲 荒神谷の謎に挑む』が刊行されている。八四年に銅剣三百五十八本、翌八五年に銅鐸六個と銅矛十六本が発掘された神庭荒神谷遺跡（島根県出雲市）をめぐって、清張はシンポジウムに二度、出席した。八九年に全国的な話題を呼んだ吉野ヶ里遺跡（佐賀県）も訪れ、邪馬台国の所在地について高島と意見を交わした。「吉野ヶ里遺跡は邪馬台国ではない」という高島の見解を聞いた後、清張は「逃げ水 邪馬台国」と題して『文藝春秋』七月号に寄稿している。

清張と考古学の関係は薄れたようには見受けられない。薄れたのは清張と森の関係だったのではないか。その証拠に、清張が関係した荒神谷関連のシンポジウムに森は呼ばれていない。森と親しい古代史学者の門脇禎二は出席しているのに、である。

親密な交流が途絶える八三年に、富山市の「日本海文化を考えるシンポジウム」の第三回が開かれ、江上波夫とともに黒岩重吾が特別講演を任された。

前章で述べたとおり、黒岩は清張が特別講演を引き受けた第一回のシンポジウムでパネリストを務めた。清張と黒岩は折り合いが悪かったらしく、シンポジウムの事務局を担当した藤田富士夫によると、初回に二人を招いた森は「これができるのは日本海シンポジウム以外にない」と胸を張った。黒岩は事前に富山へ取材に赴き、準備して臨んだ。ところが、清張が司会として飛び入りした討論の場で黒岩は自説を十分に展

開する機会を与えられなかった。「僕にも発言させてください」と黒岩が苛立ちの声を上げた、と藤田は記憶する。討論を収録した書籍『シンポジウム古代日本文化』（小学館）をみても、黒岩の発言回数は六回で門脇禎二（十一回）や大林太良（十二回）の半数しかなく、行数も半分以上にとどまる。清張の富山新港行きを回顧した「日文研ニュース」には、ホテルの朝食の席で遠慮しながら清張に「同席させていただいてもよろしゅうございますか」と声をかける慇懃な黒岩の姿も登場する。

黒岩は不満を抱えて富山を後にした。森は黒岩に気を使って第三回の講師に再び呼んだのだろう、黒岩は江上を尊敬していたから——と藤田はみる。

森の配慮の細やかさを伝えるエピソードといえよう。しかし、黒岩や司馬と折り合いの良くなかった清張からみれば、どのように映っただろうか。

この年の七月三十一日に、森が創刊以来、編集を手掛けてきた学術雑誌『古代学研究』の百号発刊を祝うパーティが大阪のホテルで盛大に開かれた。出席者名簿には四百三十五人が名を連ね、司馬遼太郎夫妻、黒岩、江上波夫、陳舜臣、画家の須田剋太たちが駆け付けた。一考古学者が編集してきた専門誌の百号記念としては、破格といえる豪華な顔ぶれだ。二次会は二会場に分かれ、司馬と黒岩がそれぞれホストを務めたという。これも著名な作家たちとの親しさを印象付ける逸話だ。



「森浩一編集の古代学研究100号を祝う会」で壇上に並ぶ森と司馬遼太郎（1983年7月31日、大阪市北区・ホテルプラザ）

しかし、名簿に清張の名はない。中世史研究者の網野善彦たち十五人の名があがる「当会に御祝をいただいた方々の御芳名」欄にもないのだ。

清張はこの年、五月から六月にかけ初めて中国を訪問し、十月にはインドを旅したが、パーティはその合間に行われている。たとえ原稿執筆などで忙しく足を運べなかったとしても、律儀な清張ならご祝儀くらい送りそうなのだ。その年の四月には同席した座談会での発言について、わざわざがきで出典を知らせているのだから。清張はそのがきを「またお目にかかり度いと存じます」と締めくくっている。

四月から七月末までの間に何があつたのだろう。関係を冷却させた原因は特定できないが、清張にしても森にしても、お互いをかつてほど必要としなくなっていたのは、そのまま縁遠くなっていた関係からみて間違いなさそうだ。その背景には、古代史ブームを牽引してきた二人が、それぞれ相手に代わりうる人脈を築いてきた事実があつた。

次節では、清張と森の交友の広がりを見てみよう。

## 広がる交友

森が司馬遼太郎と初めて会つたのは一九七二年三月二十九日、高松塚古墳の壁画発見を受けて産経新聞が用意した座談会の席だつた。二十六日に壁画の発見が報道され、調査主体の奈良県立橿原考古学研究所で指導所員の立場にあつた森は多忙な日々を送っていた。二十七日に新聞などの座談会を二つこなし、翌日は古墳の発掘現場に詰め、二十九日は大阪府柏原市の玉手山横穴群を訪ねたあと産経の座談会に赴いている。終了後に司馬から「ハイボールを飲みに行きませんか」と誘われた、と森は回想しているが（森浩一の考古交遊録）、「調査の記録2」によればその夜は四国の高松に泊まって翌日は徳島の縄文遺跡を訪問しており、初対面の司馬とハイボールを一緒に楽しめたかどうかは定かでない。

司馬との座談会を森は次のように回顧している。

當時をふりかえると、僕の気持のなかに「大丈夫かなあ」という不安があつた。というのは司馬さんと古代とは僕には未知数だったからだ。だがその不安はすぐに霧

消した。まだそのころは、壁画の系譜とか副葬品などを頭のなかで整理するのが僕には精いっぱいだったのに、司馬さんは「被葬者はこういう人かも知れませんが」と何人かの候補をあげられたのには驚いた。あまり知られていないことだが、高松塚古墳の被葬者の候補を最初に口にしたのは司馬さんだったのでなかろうか。

（森「須田剋太さんと司馬さん」『魂の考古学』）

森は、戦国時代を舞台とする司馬の小説『国盗り物語』を雑誌の連載（サンデー毎日、一九六三―六六年）で愛読したというが、古代を舞台にした小説はこの当時『空海の風景』（『中央公論』、七三―七五年）もまだ発表されていない。のちに森は行基の魅力を司馬に語つたが、こんな答が返ってきたという。

「森さん、行基さんはまだ洋服を着て歩いて来ないのです」

（森「個儻不羈の人」）

古墳の壁画をめぐる司馬との座談会を森が「大丈夫かなあ」と危ぶんだのも無理はない。しかしながら司馬は前章でみたとおり、六九年創刊の雑誌『日本のなかの朝鮮文化』に深くかわり、古代史研究者の上田正昭や作家の金達寿たちとの討論をとおして古代の渡来人やその文化に関する知識を蓄えていた。七一年六月刊行の第十号では、森の親友である考古学者の伊達宗泰の案内で上田、金とともに飛鳥を歩き、座談会「飛鳥をめぐる」に出席している。高松塚古墳の立地や築造された時代の状況なども頭に入っていたに違いない。

森は、司馬との初対面の座談会を次のようにも振り返っている。

初対面を感じさせない雰囲気、笑顔と軽やかな身のこなし、それと何よりも打ち解けた会話でつくりだされる。それは僕の知っていた学者の世界とはまったく違った場だった。

それから、僕の生涯の財産といってよい司馬さんとの接触がはじまった。

（森「個儻不羈の人」）

司馬は森より五歳年長で同じ大阪生まれ。森にとっては、身についた河内弁で話せることから司馬に大きな親しみを感じたようだ。

高松塚古墳の対談を一緒にしてからは、さまざまの機会にお会いするようになった。そのうちに、僕の話し言葉が緊張を失い、気がつくとも司馬さんとは河内弁でしゃべっている。このほうがいわんとすることがびたりと通じるのだ。

(森「須田剋太さんと司馬さん」)

「河内弁で話せる兄貴分というのが僕の実感である」とも森はいう。「個儼不羈の人」。こうした気安さを、十九歳年長で話し言葉も異なる清張に対して森が抱くことはなかった。

森は京都、司馬は東大阪と同じ関西に住んでいた。森が東京に住む清張と会う機会は限られたが、司馬に会う機会はしばしば訪れた。森の「調査の記録2」には、初対面から一カ月も経たない七二年四月十九日に京都・祇園の料理旅館で司馬と会った記述があるし、五月十日には京都・貴船の料亭で雑誌『日本のなかの朝鮮文化』第十四号の座談会「高松塚壁画古墳をめぐって」に同席している。

二人が親密さを増していくうえで同誌は重要な役割を果たした。発行人である鄭詔文をめぐる回想で、森は記す。

鄭さんとの付き合いはいっそう深まり、よく授業が終わったところに研究室に電話があつて二人で飲みに出かけた。たいてい京都・木屋町の居酒屋「れんこんや」で落ち合った。(中略)座談会のあとにも、司馬さんや金さんとよく出かけた。

(森「鄭詔文さん」)

同誌の座談会で森が司馬と同席したのは前章で述べたとおり四回だが、それ以外にも作家や研究者が集まる機会を同誌は設けた。七四年に鄭の自宅で撮影された写真には、森と司馬、上田、金、歴史家の林屋辰三郎、随筆家の岡部伊都子たち二十二人が顔をそろえる。森は金の両肩に手を置き、司馬も歯を見せて笑う。文化人が集うサロンとも呼べそうな、親密な雰囲気だ。

森の自宅には、額装した横長の墨跡が懸けてあった。森が自作の俳句「つつじ咲く丘に飛鳥の踊りあり」を縦三行に書き、司馬が文章を続ける。

山城の原谷の  
奥に山つつじ  
ありて赫土の  
坂を上りつつ詩

人金時鐘氏

言ふつつじは

夫レ朝鮮渡

来也と 踏み

且つ踊る 浩一

曰ふ 花影二

飛鳥の幻

を看るか



1974年、京都市北区の鄭詔文宅に集まった『日本の中の朝鮮文化』ゆかりの作家や研究者たち。3列目右から5人目が森で金達寿の肩に手を置く。林屋辰三郎、岡部伊都子、司馬遼太郎、上田正昭らの顔が見える

末尾に「四月二十日 司馬書 多少酔ふ」とある。京都北郊の原谷で同誌が野外の宴会を催した際に森と司馬が合作したとみられ、親交の深まりを物語る。同誌の関係では、次のような宴席も楽しんだ。

司馬さんは食べ物にはかなり好き嫌いの多い人である。だから、小説にも食べ物についての描写はそんなに多くない。ある時、「日本のなかの朝鮮文化」という雑誌の会合のあと、鄭詔文さんの招待で京都郊外雲ヶ畑の川魚料理屋へ行った。司馬さんは、魚のなかでも川魚は拒否反応ものなのだ。最初、突き出しがでた。すると小さな声で「そのカマボコをおいといて」。大きさをいえば、マッチ箱半分ぐらいのカマボコ。僕は司馬さんの鮎の塩焼きを二切れほどのカマボコと交換した。

この日も、司馬さんはあまり食べられなかった。暇そうなので僕がポンプの誘い水よろしく、下手な俳句を一つ、著紙に書いて渡すと、ポンプから勢いよく水が出るように「韓比との笑いこだまし貴船川」とか「時雨しぐれるるや鳴神出づるか酔さそふ」な



どの俳句ができた。

(森「個儻不羈の人」)

第一章で述べたとおり森は食べ物への関心が強かった。それだけに、司馬の好き嫌いをも見逃さなかった。司馬への同じ追悼文で森は、京都・祇園のお茶屋のこんな気配りを記した。

司馬さんは小食である。小食の人をもてなすのには普通以上の気配りがある。それなのに、川魚でもてなされたことが僕の知るかぎりでも何回かある。気配りが足りない。その点、祇園のつる居は、司馬さんの好みをおぼえていて、会議などの後の食事は、司馬さんだけに、シューマイ、鯖鮓、お好み焼きかタコ焼きをそろえてくれる。

二〇一三年に森が他界した後、わたしは「つる居」の女将・田中泰子<sup>ひろこ</sup>を訪ねて、この記述も話題にした。返ってきたのは意外な言葉だった。

「森先生が司馬さんのお好みをよう知ったはって、いろいろ教えていただいたんです。カマボコは上等な硬いのより、市場で売ってるような軟らかいの出したってや、とか。ものすごく細かいことまで、人に対して気を遣わはるかたでした」。

こうした森の気配りが、司馬に伝わらないはずがない。先に示した雲ヶ畑の料理店で鮎とカマボコを交換した逸話は、司馬が森を気おけない相手だと位置づけていたことを裏付ける。

京都は司馬にとって、二十代から新聞記者として取材に歩いた懐かしい土地だった。司馬が京都を訪れた機会に森を呼び出し、酒席をとにもすることもあったようだ。夕方に「今から先斗町のますだに行くからこないか」と司馬から電話があり、仕事を中断して出かけた思い出を森は記している。「ますだ」も森と司馬のお気に入り、おぼんざい料理の店で、座敷に屏風仕立ての司馬の書を飾っていた。司馬が「オアゲもカシワも入れないで」タケノコご飯を炊くよう女将に頼む姿を、森は回想に記している。

「お酒を飲みながら司馬さんの話を聞く機会は、四、五十回はあっただろう。楽しい場だった」と森は回顧した(「前より迫ってきた死」)。

司馬は森の専門領域である古代に関して、清張ほど積極的な発言はしなかった。他方、森は中央公論社の『日本の古代』全十六巻を編集する際、監修を江上波夫、貝塚茂樹と司馬に依頼した。また、講演者として何度も司馬を招いた。前章で触れた富山市での「日本海文化を考えるシンポジウム」(八二年と八九年)のほか、同志社大学で開かれた新島襄の永眠百周年記念講演会(九〇年)が確認できる。司馬は新島の遺言から「個儻不羈」という言葉を引き「人に御せられない人、そして明快な、いつも明晰な考えをもっている人、それが個儻不羈であります」と述べた。森は、司馬こそ個儻不羈の人だ、と記している。

森と司馬は中国への旅を二回、ともにした。一回目は八一年で上海、蘇州、杭州、紹興、寧波、成都、昆明を巡歴した。二回目は八四年で作家の陳舜臣が団長を務め、団員には民族学者の松原正毅も加わり、福建省に古文化を訪ねた。どちらも司馬は『街道をゆく』の取材を兼ねており、一回目は「江南のみち」「蜀と雲南のみち」、二回目は「閩のみち」にまとめた。

「閩のみち」では、女性の中国人記者に森が「オリヴ」とあだ名をつけたことが明かされる。森は『街道をゆく』に時々登場する自身について「悪そうに書いてある」とわたしにばやきつつ、まんざらでもない表情だった。

福建省でかつて焼畑を営んだ少数民族・シヨ族の住む福湖村を八四年に訪れた一行は、伝統芸能の歌垣を鑑賞し、昼食をこちそうになる。

「ずいぶん、この村のひとに世話になったが、お返しするものがない」といったのは、物事の気配りのいい森浩一教授である。だから陳さん、司馬さん、なにか字を書いてゆけ、といった。私は悪筆で無芸だから遠慮をし、陳舜臣氏を説得した。

(司馬「焼畑族」『中国・閩のみち』)

中国でも気配りを発揮した森にとって、司馬との中国旅行は知的な刺激に満ちていたようだ。

司馬さんとの中国の旅では、夜になると一まわり広い団長室の床に、ベッドのカバーを敷いて、そこへ車座になる。つまり椅子を使わない。この形は司馬さんの好みで、日本でも応接室の椅子をかたつけて車座になったことがある。(中略)司馬さんの話が面白い。まあ数時間の集まりの三分の二ぐらいは司馬さんの時間、そのうち眠くなった人が抜け出し、僕は十一時前後まで楽しんだ。それが連日続くのだ。正直いって、講演よりも、あるいは活字になった内容より、この車座談義のほうが僕には愉快で知識になった。

(森「個儼不羈の人」)

椅子を使わない、という形式は、森の好みでもあった。同志社大学の森の研究室は、床の一部に畳を敷き、応接セットのテーブルを森は座卓のように使って仕事をした。週に一度の定例研究会も、畳敷きの研究室で森は開いた。

森は七三年、清張にベトナム行きを誘われながら、大学の勤めのため同行できなかった。清張は、森とも親しい江上波夫や大林太良とともに赴いた。もし森が同行していたら、清張との思い出にどんな一ページが加わっただろう。週三回の透析治療を受けながら森が最期まで訪問を望んだ外国はベトナムだった。

森が遺した文章には、清張と司馬を比べる記述がいくつかある。

僕は、松本清張さんとも一緒にした機会はかなりあったが、見知らぬ人から著者にサインを求められてもほとんど断っておられた。これにくらべると、司馬さんは快くサインに応じておられた。

(「個儼不羈の人」)

第二回の富山市のシンポジウムの特別講演に司馬さんに来てもらった。司馬さんは講演はおやりになるが、シンポジウムは学者のこととして出席されなかった。その点が松本清張さんとの違いだった。

初日の夜にレセプションがあった。清張さんは最初の挨拶にだけ顔を出し、あとは部屋で小説の執筆をされた。司馬さんは催しの終わるまで付き合ってくれ、さらに知人など十人ほどで酒場での談笑を楽しまれた。酒場を梯子し、さらにホテルの

司馬さんの部屋で深夜まで付き合った。といって司馬さんは大酒飲みではなく、座談の名人だった。

(「司馬遼太郎さん」)

二人の共通性は、あれだけ忙しい人なのに、対談が終わったら、必ずどこかに飲みに行こうとおっしゃる。二流の作家はその点は駄目です、二流の作家はとんで帰る。原稿がありますといって。(中略)おふたりの共通性は食い物に対する弱さ。作品中にどっちも食い物の名前があまり出てこない。おふたりとも食い物には興味が少ない。

(「松本清張さんの古代史」)

清張が富山市でのレセプションで途中から「部屋で小説の執筆をされた」(実際は富山新港へ取材に行った)ことを、森は快く感じなかったのかもしれない。二人を比較した記述では、司馬の打ち解けた軽やかな雰囲気が残る。一方で清張の食への関心について、晩年の森は評価を改めることになる。

司馬のことが長くなったが、森は他の作家とも親交を持った。直木賞作家の黒岩重吾は同じく大阪出身で四歳年長、同志社大学の先輩にあたる。対談をしたり、富山市の



黒岩重吾(左)と森。セスナで遺跡を上空から見た  
(1976年10月15日、大阪・八尾空港)

シンポジウムにパネリストとして招いたり、福井県丸岡町（現・坂井市）が主催する「一筆啓上賞」の選考委員とともに務めたりした。八尾空港（大阪府）から小型機に同乗して古墳を空から見たりもしている。九三年に募集を始めた「一筆啓上賞」では歌人の俵万智、川柳作家の時実新子とも一緒だった。前身の「振媛文学賞」は二回で終わったが、中山千夏や黒岩と選考をともにした。

山本有三（一八八七―一九七四年）との交流についても触れねばならない。一九六五年、山本は森に、小説の題材を得るため大阪府南部の遺跡へ同道を依頼した。中学生のころ山本の小説「女の一生」や「路傍の石」を読んだという森は六五年当時、大阪府立泉大津高校の教諭で、まだ清張と出会っていない。山本は、森が末永雅雄、島田曉とともに執筆した発掘調査報告書『和泉黄金塚古墳』（五四年刊）に、英文の抄訳も含めて目を通しており、森を驚かせた。

五月に河内大塚山古墳や志紀県主神社などを巡る途中で森は、堺市の自宅へ昼食に山本を誘った。母の手料理をほめた山本を、森は「心のこもった礼をさりげなく言える人」と感じた。九月から森が同志社大学の専任講師に就くと、山本は京都ホテルで天ぷらをご馳走してくれただという。

後日、森は保存が危ぶまれた田能遺跡（兵庫県尼崎市）へ山本を案内した。参議院議員を一期務めた山本に、文部省への影響力を期待したようだ。『森浩一の考古交遊録』の最初の項は、この心遣い細やかな文士に捧げられている。

「清張さんと一番親しかった考古学者は、佐原真さんでしょう」

二〇一六年八月、福岡市でインタビューした考古学者・高島忠平は、わたしが「松本清張と森浩一の交流について調べている」と告げると、こう断言した。

確かに、佐原は『松本清張全集65 清張日記・エッセイより』の「解説」に次のように書いている。

お宅を訪ねたこと、外で御馳走になったことがそれぞれ十回ほど、シンポジウムが五、六回、共同の本作りが四、五回、そして二十日間ほどのイギリス・フランス旅行を一緒にした。

このうち「シンポジウムが五、六回」は森と清張が同席した回数に遜色なく、「共同の本作りが四、五回」もシンポジウムの書籍化を除いた数字であれば大差はない。他方、佐原が「十回ほど」訪ねたという清張宅を、森が訪れた気配は薄い。高島が降車駅を間違え約束の一時遅れで訪問したという清張の自宅へ、森が招かれなかった理由はわからない。

清張は一九六一年九月、東京都杉並区上高井戸に新築した自宅へ移り住んだ。「はじめは二百五十坪であったが、その後、買いたして現在は四百坪になっている」と清張の口述の速記者を務めた福岡隆の著書『人間・松本清張』にある。記述によれば二階建ての家は約百坪（三三〇平方メートル）、「横庭にはわざわざ秩父の山奥から巨大な自然石を運んで枯山水をつくったり、白樺の若木を植えたりし、また前庭には奈良東大寺の礎石の一つを据えたり、巨石や老楓を配置し、池を掘り、滝を落したりしてみごとな庭園を造成した」。十一月十五日に新宅披露を盛大に催し、焼き鳥などの模擬店が芝生の庭に並んだ（祖田浩一「不機嫌な作家たち」）。四月に発表された六〇年度の長者番付で作家部門の首位となり、六一年は直木賞の選考委員に就く。飛ぶ鳥を落とす勢いだった。

佐原真（一九三二―二〇〇二年）は大阪で生まれ、小学校の途中で東京へ転居した。大阪外国語大学ドイツ語科を卒業後、京都大学大学院で考古学を修める。六四年から勤務した奈良国立文化財研究所で埋蔵文化財センター長を務めた後、九三年に国立歴史民俗博物館へ転じ、九七年から館長を務めた。

清張との出会いは六〇年代にさかのぼる。前に触れたとおり清張は『中央公論』六六年六月号から「古代史疑」の連載を始め、翌六七年一月号は「シンポジウム 松本清張『古代史疑』を考証する」を掲載した。佐原は上田正昭に誘われ、上田、井上光貞、牧健二とともに出席した。「三十代半ばの私は、まだ弱気で、いならば先生方を前にたじろぐばかりであった。ことに眼光鋭く唇厚い松本さんはこわく、とても異論などいえなかった」と佐原は振り返る。

清張はそのあと、同じ邪馬台国九州説に立つ井上だけでなく、大和説を唱えた上田とも交流を続けた。一方、佐原と清張の交友はすぐには芽生えなかった。シンポジウムでの佐原の発言をみれば、その理由は想像できる。



古墳時代に入ると、魏の鏡が畿内を中心に分布しているという重大な事実があります。そして小林行雄先生は、これらの鏡が畿内から各地に分与されたことを論証されています。したがって九州か畿内かという場合、畿内を考えた方が矛盾が少ない、と私は考えております。

三角縁神獣鏡を「魏の鏡」と断じて疑わない姿勢、そして師の小林の論証を前提として自説を展開する先学重視の態度は、いずれも清張のちに連載「遊史疑考」で打倒を目指した対象に当てはまる。この席で佐原は土器や石鏃、銅鐸など遺物の調査例を詳しく挙げ、清張の九州説に対し実証的な批判を加えた。けれども清張は納得しなかったのだろう。このシンポジウムが雑誌に掲載されたところ、森は同志社大学の専任講師に就いて一年半ほどだった。四年あまり後に清張は森の自宅へ電話し、佐原が示した定説に正面から挑みかかる。

清張と佐原の再会は、佐原によれば一九八一年、『清張日記』の九月九日にある次の記述の際だという。初対面から十五年近くが過ぎていた。

タクシーで「上つ道」を走り、飛鳥資料館に行く。雨、降ったり熄んだり。

資料館の猪熊兼勝学芸室長に会う。これは昨日、平城京資料館で佐原氏より猪熊氏が自分の飛鳥石造物の所論に反対意見を書いたものがあると聞いたため。

八日に会った佐原が、翌日の記事に添え物のように顔を出している。まだ関係はごく浅い。しかし二人はここから急速に接近し、先の佐原の回想にあるような共同作業を展開した。『松本清張索引辞典』末尾の「収録人名索引」で佐原眞を引くと、二十九項目が挙がっている。

佐原が「五、六回」というシンポジウムでの同席は、「鳥栖銅鐸と二〇〇〇年前の西日本」(八二年八月、佐賀県鳥栖市)、「古代出雲王権は存在したか―弥生銅剣大量出土の謎に迫る」(八四年十月、松江市)、「出雲・荒神谷は何を語るか―銅剣・銅鐸・銅矛、一括埋蔵の謎」(八六年三月、松江市)、「国際シンポジウム古代日本の国際化」(八九年四月、福岡市。森も出席)の四回が確認できた。このうち三回は古代史家の門脇禎二が同席している。清張は亡くなる半年あまり前に佐原、門脇との三人で「大化の改新は本当

にあったのか」と題し、弥生時代から平安初期までを縦断する鼎談を雑誌『現代』九二年一月号で繰り広げた。最晩年に信頼を置いたのは佐原と門脇だったといえよう。

清張が佐原と親交を深めた八〇年代は、清張と森が疎遠になっていった時期と重なる。つまり、清張は佐原と、森は司馬と、深く付き合うようになり、それにつれて清張と森の関係は徐々に遠のいた、とみることもできる。

森にとって司馬は「河内弁で話せる兄貴分」という、清張にない魅力を用意した相手だった。それでは清張からみて、佐原にはどんな魅力があったのだろうか。

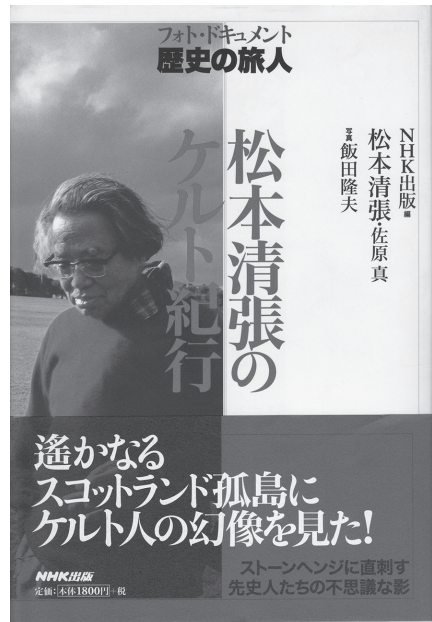
留意しておきたいのは、清張と佐原が古代史や考古学に関する見解を異にしていた点だ。佐原は清張の没後、その古代史研究を次のように位置づけた。

松本清張さんは推理小説との係わりから考古学・古代史を追究するだけではなかった。本業の研究者顔負けの学習、特に学史的基礎が松本古代史を高めていた。ただし、学術的な勉強ではなかったためか、穴はあった。たとえば初めて三角縁神獣鏡を手にしたのは、実は三角縁神獣鏡国産説をとえられてだいたってからのことであって、その場にいあわせた私は、正直あきれたのであった。物もみないでよくあそこまで言えたものだ、と。

松本さんは、私にあれだけ長電話で意見を求めながら、書くときは私見を採用されることは少なく、独創的な自説を展開された。松本さんの書いたものには承服できないものも沢山ある。しかし(中略)考古学研究者では到底考えつかないような発想がいたるところにちりばめてある。したがって考古学の専門家にとっても、松本古代史は大いに刺激的な存在であって、新しい着想・創造への湧れることのない泉である。古代史研究者からみても同様に違いない。

(佐原「はじめに」清張『清張古代遊記 吉野ケ里と邪馬台国』)

清張が森の三角縁神獣鏡国産説を支持したことを、佐原は冷ややかにみていた。同じ考古学者ではあるが、国立大学で学び国立の研究機関に勤務した佐原と、町人学者を称揚し国立研究機関の不要論まで唱えた森とは、まったく考えを異にした。遺構のなかでの遺物のありかたを重視する森と、京大の遺物研究の伝統を受け継ぐ佐原とは、考古学に取り組む手法も対照的だった。



清張の没後7年を経て刊行された『松本清張のケルト紀行』（NHK 出版）。佐原真と同行したスコットランド訪問を記録した

同じ文章で佐原は、先に紹介した清張が亡くなる半年あまり前の鼎談について「松本さんのお考えに私はことごとく反対している」と振り返った。清張は佐原の見解を退け続け、佐原も清張の説を受け付けなかった。つまり、清張と佐原の関係は、清張と森が組んだ学問上の共同戦線のような性格を含まない。それでも、清張は八五年に二十日間ほどの欧州旅行を佐原とともにした。瀬戸内晴美に「松本清張さんは大へん人見知りをなさる方で余程気持が合わない」と旅を出来ないという癖がある、と書かされた清張が、である。

瀬戸内はまた、清張を「大そう神経の細い、思いやりのある人で、礼節をわきまえた方」と述べ、「つつしみの深い立派な紳士の面の松本清張氏としか私はつきあったことがない」と記す。清張全集の月報に寄せた文章だから、多少の美辞は含んでいるだろう。しかし、まさに清張が活躍しているさなかの七一年に発表した文章であり、清張を知る人も多く目を通す月報だけに、事実には全く反することが書いてあるとは思えない。

ここにある「礼節」「紳士」をキーワードとして清張と研究者の交流を見渡すと、あてはまるタイプの学者が思い浮かぶ。小説『火の回路』をめぐる数多くの書簡をやり取りした建築史家の福山敏男（一九〇五―一九五五年）は、瘦身に背広を着こなし端正な紳士であり、その書簡からは折り目正しさがにじみ出る。門脇禎二は大柄で声は太く、チェーンスモーカーでもあったが、人柄は温厚篤実で京都府立大学と京都橘女子大学の学長を務めた紳士だった。佐原は宴席でスピーチの指名を受けるとやにわに外国の

歌を朗唱する個性的な面もあったが、国立博物館の館長を務め、スーツにネクタイ姿が思い浮かぶ。「礼節」をわきまえた「紳士」である清張が、自己と共通する美徳を備えた研究者との親交をより深めていったのだと仮定したら、どうだろうか。

森を「紳士でない」と言うつもりはないが、「紳士である」と言えば、森自身がくすぐったがる気もする。長年、大学教授を務め、場をわきまえて自律する感覚も優れていた。けれども、「私は豪華なご馳走にさそわれるのは楽しくなく、飲み屋風の気楽なところが好きだ」という言葉や、司馬を「河内弁で話せる兄貴分」と慕うあたり、「紳士」という格調高いイメージよりも、もっとざくばらんな魅力に森を感じる。そうした森と清張の指向の違いが、少しずつ距離を遠ざけた一因かもしれない。考古学者の伊達宗泰は、親友の森について次のように書いている。

旅先の飲み屋など関西弁で天衣無縫の冗談をとばしていると、何様だろうと興味をもたれるそうだ。宜やかなと感じる。

（伊達「ぶろふぃーる」『歴史と人物』一九八二年）

若いころの森は眼光鋭く、眉は吊り上がり、どちらかといえばいかつい顔つきだった。『考えた！ 怒った！』と随筆集に題したとおり、考古学界のみならず社会に対してもいろいろ義憤を感じていたようだ。怒りっぽくて怖い印象を持たれていたかもしれない。

身近に接すると、ユーモアのセンスがあり、思いやりに満ちた人柄だとわかる。司馬との中国旅行での逸話を紹介したとおり、初対面の人にあだ名を付けるのが得意だった。シンポジウムについて「公開の場合は聴衆がそこでの受け答えを興味をもって聞いているわけです。僕らもとつさに新案が出たりしてね、刀でいったら、相手をとつさに突き伏せたということがある」（基礎文献①b）といささか物騒なたとえで語ったように、大学の講義に加えて一般向けの講演やシンポジウムを数多くこなした森は、聞き手の関心をそらさない勘所をつかみ、得意即妙の話を磨いていた。

清張はどうだろうか。講演会で森がまず話すと、次に演壇に立つ清張はこうばやいたという。「君のあとでしゃべると、しゃべりにくい」（同）。ユーモアに関しても、森ほどの柔軟性はなかった。『週刊朝日』の担当編集者だった重金敦之は分析する。

自分が「面白がつて」読者に「面白く」読ませていれば、機嫌なのだが、逆に自分自身が「面白がられる」のは好まなかった。

(重金『作家の食と酒』)

自分自身が面白がられるのを好まなかった背景には、作家になる前の長い鬱屈した半生があるのだろう。育ちや学歴は清張にとつてコンプレックスであり、それを克服すべきものとして正面から論じることができて(たとえば「学歴の克服」、他者から揶揄されるのは我慢ならなかったのではないだろうか。

森は、清張に作品の感想を述べて激怒された経験を語っている。

僕は清張さんに、「清張さんの小説を読んでいたら、男と女の濡れ場が少ない」といったら、えらく怒り出してね。「あなた、そういうことをいう以上は、私が殺人の場面を書くときに、いちいち殺人を経験せよというのですか」。そのとき彼はふだんと違ってムキになっていた。男女の濡れ場が出てこないし、書き方がへたやと思って、「それは私が経験が少ないといっているのか」ととらえて、殺人のたとえて、「殺人の場面を書くときはいちいち人を殺してから書けというのか」と。あのときは面白かった。

(基礎文献①b)

濡れ場から殺人へ、話を置き換えていくところに清張の心情が反映されていると感じる。男女の話はしたくない。女性に関しても、清張はコンプレックスを抱いていたのか。瀬戸内寂聴の回想を信じるなら、著名な作家となった清張は女性からも人気を得ていたようでもあるのだが。濡れ場の表現に関しては『週刊読売』六二年六月三日号で、近藤日出造の対談連載「やアこんにちは」に清張が登場し、ズバリ「愛欲描写はニガ手」とタイトル見出しになっている。

もう一つ、森が清張の不興を買った事例を挙げておこう。富山市で八一年に開かれた第一回「日本海文化を考えるシンポジウム」の反省会の席上だった。富山港に近い豪壮な料亭「松月」が会場で、シンポジウムの司会を終えた清張は上機嫌だった。女将の黒田笑子に請われ、愛用の万年筆を触らせてもいる。

宴もたけなわ、清張は得意の「悪妻論」を披露した。ソクラテスの妻は悪妻、森鷗外は悪妻家。悪妻を持たなければ偉人になれない―黒田は「清張先生の独壇場だった」と鮮明に記憶する。そこへ森がツツコミを入れた。「清張さんも、そうですか?」。清張はムツとした表情で黙り込んだ、とシンポジウム事務局を担った藤田富士夫は証言する。

一九〇九(明治四十二年)生まれの清張と一九二八(昭和三年)生まれの森は、没年も二十一年違い(清張一九九二年、森二〇一三年)だから、およそ二十年の時を隔てて人生を送ったと理解してよい。十代のころから末永雅雄や梅原末治たち年長の考古学者と付き合ってきた森は、「国立大学の研究室では当時、学生は教授の前に出ると直立不動でね」とわたしに苦笑して語ったことがある。同志社大学の学生だった森は、直立不動を横目に坐ったままだった。年長者を畏怖しない森の感性が、清張に「礼節に欠ける」と映った可能性は否定できない。

森と河内弁で語り合った司馬について、次のような証言がある。

安野光雅 これは言っていないかどうか知らないけれども、今東光の悪口なんかも言うわけ。第三者が聞くと、あんなことを言っているのと思うようなことを言うんだけれども…。あれは、今東光が聞いても決して怒らない。

姜在彦 あれは河内流のパンチだと思います。

安野 河内というのはそういうところなのね。それを私はうらやましいと思いますね。しかし、司馬さんは、書くこととしゃべることと少し違って、気持ちのいい悪口を言うんだよね。讒訴というのではなくて、冷やかしている。要するに距離が近いわけですよ。それは半藤さんだって例外じゃない。

半藤一利 いくらか自己批判を交えてやるんですよ、あの方は。

安野 コケにしながら、一方で多少はめてくれるんです。

姜 いやいや、めっちゃ、ほめるでしょう。

(鼎談 俺も生きたや、司馬遼のように)

こうした「河内流のパンチ」の効いたコミュニケーションが、森と司馬を深く結び、逆に清張と森に距離を生む遠因となったのではないだろうか。



## 第五章 贈り物

### 山陵の史料

二〇一二年六月十六日、森の旧蔵書を保存公開する愛知県春日井市の森浩一文庫で、展覧会「天皇陵古墳と松本清張」が始まった。前期（七月十五日まで）と後期（九月十二日―十一月四日）合わせて四十七件の史料を陳列、このうち元禄年間の『諸陵周垣成就記』など二十八件は森が清張から譲り受けたことから、展覧会名に清張の名が入っていた。初日の午後は翌月八十四歳を迎える森が毎年恒例の講演を行い、高松塚古墳の被葬者像を語った。森は翌十七日には横須賀へ赴き、関東学をめぐる講演も行っている。

清張から史料を譲り受けた事情を、森は一年ほど前に上梓した著書『天皇陵古墳への招待』に記していた。

ぼくは晩年の松本清張さんから段ボール箱いっぱいのお天皇家古墳の本や古文書を頂いたことがある。長年の交友の想い出と天皇陵古墳の研究を進めるために贈られたのであろう。



森浩一文庫（愛知県春日井市）で開かれた展示「天皇陵古墳と松本清張」のリーフレット

別の機会には次のように語っている。

ある日、清張さんから電話がかかってきて、「君、天皇陵の資料、ありますか」。僕が天皇陵古墳のことを研究していることを、清張さんは知っていた。「いりますか。僕が、清張さん、どういう意味ですか」「古本で大量に買ったので、君がいるんなら送ります」といって一箱送って来た。（中略）今から考えたら、長年、電話などのやり取りに対するおれだったのではないかな。貴重なものです。宮内庁が買いにいったら、もうすでに清張さんが買ってしまったということもあったそうです。清張さんは、いざくれるようになったら、びっくりするほど高価なものをくれた。

（基礎文献①b）

どちらも時期を明示していない。八十代の森が「晩年の松本清張さん」という以上は清張が八十歳前後の出来事かと思いたいが、国際シンポジウム「古代日本の国際化」（一九八九年）で同席した以外の接触は確認されていない。

「宮内庁が買いにいったら、もうすでに清張さんが買ってしまった」というくだりは、清張の快挙に感心する森の口ぶりが想像できそう。森自身も史料を購入するときの決断は素早かった。加えて森は、宮内庁による天皇陵の被葬者の治定に対して、考古学や古代史の研究成果に照らして明らかな間違いがあると批判し、著書『古墳の発掘』（六五年）に続いて『天皇陵古墳への招待』にも治定の学問的信頼度を一覽表として掲げた。天皇の名を冠して古墳を呼ぶ（たとえば「仁徳天皇陵」など）習慣に対しても疑問を投げかけ、地名で呼ぶ（たとえば「大山古墳」など）よう提唱し、現在ではかなり定着している。学問の進歩のため天皇陵古墳の調査を認めるべきだとの意見も発表した。

森がライフワークとして取り組んだ天皇陵古墳の研究に役立っただろうと、清張が貴重な史料をプレゼントしたのだから、森が喜んだのは間違いない。中には森が敬意を抱く幕末の官僚・川路聖謨が記した『神武御陵考』の自筆草稿とみられる古文書も含まれていた。

天皇陵古墳に関する史料だけでなく、清張は別の資料も森に贈ったことがある。七三年十一月から翌月にかけて、清張は「ベトナム古代文化視察団」の団長として、江上波夫や大林太良たちとベトナム民主共和国（北ベトナム）を訪問した。森も清張から誘わ

れたが、大学での仕事の都合で参加できなかった。その訪越の際に入手したベトナム語の文献のコピーを、清張は森に送った。

北九州市立松本清張記念館には、森から清張に宛てた唯一残る手紙として、この文献への礼状が保存されている。日付はなく、封筒の表が台紙に貼られているため消印も確認できないが、次の記述からみて七四年一月前半に書かれたと考えて間違いない。

別の件ですが、この度末永雅雄先生が朝日賞をうけられることになり、十六日に私もお伴して上京、翌日、前田青邨さんのアトリエで高松塚の壁画模写を末永先生と拝見することになっております。

#### （基礎資料①）

森の遺品に、七四年一月七日付の消印が押された書留郵便の包み紙（全体でなく宛先と差出人、切手の部分だけ残した断片）がある。差出人は清張で、ベージュ色の紙の裏には「guzablume」の文字と欧州の地図が描かれている。どうやら銀座にあるインテリアショップの包装紙を書留の封筒に転用したようだ。何を送ったのかはわからないが、通常の封筒に納まらない、かさばる物だったようだ。時期からみてベトナムの文献コピーだったかもしれない。

この七四年一月は、森が解説を書いた清張の『古代史疑』中公文庫版が十日に刊行され、これも森が書いた清張の『遊古疑考』の書評が十四日付の『朝日新聞』朝刊に掲載された。十六日に東京へ赴いた森は、翌々日に清張と昼食をとにした、と「調査の記録3」に記す。その後なにか清張へ資料を送ったのだろうか、二十五日の消印で清張から会食と資料送付への礼状がはがきで届く。親密な交友のときであり、二カ月後にはクレッセントでの晩餐が実現する。

二人の交友の初めは、清張が連載「遊古疑考」で森の三角縁神獣鏡国産説を詳細に取り上げたことだった。素人扱いされて考古学界では新説をまともに論じられることもなかった森にとって、高い人気を集める芥川賞作家からの支援は心強かった。清張の知名度は、森が出版の仕事を進めるうえで陰に陽に役立った。清張は森の著書の帯に長い推薦文を寄せた。東大五月祭で対談したあと食堂で森にビールをおごり、さらに

銀座のバーへ案内した。高級フランス料理店にも招待した（質問攻めにして森は食べられなかったが）。そして清張は、天皇陵古墳にまつわる史料や、ベトナム語の文献のコピーなどを森に贈った。

それらは、友情と思いやりを込めた清張からの素晴らしい贈り物だった。けれども、森の晩年の著述をみたとき、それらと同等以上の贈り物を森は清張から受け取っていたのではないかと、わたしは感じる。

森は『天皇陵古墳への招待』刊行に先立つ二〇一〇年、もうひとつのライフワークだった『三國志』魏書東夷伝倭人の条（いわゆる「魏志倭人伝」）について、自己の研究の集大成を試みた。『西日本新聞』に一月五日付から三月十二日付まで三十六回にわたり連載した「倭人伝」を読み直す」であり、同年ちくま新書『倭人伝を読みなおす』としてまとめた。その「あとがき」に清張が登場する。

在来線で小倉へ行き、小倉城の入口近くにある松本清張記念館を訪れた。松本清張さんは九州で育ち、鋭く倭人伝の問題点を照射したことは本書でも述べた。今回は清張さんの最後の大作である『神々の乱心』が特別展のテーマである。ぼくは人生の最期の瞬間まで小説の執筆に努められた清張さんの生きざまを見事とおもう。

『神々の乱心』を執筆中のころとおもえる清張さんの述懐が会場に掲げてあった。「本当に瑞々しい作品は若いときには書けない」

『倭人伝を読みなおす』の執筆を終えた直後でもあり、清張さんが晩年に本心を吐露されたこの言葉の前でぼくは立ちすくんでしまった。「瑞々しい作品」はぼくには書けないだろうが、「悔いのない作品」ならばくにも書けそうである。

発病後、関門海峡は初めて渡ったのだが、清張さんの遺言ともいってよいこの言葉に会えてよかった。

#### （基礎文献⑪）

この十二年前に、「清張古代史を語る」と題する森への長いインタビューが『松本清張研究5』（砂書房）に掲載された。二人が最後に対面した国際シンポジウム「古代日本の国際化」にも話は及び、森は清張の老いた姿を回想した。

あのころは鋭さも気力もなかった。このときも司会をやりがれた。九州大学（当時）の西谷正さんが司会のサブをして、西谷君が困っていた。清張さんが、とんちんかなことをいうので。耳がそろそろ遠かったのかなあ。耳が遠かったから、ご本人も歯がゆい思いがあったんじゃないかな。自分はこう聞いたと思ってしゃべったら、他の人たちは「何、これ」ということですね。それが僕と清張さんの正式の出会いの最後でした。

（基礎文献①b）

清張についての長いインタビューで、森の発言はこの言葉で終わる。どこか辛辣さが感じられるのは、森が当時まだ六十九歳で同志社大学の現役教授、愛知県春日井市で毎年恒例の「春日井シンポジウム」を主導するなど、「鋭さ」と「気力」に満ちていたからだろう。「とんちんかなことをいう」パネリストは、他の出席者にとって迷惑であり、人選から外さなければならぬ。

しかしそれから十二年を経て、清張に対する森の評価は大きく変化した。森は八十代となり、最後に対面した八十歳の清張を上回った。

森は清張の小説をあまり読まなかったようだ。先のインタビューでこう語っている。

あくまでも僕は文学者としての清張さんというよりは、考古学や古代史の専門にかかわる非常に難解な言葉でも努力してこなし清張さんという存在、それを長年みていた。

（基礎文献①b）

森文庫に並ぶ清張の著作は意外に少なく、森が関係しない清張の単行本となると十冊ほどにすぎない。司馬遼太郎の著作が五十冊を超えるのに比べれば少なさは一段と際立つ。けれども森はすくなくとも清張の長編『火の路』と『神々の乱心』は読了していた。『火の路』は文庫版に解説を書いたし、『松本清張研究』第十一号（二〇一〇年）に『神々の乱心』にみる考古学と食文化」を寄稿しているからだ。『神々の乱心』は読みにくく、再読するのに時間がかかったとわたしは森から直接聞いたことがある。

その『神々の乱心』にみる考古学と食文化」に、森は清張に関する新発見を記してい

る。タイトルにある「食文化」で、それまで森は清張を司馬と同様「食への関心が薄い」とみていた。長崎の名物としても知られる「からすみ」を食べた時のこと、清張は森に尋ねたという。「辛いね、これ何」（基礎文献①a）。からすみは高級な肴だから甘党の清張は口にする機会がなかったのかもしれないが、清張と食に関しては次のような証言もある。

昭和二十六年頃でしたか、私の家で清張さんと友人で福岡の作家の中村光至君と三人で食事をしたとき、女房がピーマンの肉詰めを出したんですね。私が席を外した隙に、ピーマンを指して中村君に「これは何か」と尋ねたと。

（安田満「清張さんとわたし」）

やはり食べ物への関心は強くはなかったようだ。ところが『神々の乱心』で清張は群馬の下仁田村や広島県三次市や満州の吉林の旅館で出る料理を詳述し、明治期の賜餐の献立まで登場させた。清張さんが並々ならぬ食通であることを知り、長年いっていた清張観の一つをばくは修正することになった」と森は認めている（基礎文献⑨）。清張がかつて食に淡泊だったことは、おそらく森が記したとおりだろう。むしろ元来は淡泊であるにもかかわらず、八十歳を過ぎて創作のため食のあれこれを調べて書いた清張の努力にこそ、森は感嘆したのではないか。「人生の最期の瞬間まで小説の執筆に努められた清張さんの生きざまを見事とおもう」と森に言わしめた内実のひとつが、この清張の努力なのだ。

「本当に瑞々しい作品は若いときには書けない」という「清張さんの遺言ともいってよいこの言葉」を前に、森は立ちすくんだ。そして「悔いのない作品」なら自分にも書けそうだと、思い直す。その後に森が過ごした晩年もまた、清張に劣らず壮絶であり、見事だった。

『倭人伝を読みなおす』の「あとがき」を書いてから三年四カ月後に森は八十五歳で他界する。亡くなる前年の二〇一二年、右足指の打撲傷から壊疽が進み、右膝下の切断手術を受ける不幸に見舞われた。手術前、足の痛みをこらえながら、森は予定通り講演やシンポジウムをこなす。四月二十八日、大阪でシンポジウム。翌二十九日、滋賀県近江八幡市で講演。五月十二日、和歌山県田辺市で南方熊楠賞の受賞記念講演。翌十三日、



同県御坊市の岩内古墳訪問。二十七日、奈良県立橿原考古学研究所訪問。六月十六日、愛知県春日井市の森文庫で講演。翌十七日、神奈川県横須賀市で講演。このころは自力で登壇するのも難しく、京都に戻って入院した病院で手術を受けることになる。

二〇一一年から森は雑誌『歴史読本』に「敗者の古代史」を連載しており（第一回は同年十一月号）、入院や手術を経て、一三年五月号で一度の休載もなく十九回の連載が完了した。単行本として刊行されたのは同年六月二十一日、森の他界まで五十日を切っていた。

一一年から翌年にかけて『西日本新聞』に連載した「忘れえぬ人」を単行本にまとめた『森浩一の考古交友録』は、一三年四月末に刊行された。「あとがき」に森は記す。

今般、朝日新聞出版のおかげで一冊の本にまとまったこの本は、僕にとっては片足の生まれ変わりのようなものである。

手術後の二〇一二年十月に第二十回「春日井シンポジウム」で講演し、十一月には御坊市でも講演とシンポジウムをこなした。いずれも車椅子を押されて登壇した。「考古学は地域に勇気をあたえる」は森が遺した名言のひとつだが、病魔との闘いですっかり痩せた森が車椅子に乗り、それでも目に光をたたえて講演するその姿は、来場者にどれほど勇気を与えただろうか。

こうした驚異的な活動ぶりは、もちろん森の精神力の強さに起因するところが大きい



第20回「春日井シンポジウム」で講演の後、車椅子を押されて演壇を下りる森（2012年10月7日、春日井市民会館）

い。約束は破らない信義の人でもあった。同時に、清張の「遺言」ともいつてよいこの言葉」に立ちすくみ、「悔いのない作品」と誓ったことも、森を支えるひとつの力になったのではないだろうか。清張は最期まで創作に打ち込み、関心の薄かった食べ物についてもさまざまな調べ、『神々の乱心』を絶筆として遺した。その晩年は、同年代に至った森にとって、ひとつの目標であり、励ましでもあったとおもう。それこそが清張からの最大の贈り物だったとおもえるのだ。

森と親交の深かった司馬遼太郎は一九九三年、文化勲章を受章した。前年に亡くなった清張は国家の栄典とは縁がなかった。森の近親者は振り返る。

「グリコのおまけみたいなもん、もらわんとこな」と司馬さんとは言い合っていたのですが。

盟友とおもっていた司馬がいつしか国民的作家に祭り上げられ、「グリコのおまけみたいな」勲章まで受けたことに、森は違和感を抱いたのだろうか。九六年、司馬の没後に発表した追悼文「前より迫ってきた死」にこんな一節がある。

十数年ほど前だったが、司馬さんと十二時近くまで爽快に飲んだ。最後にもう一軒寄ろうと近道をしてお寺の塀がつづく人気のない道にさしかかった。すると「森さん、誰もこないか見張って。前からここで小便をしたかったんや」。いや驚いた。この時の司馬さんはまるでガキ大将だった。

この夜は、僕と二人だった。それにしても、今おぼえている司馬さんの一番愉快そうな声のはずみは、お寺の塀に立小便をかけたあの時だった。（中略）どうしてこんなことを書くかというと、あまり司馬さんを聖人君子にまつりあげたくないからだ。

森は晩年、「新しい自分を見つけない——研究する」と自書した紙を仕事部屋に掲げた。陶芸家の河井寛次郎の「新しい自分が見たいのだ 仕事する」にならった言葉だ。河井が文化勲章を断ったことはよく知られている。だから森がこの言葉を選んだとまではいえないが、河井の生涯から何か感じるものを得たのだろう。

二〇一二年五月、森は足の痛みをこらえて和歌山県田辺市へ赴き、南方熊楠賞を受賞した。それまで受賞歴がほとんどなかったから、驚いた人も少なくなかった。熊楠という在野の研究者にちなんだ賞であること、小規模な自治体が運営していること、が賞を受ける理由だった。少なくとも国家の栄典とは生涯、無縁を貫いた。

## 届いた言葉

最後まで創作に打ち込んだ清張の生きざまは、晩年を迎えた森への大きな贈り物となった。それでは、清張が森との長い交友のなかで受け取った贈り物はなんだったのだろうか。

『三國志』魏書東夷倭人の条(いわゆる「魏志倭人伝」)に関する清張の新説のひとつに、「一大率」をめぐる議論がある。帯方郡から倭人へ届けられた船荷を臨検する監察官のような役職を、女王卑弥呼が置いたとする通説に対して、清張は帯方郡から派遣された役人と考えた。清張はまた、魏志倭人伝の写本で「支国(志岐)が「一大国」と誤記されていることから、「一大率」も本来は「一支率」だった、との見解を発表した。最晩年に至るまで清張は、「一支率」の誤記説が研究者に受け入れられない、と愚痴をこぼし続けた。作家の「アイディア」は歴史家によって認められて初めて価値を持つ、という『日本のなかの朝鮮文化』を励ます会での清張の祝辞が思い出される。

森は早い時期から、古代史に取り組む清張の姿勢を高く評価した。一九七三年十一月刊行の『文藝春秋臨時増刊 松本清張の世界』に上田正昭、金達寿を交えた座談会「清張『古代史』を考える」が載っている。森の発言を引こう。

高松塚古墳の壁画が発見されて、そのあとでいちばん積極的にいろんな人の意見を自分なりによく学び、総合して、そして自分の意見を發表した人ということになる、これは松本清張さんじゃなかったかという気がするんです。(中略)たとえばここに『古代史疑』という本がある。(中略)ぼくはこれはやっぱり学術論文でいいんやないかという気もするんです。松本清張という人が書いた堂々たる論文でよろしい。それほどしっかりと研究史も踏まえて、そして引用すべきことはたいていみなきちつと整理されてあるわけです。

一大率を帯方郡から派遣された官吏とみる清張説についても「あの学説にちよつと魅力を持った」と述べた。その見解は晩年まで変わらず、森が亡くなる三年前に刊行した『倭人伝を読みなおす』でも「松本清張氏は倭人伝全体の文の流れから、帯方郡の重要さにかんがみ、魏ないしは帯方郡が派遣したとする解釈をだした。従うべき意見であろう」と記したうえで、次のように振り返った。

ぼくはある時期から松本清張氏を歴史好きな作家とはみないで、古代史の学者としてみはじめた。みるだけでは意味はなく、光文社から話が あった『ゼミナール日本古代史』の編集委員に、古代史の上田正昭氏と直木孝次郎氏にくわえ松本さんにも加わってもらった。(中略)一大率の項目は二つにし、一つを「研究史の概観」として直木孝次郎氏に書いてもらい、松本氏には「私の見解」として二つを併載することができた。ぼくはこのときの編集方針はあれでよかったと思っている。

清張を学者と位置づけて、専門書の編集委員に迎えたうえに、一大率をめぐる独自の学説についても通説と併記する編集方針を採った。三十年あまりを経て森は「あれでよかった」とみずからの認識の正しさを確認した。

どんな新説も専門家から認められなければ意味がない、と固く信じていた清張にとって、大学で考古学を教える森から研究者と同等に扱われ、専門書で自説を開陳する機会を得たことは、喜びをもたらしたに違いない。口先で清張をはめる学者はほかにも少なからずいたが、専門書の編集をまかせたり、学説を引用したりというところまで踏み込む研究者はどれほどいただろう。森からすれば清張は、きわめて熱心かつ優秀な町人学者のひとりと映っていたのかもしれない。清張が亡くなるまで古代史と取り組み、創作の巨大な山脈に古代史の高峰を加え得たのも、清張自身の意欲と努力はもろろんのこと、ひとつには森から受けた研究者扱いが心の支えになってのことではないだろうか。

そうした視点で清張と森の交友を見渡すと、一九七八年に森が清張に対して発した諫言の重みが、あらためて思い起こされる。研究者が研究者に向けて、その研究態度に関して正面から苦言を呈したのだ。

清張は、他の文学者たちとの論争を生涯に何度もおこなった。取材チームを抱えて

資料を集めさせている、と多作ぶりを揶揄した平林たい子に対して即座に反論（六二年）したし、「日本の黒い霧」をめぐる大岡昇平の批判（六一年）、「象徴の設計」をめぐる林房雄の批判（六三年）、「火の虚舟」をめぐる山本健吉の批判（六七年）にもそれぞれ反論した。自作だけでなく、高木彬光の『邪馬台国の秘密』について感想を書いたとき（七四年）には、高木から反論を受けて再批評を発表している。雑誌に批判を書かれた場合、不当と感じたなら受けて立つのが清張だった。

「土器洗いまで経験されることを期待する」という森の諫言に対して、清張が反論した形跡はない。その後もシンポジウムへの出席や出版の仕事、テレビ出演などで森と協働しているのは前述のとおりだ。「清張日記」にも森がしばしば登場するし、八一年から八三年にかけて清張からの手紙八通が森の遺品に残る。これらは、清張が森の諫言を受け止めたことを物語っているのではないか。

晩年の清張と親交のあった考古学者の佐原眞が、興味深いことを書いている。

松本清張さんが意見をのべると、相手を威嚇する眼光と、反駁のための重厚な唇を前に、反対しにくい雰囲気となる。しかし、私は、反対意見をもっている時は必ず反対した。意外にも、これが松本さんに気に入られたらしい。

（佐原「はじめに―松本古代学の刺激」）

前章でみたとおり、清張は佐原の反論に従って自説を変えることはなかったようだ。けれども反論を頭から封じることがなく、逆に反論する佐原を気に入った。これは清張自身が批判に対する反論をいとわない人だったことを考え合わせれば、意外というより、むしろ筋の通った対応だといえる。

森の遺品には、清張からの手紙類が十二通含まれる。執筆中の新聞連載小説『火の回路』でクライマックスの舞台を横穴墓とするため、床面の強度などについて問い合わせた速達。徳島の丹田古墳の調査報告書をコピーでもよいから送ってほしい、と依頼する封書と、届いた報告書への礼状。田能遺跡（兵庫県尼崎市）の発掘担当者へ森の妻が連絡をとったことへの謝辞を記したはがき。これらは小説家が考古学者と交流するなかで仕事の上での利益を得たことを示すものでもある。東京へ来るのはいつか、と

繰り返し尋ねる文面は、森の意見を聞きたいという清張の情熱の表れに違いない。食事とともにしたあと清張がしたためた礼状や、森からの賀状に対する返礼は、二人のこまやかな交流を物語る。

七三年から八三年に至る清張からの手紙類は、それらに応じて森が送った返事や報告書などの存在をも明らかにする。それだけでなく、清張からの手紙を最期の日まで大切に保管し続けた森の思いも、うかがうことができる。それらの手紙類が示す日付の幅のほぼ真ん中で、森が発した清張への厳しい諫言があった。その諫言によって親交が揺らぐことはなかった事実を、手紙の全体が証言している。清張はやはり、森の言葉を受け止めたのだ。研究の態度をただすその真剣な諫言こそ、森からの貴重な贈り物だったのかもしれない。

「清張さんの年齢からすれば、ちょっと厳しすぎませんか」。発掘調査の土掘りや土器洗いを経験せよ、と六十八歳の小説家に求めた諫言について、生前の森にわたしは問うたことがある。とうにその年齢を超した考古学者は、ニヤッと笑っただけだった。文字面だけみれば確かに厳しい。けれども、その言葉が清張の心に届いたことを、だれよりも森がよく知っていたのではないだろうか。

ともに権威に立ち向かった日があり、深い信頼に結ばれたうえで厳しい苦言を呈した日もあった。遠くで輝きを放つ清張と森との交流の日々を、及ばずながらたどることができた幸せをかみしめながら、ここで筆を置く。



清張から届いた2通の賀状を、森は額装して保存していた



## 資料

### 研究の手法

### 基礎資料

1. 森が清張について書いた／語った文献
2. 清張が森について書いた文献
3. 同席したシンポジウムや座談会が活字化された文献
4. 清張と森が編者または筆者に名を連ねる文献
5. 森から清張宛または清張から森宛の現存書簡類

### 参考文献

### 交流年譜

## 研究の手法

はじめに、清張と森の交友を考えるうえで欠くことのできない文献等を「基礎資料」と位置付け、それらを検討することから研究に着手した。

基礎資料とは概略、次のようなものである。

1. 森が清張について書いた／語った文献
2. 清張が森について書いた文献
3. 同席したシンポジウムや座談会が活字化された文献
4. 清張と森が編者または筆者に名を連ねる文献
5. 森から清張宛または清張から森宛の現存書簡類

1、2、3、4は公刊された書籍や雑誌である。これらについては、古書等で販売されているものについてはできる限り購入し、入手が困難なものについては国立国会図書館関西館、京都府立図書館、京都市中央図書館などの蔵書をコピーするなどして利用した。

5のうち「森から清張宛」の書簡は、北九州市立松本清張記念館に1通が保管されており、同館を訪ねたおりにコピーを閲覧、写真撮影した。「清張から森宛」の書簡は森の遺品に12件13通が含まれており、ご遺族の了解を得て実物を閲覧、写真撮影した。いずれも今後の研究に役立つ可能性があるもので、活字に起こした通信文と消印日付、画像などを資料編に掲載しておく。このほか森による「調査の記録」もご遺族の了解を得て閲覧した。

次に、基礎資料には該当しないが、研究に必要とおもわれる書籍等を「参考文献」として検討した。清張と森それぞれの著作、清張や森に係のあった人物による記述、清張や森が考古学や古代史の研究や記述を進めるうえで利用したとおもわれる書物、清張についての研究書、同時代の状況を伝える資料などがこれにあたる。これらも可能な範囲で入手に努め、困難な場合は前記の図書館等の蔵書を利用した。

さらに、清張や森の生前を知る人たちに往時の思い出などを聞き取り調査した。特に時間を取ってご協力をいただいたのは次の皆さまであり、記して感謝の意を表したい。

森淑子様（森浩一氏のご遺族）

大塚初重様（考古学者）

高島忠平様（考古学者）

藤田富士夫様（考古学者）

黒田笑子様（料亭「松月」女将）

寺川真理子様（深井晋司氏、石黒孝次郎氏の元秘書）

今研究には、森浩一文庫および春日井市教育委員会文化財課、同志社大学歴史資料館、奈良県立橿原考古学研究所、富山市教育委員会埋蔵文化財センター、高志の国文学館、高麗美術館、東京大学五月祭常任委員会にもご協力をいただいた。また、北九州市立松本清張記念館の下澤聡様、小野芳美様をはじめとする館員の皆さまに多大なるご協力とご支援をいただいた。心より御礼申し上げます。

## 基礎資料

### 1. 森が清張について書いた／語った文献

- 基礎文献① a 森浩一へのインタビュー「清張古代史を語る」『松本清張研究 5』砂書房、一九九八年
- 基礎文献① b 森浩一「松本清張さんの古代史」『魂の考古学 時のすざゆく ままに』五月書房、二〇〇三年（基礎文献① a の再録）
- 基礎文献② 森浩一と門脇禎二の対談「清張古代史の現在を再検証する——邪馬台国論と『火の路』を中心に」『松本清張研究第六号』北九州市立松本清張記念館、二〇〇五年
- 基礎文献③ a 森浩一と江上波夫の対談「松本古代史は何を変えたか」『文藝春秋 一九九二年十月臨時増刊号』松本清張の世界
- 基礎文献③ b 森浩一と江上波夫の対談「松本古代史は何を変えたか」『松本清張の世界』文春文庫、二〇〇三年（基礎文献③ a の再録）
- 基礎文献④ a 森浩一「松本清張の考古学」『松本清張記念館館報第三十一号』北九州市立松本清張記念館、二〇〇九年
- 基礎文献④ b 森浩一「松本清張さんの考古学」『森浩一の考古学人生』大巧社、二〇一〇年（基礎文献④ a の再録）
- 基礎文献⑤ 森浩一「考古学と氷の凶器」『文藝春秋 オール読物』一九九二年九月号、文藝春秋
- 基礎文献⑥ a 森浩一「松本清張さん」連載「忘れえぬ人」2『西日本新聞』二〇一一年十月二十六日付朝刊
- 基礎文献⑥ b 森浩一「松本清張さん」『森浩一の考古交友録』朝日新聞出版、二〇一三年（基礎文献⑥ a の再録）

基礎文献⑦ a 森浩一「松本清張と考古学」『国文学 解釈と鑑賞』一九七八年六月号、至文堂

基礎文献⑦ b 森浩一「歴史小説と考古学」『竹べらとペン』光文社、一九八一年。参照本は同年第二刷（基礎文献⑦ a の再録）

基礎文献⑧ 森浩一、金達寿、上田正昭の座談会「清張『古代史』を考える」『文藝春秋 一九七三年十一月臨時増刊号』松本清張の世界

基礎文献⑨ 森浩一「神々の乱心」にみる考古学と食文化」『松本清張研究 第十一号』北九州市立松本清張記念館、二〇一〇年

基礎文献⑩ 森浩一「神武田に神武陵を造る」『天皇陵古墳への招待』筑摩選書、二〇一一年

基礎文献⑪ 森浩一「倭人伝を読みなおす」ちくま新書、二〇一〇年

基礎文献⑫ 森浩一「解説」松本清張『古代史疑』中公文庫、一九七四年

基礎文献⑬ 森浩一「解説『火の路』解説と付言」松本清張『火の路 下』文春文庫新装版、二〇〇九年

基礎文献⑭ 森浩一「『遊古疑考』松本清張著」（書評）『朝日新聞』一九七四年一月十四日付九面「えつらん室」欄

### 2. 清張が森について書いた文献

基礎文献① a 松本清張「遊古疑考」『藝術新潮』一九七一年一月号〜七二年十一月号、新潮社

基礎文献① b 松本清張『遊古疑考』新潮社、一九七三年。参照本は七四年四刷

基礎文献② 松本清張「清張日記」『清張日記』朝日文庫、一九八九年



### 3. 同席したシンポジウムや座談会、対談が活字化された文献

#### ▽シンポジウム

江上波夫、松本清張編『ヤポネシア古代学の魅力』読売新聞社、一九七六年

七四年八月四日?に東京で開かれたシンポジウム「ヤポネシア古代学の未来」

森浩一、谷川健一、大林太良、井上秀雄、上田正昭、松本清張、國分直一、中西進、

山田秀三、李進熙、司会は鈴木武樹

松本清張ほか『論争邪馬台国』平凡社、一九八〇年

七七年一月十五、十六日に福岡で開かれた「邪馬台国シンポジウム」

江上波夫、井上光貞、直木孝次郎、森浩一、岡崎敬、大林太良、司会は松本清張

松本清張ほか『国家成立の謎』平凡社、一九八〇年

七九年一月二十、二十一日に東京で開かれた「古代史シンポジウム国家成立の謎」

井上光貞、大塚初重、杉山二郎、直木孝次郎、西嶋定生、森浩一、司会は松本

清張

松本清張編『正倉院への道』日本放送出版協会、一九八一年

八一年八月二十四日に東京で、同年九月七日に京都で開かれた「正倉院シンポ

ジウム」

小川英雄、鎌田茂雄、松本清張、護雅夫、森浩一(以上東京)、岡崎敬、田辺昭三、

西川幸治、松本清張、吉田光邦(以上京都) いずれも司会は杉山二郎

森浩一編『シンポジウム古代日本文化』小学館、一九八三年

八一年十一月十四、十五日に富山で開かれた「日本海文化を考えるシンポジウム」

松本清張、黒石重吾、高瀬重雄、大林太良、門脇禎二、森浩一

朝日新聞社編『国際シンポジウム古代日本の国際化』朝日新聞社、一九九〇年

八九年四月十九日―二十一日に福岡で開かれた国際シンポジウム「古代日本の

#### 国際化」

江上波夫、大塚初重、門脇禎二、金元龍、佐原眞、西谷正、ジナ・リー・バーンズ、

平野邦雄、松本清張、森浩一、山尾幸久、王仲殊

#### ▽座談会

松本清張、水野祐、森浩一による研究座談会「卑弥呼が死んでから…」

『週刊読売』一九七五年十月四日号

松本清張、水野祐、森浩一による研究座談会「大和朝廷成立はいつなのか」

『週刊読売』一九七五年十月十一日号

松本清張、森浩一、青木和夫、中西進による座談会「古代を検証する」

『國文學』八三年九月号、學燈社。松本清張『小説と古史への旅』

(日本放送出版協会、八三年)に再録

#### ▽対談

松本清張、森浩一「ナゾの原日本人と大和民族形成の秘密」

『週刊読売』一九七七年十月二十二日号

### 4. 清張と森が編者または筆者に名を連ねる文献

上田正昭、直木孝次郎、森浩一、松本清張編

『ゼミナール日本古代史 上 邪馬臺国を中心に』光文社、一九七九年

上田正昭、直木孝次郎、森浩一、松本清張編

『ゼミナール日本古代史 下 倭の五王を中心に』光文社、一九八〇年

松本清張編『邪馬台国99の謎』産報、一九七五年

松本清張編『邪馬臺国の常識』毎日新聞社、一九七四年

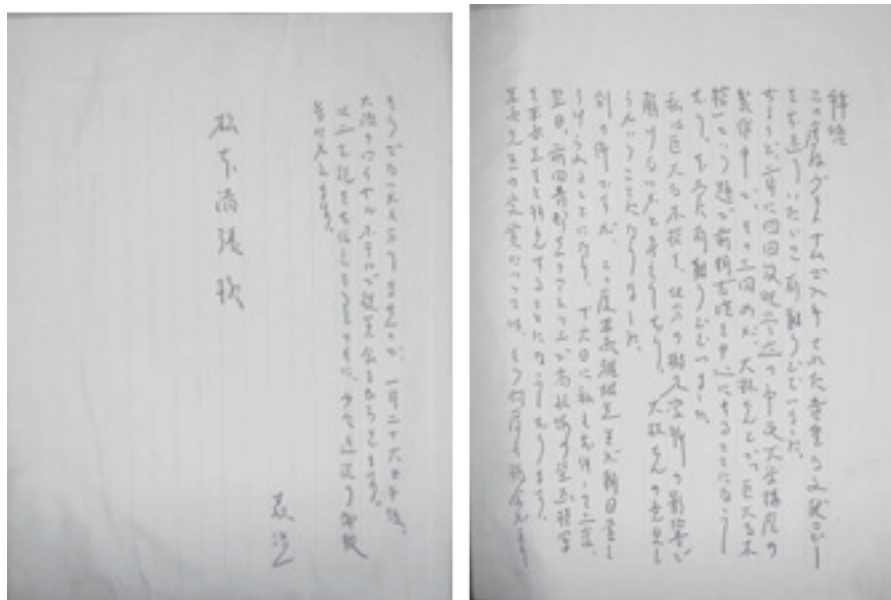
江上波夫、松本清張編『日本古代学の始まり』読売新聞社、一九七五年

5. 森から清張宛または清張から森宛の書簡類

基礎資料① 森から清張宛

封書 消印等不詳

本文 便箋2枚



拝啓

この度はヴェトナムで入手された貴重な文献コピーをお送りいただき有難うございました。

ちようど、二月に四回放映予定の市民大学講座の製作中で、その三回めが、大林さんとで「巨大な木棺」という題で前期古墳を中心にする事になっており、本当に有難うございました。

私は巨大な木棺を、北方の樹木崇拜の影響で解けないかと考えており、大林さんの意見をうかがうことになりました。

別の件ですが、この度末永雅雄先生が朝日賞をうけられることになり、十六日に私もお伴して上京、翌日、前田青邨さんのアトリエで高松塚の壁画模写を末永先生と拝見することになっております。

末永先生の受賞については、もう何度も機会があり

そうでないかも分りませんので、一月二十六日午後、大阪のロイヤルホテルで祝賀会をひらきます。

以上お礼をお伝えするとともに、少々近況のご報告にかえます。

森浩一

松本清張様

基礎資料① 清張から森宛

封書 速達 昭和48（1973）年8月26日 杉並南 12—18消印

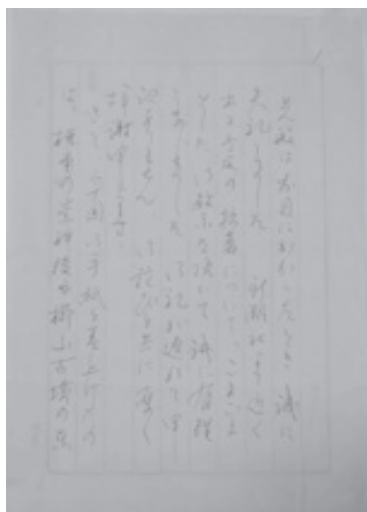
昭和48（1973）年8月27日 東山 0—8消印

封筒 白 一重 セロハンテープで封 上部破り開封

表 70円切手（小面）、20円切手（松）

本文 便箋7枚

便箋 朱色の枠、罫線入り 枠外左下に 鳩居

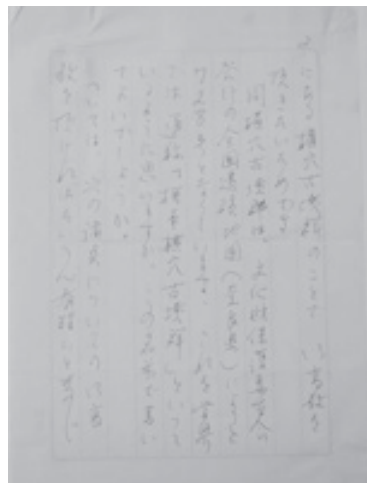


1

先般はお目にかかったとき誠に失礼しました 新潮社より近く出る予定の拙著について、こまごまとした御教示を頂いて誠に有難う存じました 御礼が遅れて申し訳ありません、御詫びと共に厚く拝謝申上ます。

さて、今回御手紙を差上げたのは、柳本の崇神陵や櫛山古墳の東

2

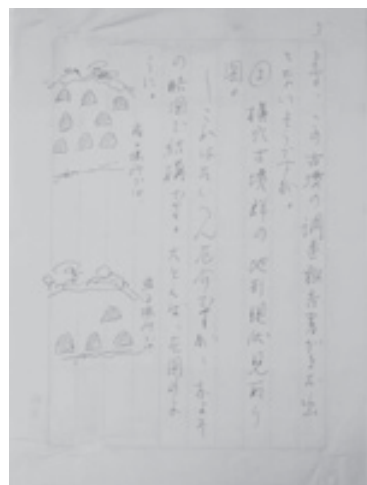


にある横穴古墳群のことで 御高教を頂きたいためです。

同横穴古墳群は、文化財保護委員会発行の全国遺蹟地図（奈良県）によると728号となっています。これを学界では通称「柳本横穴古墳群」といっているように思いますが、この名前で書いてよいでしょうか。

ついでには、次の諸点についての御高教を頂ければたいへん有難いと存じ

3



ます。この古墳の調査報告書がまだ出てないようですが。

①横穴古墳群の地形現状見取図。

—これはたいへん厄介ですが、およその略図で結構です。たとえば、左図のよう

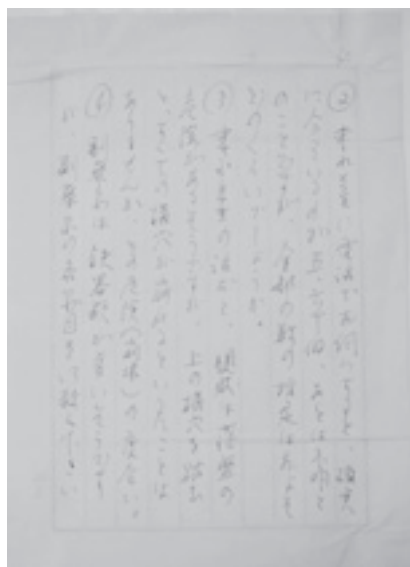
に。

或る場所では 或る場所では

（図）

（図）

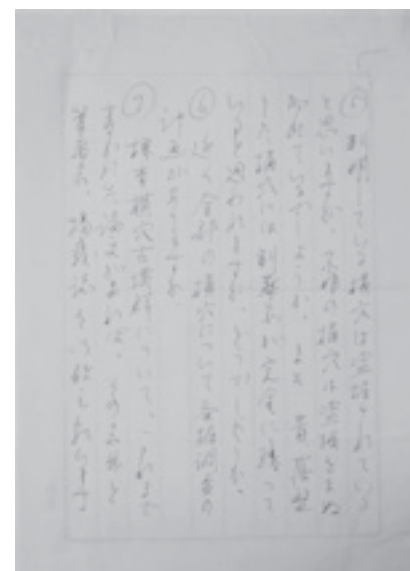




4

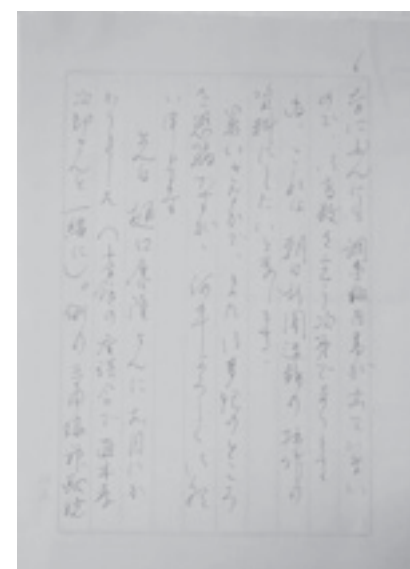
②末永先生に電話でお伺いすると、確実に分っているのが五、六十個、あとは不明とのことですが、全部の数の推定はおおよそのくらいでしょうか。

③末永先生の話だと、現状は落盤の危険があるそうですが、上の横穴を踏むと、すぐ下の横穴が崩れるといったことはありませんか、その危険（崩壊）の度合い。  
④副葬品は鉄器類が多いそうですが、副葬品の各品目を御教え下さい。



5

⑤判明している横穴は盗掘されていると思いますが、不明の横穴は盗掘をまぬがれているでしょうか。また、昔、落盤した横穴には副葬品が完全に残っていると思われませんが、どうでしょうか。  
⑥近く全部の横穴について発掘調査の計画がありますか。  
⑦柳本横穴古墳群について、これまで書かれた論文があれば、その名前と筆者名、掲載誌を御教え願います。



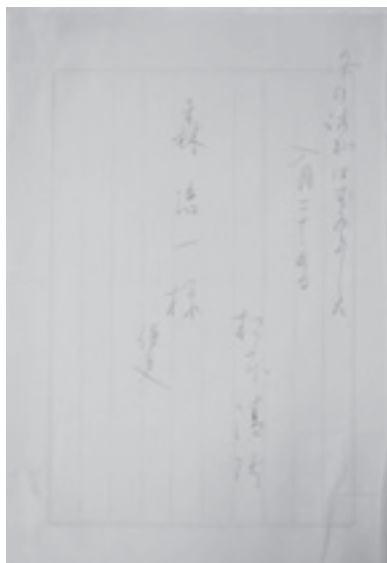
6

なにもぶんに調査報告書が出ていないので、御高教を乞う次第であります尚、これは朝日新聞連載の拙作の資料にしたいと存じます。

暑いさなかで、また御多忙のところ全く恐縮ですが、何卒よろしく御願ひ申上ます

先日 樋口隆康さんにお目にかかりました（小学館の座談会で直木孝次郎さんと一緒に）。例の三角縁神獣鏡

基礎資料①のつづき



7

の話がはずみました。

八月二十五日

松本清張

森浩一様

侍史

基礎資料② 清張から森宛

封書 1973（昭和48）年9月3日 杉並南

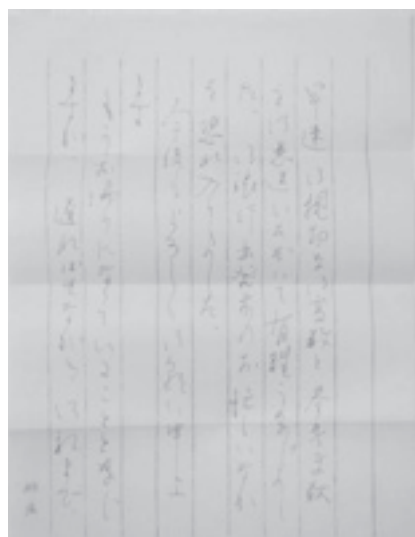
12—18消印

封筒 白 一重 上部破り開封

表 20円切手（松）

本文 便箋2枚

便箋 灰色の罫線入り 左下に 鳩居



早速御親切な御高教と参考文献

を御恵送いだいて有難う存じまし

た。御旅行出発前のお忙しいなか

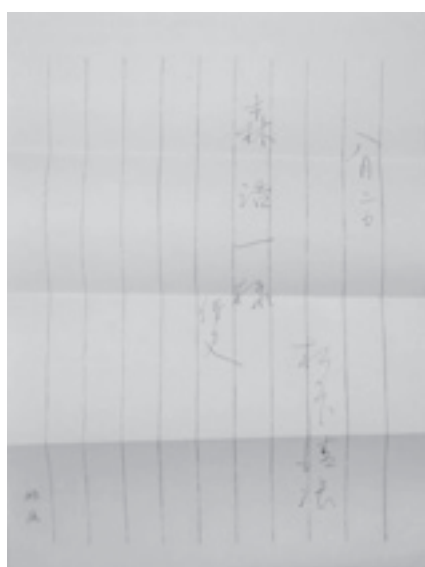
を恐れ入りました。

今後よろしくお願い申上

ます

もうお帰りになっていることと存じ

ますが、遅ればせながら御礼まで。



八月二日

松本清張

森浩一様

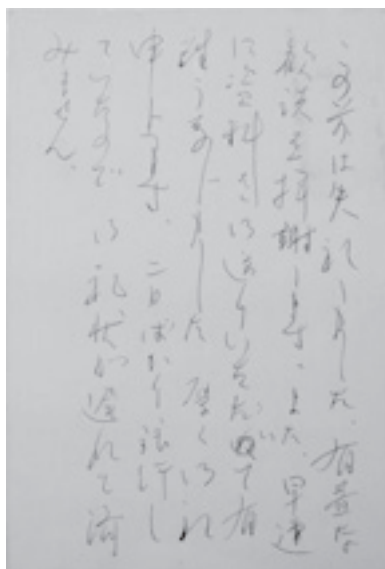
侍史

基礎資料③ 清張から森宛

官製はがき 1974 (昭和49) 年1月25日

東京中央 18—24消印

表 10円 (縄文式土器)



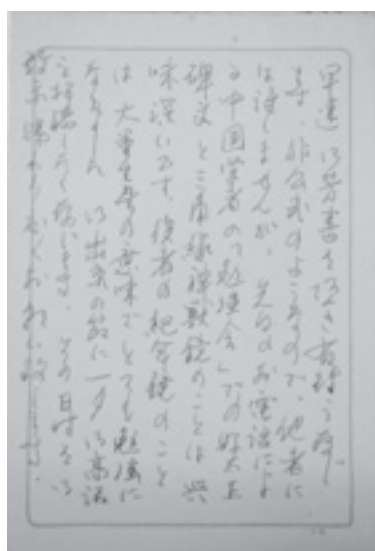
この前は失礼しました。有益な  
歓談を拝謝します。また、早速  
に資料を御送りいただき有  
難う存じました。厚く御礼  
申上ます。二日ばかり旅行し  
ていたで御礼状が遅れて済  
みません

基礎資料④ 清張から森宛

私製はがき 1981 (昭和56) 年1月28日 杉並南 12—18消印

表 20円切手 (松)、10円切手 (鹿)

裏 橙色の枠 枠外右下にTS



早速御芳書を頂き有難う存じ  
ます。非公式のようなので、他者に  
は渡ませんが、先日のお電話によ  
る中国学者の「勉強会」での好太王  
碑文と三角縁神獣鏡のことは興  
味深いです。後者の紀年鏡のこと  
は大量生産の意味でとても勉強に  
なりました。御出京の節に一夕ご高論  
を拝聴したく存じます。その日時を御  
教示賜わり度くお願い致します。



基礎資料⑤ 清張から森宛

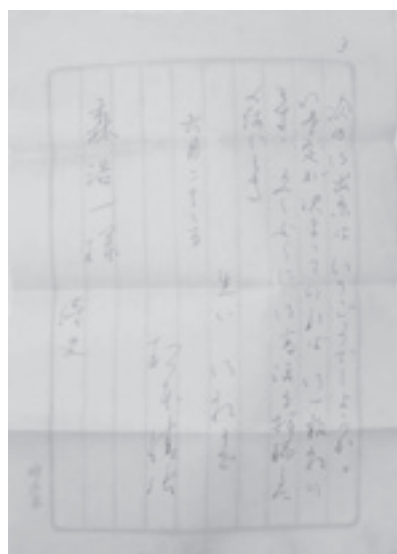
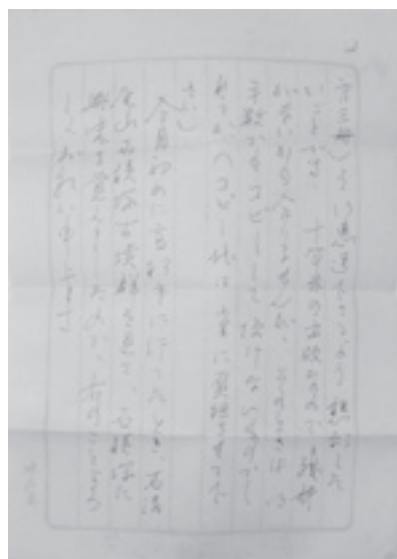
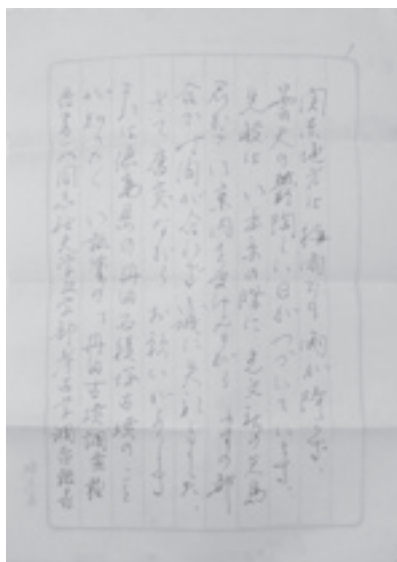
封書 1981（昭和56）年6月23日 杉並南 12—18 消印

封筒 白 一重 表に橙色の枠と罫線 裏の左下に「鳩居堂」 上部ハサミで切り開封

表 60円切手（梵鐘）

本文 便箋4枚（4枚目は文字なし）

便箋 橙色の枠、罫線入り 枠外左下に鳩居堂



2

第三冊）を御恵送下さるよう懇願したいことです。十年前の出版なので残部がないかも分りませんが、そのときはお手数でもコピーして頂けないものでしょうか。（コピー代は小生に負担させて下さい）

今月初めに高松市に行ったとき、石清尾山石積塚古墳群を見て、石積塚に興味を覚えたので、右のことよろしくお願い申上ます

3

次の御出京はいつごろでしょうか。御予定が決まっていれば御一報願います。久しぶりにご高論を拝聴したく存じます

先は御願まで

六月二十三日

松本清張

森浩一様

侍史

関東地方は梅雨でも雨が降らず、曇天の鬱陶しい日がつづいています、先般は御出京の際に光文社の矢島君から御案内を受けながら小生の都合で時間が合わず誠に失礼しました。さて唐突ながらお願いがありますそれは徳島県の丹田石積塚古墳のことが知りたく御執筆の「丹田古墳調査報告書」（同志社大学文学部考古学調査報告

基礎資料⑥ 清張から森宛

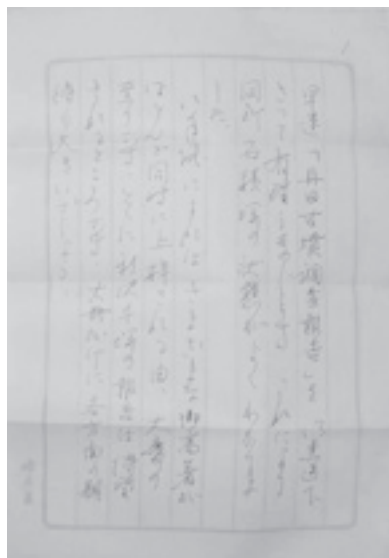
封書 1981（昭和56）年6月29日 杉並南 12―18 消印

封筒 白 一重 表に黄橙色の枠と罫線 上部破り開封

表 60円切手（梵鐘）

本文 便箋3枚

便箋 朱色の枠、罫線入り 枠外左下に 鳩居



1

早速「丹田古墳調査報告」を御恵送下

さって有難う存じます これにより

同所石積塚の状態がよくわかりま

した。

御手紙によればさまざまな御高著が

ほとんど同時に上梓される由、大慶の

至りです。とくに新沢千塚の報告は待望

されるところです。大冊だけに各方面の期

待も大きいでしょう。

2

七月十九日は滞在の御予定の由。小生は

夕刻から折悪しく先約がありますが、

昼、どこかで食事しながら御高話を

拝聴したいと思いますが如何でしょう

か。日曜日なので、ホテルしか場所が

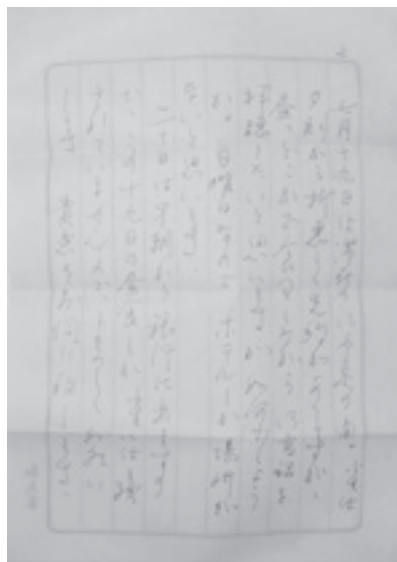
ないと思います。

二十日は早朝から旅行に出ますの

で、この十九日の昼食しか小生には残

されていませんので、よろしく願ひ

します 貴意をお伺い致します。



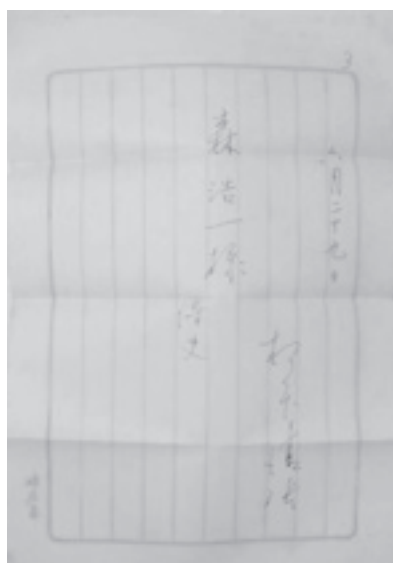
3

六月二十九日

松本清張

森浩一様

侍史



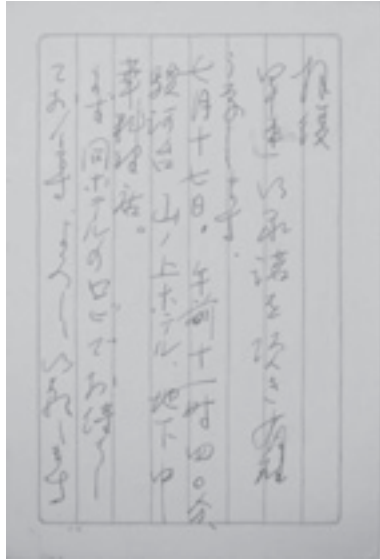
基礎資料⑦ 清張から森宛

私製はがき 1981 (昭和56) 年7月4日

杉並南 12—18 消印

表 40円切手 (菜の花に蝶)

裏 橙色で枠と罫線 枠外左下にTS



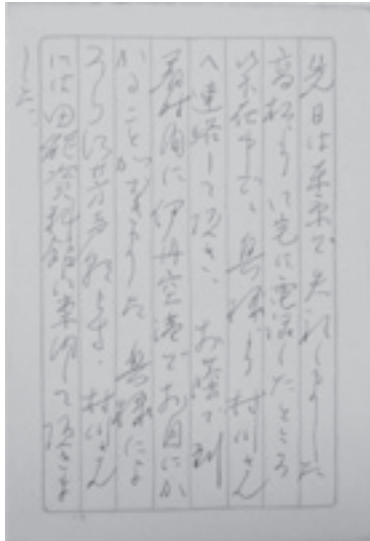
基礎資料⑧ 清張から森宛

私製はがき 1981 (昭和56) 年7月26日

杉並南 消印 (時刻不詳)

表 40円切手 (菜の花に蝶)

裏 橙色の枠と罫線 枠外左下にTS



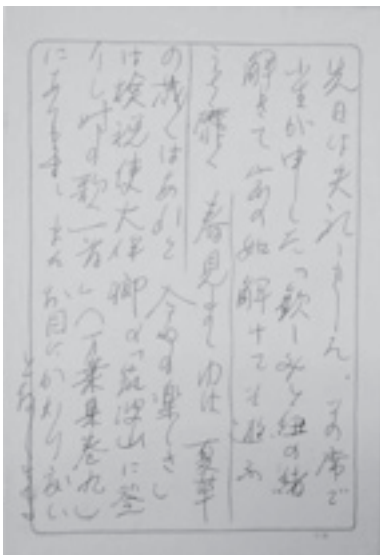
基礎資料⑨ 清張から森宛

私製はがき 1983 (昭和58) 年4月13日

杉並南 12—18 消印

表 40円切手 (犬 82年年賀)

裏 朱色枠 枠外右下にTS



拝復

早速御承諾を頂き有難

う存じます。

七月十七日、午前十一時四〇分、

駿河台 山ノ上ホテル、地下中

華料理店。

まず同ホテルのロビでお待ちし

ております。よろしく御願します

(注)「十七日」は「十九日」の誤記。

先日は東京で失礼しました

高松より御宅に電話したところ

御不在中で、奥様より村川さん

へ連絡して頂き、お蔭で到

着時間に伊丹空港でお目にか

かることができました。奥様によ

ろしく御芳声願します。村川さん

には田能資料館に案内して頂きま

した。

先日は失礼しました。その席で

小生が申した「飲みと紐の緒

解きて家の如解けてそ遊ぶ

うち靡く 春見ましゆは 夏草

の茂くはあれと 今日の楽しさ」

は検税使大伴卿の「筑波山に登

りし時の歌一首」(万葉集巻九)

にあります。またお目にかかり度い

と存じます

(注) 検税使大伴の卿の筑波山に登りたまへる時の歌一首、また短歌(巻九・1753)



基礎資料⑩ 清張から森宛

年賀はがき2枚 額装

右 鶏の彩色画 右下に落款「清張」

左 達磨の彩色画 右下に落款「清張」



賀正

御年賀状有難う存じ

ました

松本清張

迎春

御賀状を

有難う

存じました

昭和五十七年

元旦

(注) 台紙貼り付けのため消印や宛名書きは確認できず。

右は昭和56年(酉年)か。

基礎資料⑪ 清張から森宛

反古紙で作った書留封筒の一部か

表 中央上に「書留」の紙を剥がした残り

中央下に 168カ841 の印字

昭和49(1974)年1月7日

東京杉並浜田山の消印 時刻不詳

150円切手(平等院鳳凰)、200円切手(音声菩薩)

裏 ペーージュ色

ginza-blume gb のロゴ文字とヨーロッパ地図 包装紙か



(注) 「銀座ブルーム」という名称の家具・日用雑貨取扱店が

東京都港区南青山に現存する。

## 参考文献

同一の文献を別の項で重複して参照した場合は二度目以降を割愛した

## 第一章 出会い

### ◇三日月の夜

石黒孝次郎著、新井通子編『古く美しきものを求めて』

あるオリエント古美術商の生涯』里分出版、二〇一六年

文藝春秋編『新・東京いい店うまい店』

文藝春秋、一九六七年初版、七七年改訂新版第一刷

山本益博、見田盛夫『グルマン 1985』新潮社、一九八四年

半藤一利『清張さんと司馬さん』文春文庫、二〇〇五年

伊藤清司編『シンポジウム日本の神話5 日本神話の原形』學生社、一九七五年

森浩一『食の体験文化史3』中央公論社、一九九九年

森浩一著作集編集委員会編『森浩一著作集5 天皇陵への疑惑』

新泉社、二〇〇六年

森浩一『わが青春の考古学』新潮文庫、二〇〇二年

東京大学五月祭常任委員会所蔵『五月祭 1972/6—23・24・25』

森浩一『森浩一、食った記録』編集グループ〈SURE〉、二〇〇五年

森浩一『小さな楽しかったこと』『竹べらとペン』光文社、一九八一年

初出は「現代のことば」『京都新聞』八〇年十二月十五日付夕刊

石黒忠恵『懐旧九十年』岩波文庫、一九八三年。参照本は八四年第二刷

松本清張『瑠璃碗記』『私のものの見方考え方』大和出版、一九七八年

参照本は七九年三二刷（初出は『太陽』一九六六年七月号）

正倉院事務所『正倉院のガラス』日本経済新聞社、一九六五年

深井晋司、高橋敏『ペルシアのガラス』淡交社、一九七三年

深井晋司『近東の旅―古蹟をたずねて―』岩波写真文庫、一九五五年

宮廻正明監修『雲母 平山郁夫とシルクロードのガラス展』

富山市ガラス美術館・平山郁夫シルクロード美術館、二〇一七年

江上波夫「石黒孝次郎夫妻―『古く美しきもの』、石黒夫妻コレクション』

序文』『江上波夫著作集12 歴史・人間・旅』平凡社、一九八六年

### ◇突然の電話

伊達宗泰「ぷろふいーる 鋭敏な感覚と強靱な実行力」『歴史と人物』

一九八二年五月号、中央公論社

森浩一編『シンポジウム古墳時代の考古学』學生社、一九七〇年

森浩一「銅鏡・銅剣 神獸鏡をめぐるなど」

『日本と世界の歴史第1巻 古代』学習研究社、一九六九年

奈良県史跡名勝天然記念物調査報告『天神山古墳』（復刻版）

大和文化財保存会、一九八九年

森浩一「日本の古代文化―古墳文化の成立と発展の諸問題―」

石母田正ら編『古代史講座3 古代文明の形成』學生社、一九六二年

松本清張『平生の記』新潮文庫、一九七五年。参照本は二〇〇六年三十四刷

松本清張『陸行水行』『陸行水行』文春文庫、一九七五年

濱田耕作『京都帝國大學文學部考古學研究報告 第九冊』

豊後磨崖石佛の研究』（復刻版）臨川書店、一九七六年

藤井康栄『松本清張の残像』文春新書、二〇〇二年。

参照本は二〇〇四年第四刷

田中英夫「多趣味でロマンチック、魅力的な兄貴だった」

深萱ほか編『森浩一の古代史・考古学』中経出版、二〇一四年

K・M生「ローランサンの横顔」『早蕨 2・3合併号』

大阪府南河内郡大草村大美野第四区青年会、一九四八年

大塚初重「清張先生のウラ・オモテ」

『松本清張記念館館報』第四十三号、二〇一三年

## 第二章 定説に挑む

### ◇鏡の製作地

森浩一編『日本古代文化の探究 鏡』社会思想社、一九七八年。

福永伸哉「魏晋の銅鏡生産と三角縁神獣鏡」

参照本は八七年初版第二刷

金関恕監修『古代の鏡と東アジア』学生社、二〇一一年

中村潤子「三角縁神獣鏡の国産説」

深萱ほか編『森浩一の古代史・考古学』中経出版、二〇一四年

小林行雄『古鏡』学生社、一九六五年

末永雅雄、島田暁、森浩一『日本考古学報告第五冊 和泉黄金塚古墳』

綜藝舎、一九五四年

森浩一、金関恕、佐原眞「考古学からみた邪馬台国」

東京新聞吉野ヶ里取材班編『邪馬台国と吉野ヶ里』学生社、一九九七年

### ◇町人と官僚

森浩一『古墳の発掘』中公新書、一九六五年

松本清張『火の路（上）』文春文庫、一九七八年

森浩一「日本考古学入門」『日本古代学の始まり』読売新聞社、一九七五年

森浩一編『考古学の先覚者たち』中公文庫、一九八八年

森浩一「考古学は地域に勇気を与える」『森浩一の考古学人生』

大巧社、二〇一〇年（初出は『公研』四七三号、二〇〇三年）

森浩一「国が学者を雇うということ」『森浩一の考古学人生』

大巧社、二〇一〇年（初出は『公研』五四八号、二〇〇九年）

松本清張「創作ヒント・ノート」『作家の手帖』

文藝春秋、一九八一年（初出は『小説新潮』一九八〇年二月三月号）

拙稿「歴史家が見た戦中と戦後」

『京都新聞』二〇〇五年八月十五—十九日朝刊（五回連載）

森浩一「先祖は熊襲」『僕が歩いた古代史への道』角川ソフィア文庫、二〇〇〇年

（初出は『京都新聞』一九八八年四月十九日付夕刊「現代のことば」欄）

江上波夫「あなたはお書きなさい」『古代文化を考える 第三〇号 江上波夫

先生米寿記念論集』東アジアの古代文化を考える会同人誌分科会、一九九四年

## 第三章 ブームの牽引

### ◇意欲と馬力

森浩一「考古学の基本が問い直されている」『魂の考古学』五月書房、二〇〇三年

（初出は『古代史発掘総まくり』『アサヒグラフ』一九八七年十二月二十五日号）

森信勝編『松本清張索引辞典』日本図書刊行会、二〇一五年

加納重文『松本清張作品研究』和泉書院、二〇〇八年

富山市日本海文化研究所『日文研ニュース』

第六十九号、二〇〇四年十一月二日付

松本清張対談『古代史の謎』青木書店、一九七四年

松本清張対談『続古代史の謎』青木書店、一九七六年

松本清張『謎の源流 古代史新考問答』角川書店、一九八一年

森浩一『古墳の旅 中国と日本』芸艸堂、一九七九年



#### ◇二つの磁場

鈴木武樹「編集後記」『東アジアの古代文化 1974春―創刊号』大和書房  
備仲臣道『蘇る朝鮮文化 高麗美術館と鄭詔文の人生』明石書店、一九九三年  
森浩一「田村節子さん」『森浩一の考古交友録』朝日新聞出版、二〇一三年  
鈴木武樹「未来史としての古代史」『わたしの古代教室』

新人物往来社、一九七四年

鈴木武樹「あとがき」『東アジアの古代文化を考える会編』『日本文化の源流』

新人物往来社、一九七四年

原田三朗「『解説』武樹・古代史・東アジアの古代文化を考える会」

鈴木武樹『古代史の魅惑と危険』亜紀書房、一九七七年

久野収「新しいバロックの時代」『現代の眼』一九七三年六月号、現代評論社  
水戸岩雄「『東アジアの古代文化を考える会』―その生誕―

『東アジアの古代文化 1974春―創刊号』大和書房

鈴木武樹「教科書と真実の古代史―家永三郎氏との対談」

『古代史の魅惑と危険』亜紀書房、一九七七年

森浩一「高松塚古墳発見のあとにくるもの」末永雅雄編『飛鳥高松塚古墳』

学生社、一九七二年（初出は『週刊読売』七二年五月五日号）

森浩一「松下煌さん」『森浩一の考古交友録』朝日新聞出版、二〇一三年

司馬遼太郎、上田正昭、金達寿編『座談会 日本の朝鮮文化』

中央公論社、一九七二年

朝鮮文化社『日本のなかの朝鮮文化』第一号―第五十号、一九六九―八一年

参照本は高麗美術館所蔵の合本六冊

森浩一「鄭詔文さん」『森浩一の考古交友録』朝日新聞出版、二〇一三年

#### 第四章 すれ違い

##### ◇厳しい諫言

南陽子『高島忠平聞書 地を這いて光を掘る』西日本新聞社、二〇〇八年

井上光貞『日本の歴史1神話から歴史へ』中央公論社、一九六五年

井上光貞ほか「シンポジウム『古代史疑』を考証する」

『中央公論』六七年一月号

松本清張編『古代出雲王権は存在したか―弥生銅剣二百五十八本の謎に迫る』

山陰中央新報社、一九八五年

松本清張編『銅剣・銅鐸・銅矛と出雲王国の時代』

日本放送出版協会、一九八六年

松本清張編『古代出雲・荒神谷の謎に挑む』角川書店、一九八七年

森浩一「黒石重吾さん」『森浩一の考古交友録』朝日新聞出版、二〇一三年

『森浩一編集の古代学研究100号の発刊を祝う会』（出席者名簿）一九八三年

##### ◇広がる交友

森浩一「司馬遼太郎さん」『森浩一の考古交友録』朝日新聞出版、二〇一三年

森浩一「須田剋太さんと司馬さん」『魂の考古学』五月書房、二〇〇三年。

初出は『街道をゆく』展図録』朝日新聞社、一九九七年

森浩一「個儻不羈の人」朝日新聞社編『司馬遼太郎の遺産「街道をゆく」』

朝日文芸文庫、一九九六年

拙稿「食へのこだわり」『森浩一の古代史・考古学』中経出版、二〇一四年

森浩一「前より迫ってきた死」『僕が歩いた古代史への道』角川ソフィア文庫、

二〇〇〇年。初出は『文藝春秋』一九九六年五月臨時増刊号

司馬遼太郎『街道をゆく25 中国・閩のみち』朝日文庫、一九八九年。

参照本は二〇〇六年第十五刷

森浩一「空からの一日」『竹べらとペン』光文社、一九八一年。

初出は黒岩重吾長編小説全集月報、七七年

森浩一「山本有三さん」『森浩一の考古交友録』朝日新聞出版、二〇一三年

森浩一「やよい人と山本有三先生」『竹べらとペン』光文社、一九八一年

佐原真「解説」『松本清張全集65 清張日記・エッセイより』

文藝春秋、一九九六年

福岡隆「人間・松本清張」大光社、一九六八年。参照本は六九年八版

祖田浩一「不機嫌な作家たち」青蛙房、二〇〇四年

松本清張、門脇禎二、佐原真「大化の改新は本当にあったのか」

松本ほか『日本史七つの謎』講談社、一九九二年。参照本は講談社文庫、

二〇〇九年第十八刷。初出は『現代』九二年一月号

佐原真「はじめに―松本古代学の刺激」松本清張

『清張古代游記 吉野ヶ里と邪馬台国』日本放送出版協会、一九九三年

松本清張編『銅鐸と女王国の時代』日本放送出版協会、一九八三年

瀬戸内晴美「やさしい人」『松本清張全集19巻月報』文藝春秋、一九七一年

松本清張記念館特別企画展図録『松本清張「火の路」誕生秘話古代史家

との往復書簡を中心に』北九州市立松本清張記念館、二〇〇四年

重金敦之『作家の食と酒と』左右社、二〇一〇年。参照本は一年第二刷

松本清張「学歴の克服」「実感的的人生論」「私のものの見方考え方』

大和出版、一九七八年。参照本は七九年三二刷

瀬戸内寂聴「松本清張」『奇縁まんだら』日本経済新聞出版社、二〇〇八年

近藤日出造「やアこんにちは」407回「愛欲描写はニガ手 作家松本清張氏」

『週刊読売』一九六二年六月三日号

安野光雅、半藤一利、姜在彦「鼎談 俺も生きたや、司馬遼のように」

朝日新聞社編『司馬遼太郎の遺産「街道をゆく」』朝日文芸文庫、一九九六年

初出は週刊朝日別冊『司馬遼太郎の遺産・街道をゆく』九六年

## 第五章 贈り物

### ◇山陵の史料

『第四回森浩一文庫展示 天皇陵古墳と松本清張』

春日井市教育委員会文化財課、二〇一二年

日本史籍協会編『川路聖謨文書八』（復刻版）東京大学出版会、一九八五年

安田満「清張さんとわたし」『松本清張記念館館報』第十三号、二〇〇三年

森浩一『敗者の古代史』中経出版、二〇一三年

森浩一「あとがき」『森浩一の考古交友録』朝日新聞出版、二〇一三年

### ◇届いた言葉

森浩一「伊都国の津と大率」『倭人伝を読みなおす』ちくま新書、二〇一〇年

松本清張(1909～1992)・森浩一(1928～2013)交友年譜 その1

◎＝清張から森宛て手紙による ○＝森の「調査の記録」による

1954(昭和29)年12月 清張、考古学者の森本六爾をモデルにした小説「風雪断碑」を『別冊文藝春秋』43号に発表。森が感銘を受ける

1962(昭和37)年04月30日 森が「日本の古代文化」の章を執筆した『古代史講座3 古代文明の形成』(學生社)刊行。三角縁神獸鏡の国産説。井上光貞ら編

1965(昭和40)年02月04日 森が考古学分野を助言した井上光貞著『日本の歴史1 神話から歴史へ』(中央公論社)刊行

09月 森、同志社大学文学部に専任講師として赴任。それまでは大阪府立泉大津高校教諭、関西大学非常勤講師

1966(昭和41)年06月 清張、「古代史疑」を『中央公論』で連載開始。67(昭和42)年3月に終了。68(昭和43)年3月『古代史疑』(中央公論社)刊行

1967(昭和42)年01月 シンポジウム「松本清張『古代史疑』を考証する」が『中央公論』1月号に掲載。井上が司会、清張、牧健二、上田正昭、佐原真

04月 森、同志社大学文学部助教授に昇任

1969(昭和44)年03月25日 鄭詔文らが季刊誌『日本のなかの朝鮮文化』発刊。創刊号の座談会は司馬遼太郎と上田、金達寿、村井康彦、李進熙

10月01日 森が「銅鏡・銅剣―神獸鏡をめぐるなぞ」の章を執筆した『日本と世界の歴史1 日本・先史―5世紀』(学習研究社)刊行

1970(昭和45)年06月05日 森が司会・編集した『シンポジウム 古墳時代の考古学』(學生社)刊行。甘粕健、大塚初重、小田富士夫、間壁忠彦、三上次男

1971(昭和46)年01月 清張、「古代への探求」を『文藝春秋』で連載開始。72(昭和47)年11月に終了。74(昭和49)年9月『古代探求』(文藝春秋)刊行

01月 清張、「遊史疑考」を『藝術新潮』で連載開始。72(昭和47)年11月に終了。73(昭和48)年9月『遊古疑考』(新潮社)刊行

03月20日 ○森が伊達宗泰と沖縄へ。台北、香港、バンコク、シンガポール、ジャカルタなど回り4月13日帰国。森「調査の記録2」記事

05月 清張の「遊史疑考」第5回「神奈備山の起源」を『藝術新潮』5月号に掲載。単行本『遊古疑考』未収録

06月 清張が『藝術新潮』6月号の「遊史疑考」休載。「筆者の都合により、本号に限り」

08月 清張が「遊史疑考」第7回「三角縁神獸鏡への懷疑(中)」で森説を15項目にわたり紹介。『藝術新潮』8月号

1972(昭和47)年03月29日 ○森、高松塚古墳をめぐる産経新聞の対談で司馬と初対面。森「調査の記録2」記事

04月 森、同志社大学文学部教授に昇任

06月25日 清張と森、東京大学の五月祭で「古代史の謎を探る―高松塚古墳をめぐる」の対談。法文31番教室。終了後に飲みに行く

11月13日 「東アジアの古代文化を考える会」が発足。江上波夫が会長、清張は顧問幹事に就任。森にも副会長就任の打診

1973(昭和48)年02月24日 『日本のなかの朝鮮文化』を励ます会が東京・京橋の中央公論社で開催。清張、司馬ら出席。

06月16日 清張、「火の回路」を『朝日新聞』朝刊で連載開始。74(昭和49)年10月13日に終了

08月26日 ◎清張から森へ封書の速達。柳本横穴古墳群について問い合わせ。朝日新聞で連載中の「火の回路」のため(消印)

09月03日 ◎清張から森へ封書で礼状。前項への返事に対して(消印)

11月10日 文藝春秋臨時増刊『松本清張の世界』刊行。森と上田正昭、金達寿の鼎談「清張“古代史”を考える」掲載

11月19日 清張、ベトナム古代文化視察団の団長として北ベトナム訪問。江上、大林太良ら同行。森は誘われたが不参加。12月8日帰国



松本清張(1909～1992)・森浩一(1928～2013)交友年譜 その2

◎＝清張から森宛て手紙による ○＝森の「調査の記録」による

- 1974(昭和49)年01月07日 ◎清張から森へ大型の書留郵便(消印)
- 01月10日 森が解説を書いた清張の『古代史疑』文庫版(中央公論社)刊行
- 01月14日 森が執筆した清張著「遊古疑考」の書評が『朝日新聞』朝刊に掲載
- 01月18日 ○清張と森、昼に会食。森は末永雅雄の朝日賞受賞に付き添うなどで16～18日に東京滞在。森「調査の記録3」記事
- 01月25日◎清張から森へはがきで礼状。歓談と資料送付に(消印)
- 03月31日 ○清張と森、東京・芝の仏料理「クレッセント」で会食。清張が質問攻め? 森は30日～3日に東京滞在。森「調査の記録3」記事
- 08月04日 ○清張と森、シンポジウムに出席。森「調査の記録3」記事。「ヤポネシア古代学の未来」か
- 11月01日 清張編『邪馬臺国の常識』(毎日新聞社)刊行。森が「三世紀の考古学」執筆
- 1975(昭和50)年08月20日 江上、清張編『日本古代学の始まり』(読売新聞社)刊行。森の講演録「日本考古学入門」を収録
- 10月 森と清張、水野祐による研究座談会「卑弥呼が死んでから…」が『週刊読売』10月4日号に掲載
- 10月 森と清張、水野祐による研究座談会「大和朝廷成立はいつなのか」が『週刊読売』10月11日号に掲載
- 10月20日 清張編『邪馬台国99の謎』(産報)刊行。森が第6章「銅鏡に秘められた謎」の一部を執筆
- 1976(昭和51)年03月25日 ○清張と森、夕食か。森「調査の記録3」に「夜、松本清張さんら」記事。森は同日東京泊
- 05月08日 森の画帳「あの日の筆録帳」の最初のページに清張が達磨の絵を描く(日付)
- 05月09日 ○清張と森、夕食か。森「調査の記録3」に「夜(松本さん)」記事。森は同日東京泊
- 1977(昭和52)年01月15日 福岡市で「邪馬台国シンポジウム」。清張が司会、森、江上、井上、直木孝次郎、岡崎敬、大林が参加。16日まで
- 05月02日 ○清張と森、夕食か。森「調査の記録3」に「夜 松本清張氏」記事。森は同日東京泊
- 09月21日 ○清張と森、江上がNHKテレビ出演か。森「調査の記録3」に記事。森は同日東京泊
- 10月03日 ○清張と森、パレスホテルの和田倉で対談「ナゾの原日本人と大和民族形成の秘密」。森「調査の記録3」。「週刊読売」10月22日号
- 1978(昭和53)年06月 森、「歴史小説と考古学」を『國文學』6月号に発表。清張に「土器洗いまで経験されることを期待する」
- 1979(昭和54)年01月20日 東京で「古代史シンポジウム国家成立の謎」。清張が司会、森、井上、直木、大塚、杉山二郎、西嶋定生が参加。21日まで
- 07月15日 森の著書『古墳の旅 中国と日本』刊行。清張が帯に推薦文
- 1979(昭和54)年07月18日 ○清張と森、上田が午前に「隼人」テーマにNHKテレビ出演か。森「調査の記録3」に記事。森は同日東京泊
- 11月01日 『ゼミナール日本古代史』上巻(光文社)刊行。森と清張、直木、上田が編集委員。執筆は森4項目、清張3項目

松本清張(1909～1992)・森浩一(1928～2013)交友年譜 その3

◎=清張から森宛て手紙による ○=森の「調査の記録」による

1980(昭和55)年01月31日 『ゼミナール日本古代史』下巻(光文社)刊行。編集委員は同上。執筆は森3項目、清張なし

01月19日 東京で古代史シンポジウム「大化改新と東アジア」。井上が司会、青木和夫、門脇慎二、武田幸男、西嶋、横山浩一。20日まで

01月21日 「清張日記」に古代史シンポジウム「大化改新と東アジア」に関する記述。朝日OB宗友重孝の手紙(20日付)を紹介しつつ

02月09日 清張が京都で講演の際に森が控室に来た、と「清張日記」に記述

03月15日 清張が堺市の大野寺へ土塔を見に行くため前夜、森に電話して場所を「土塔町」と教わった、と「清張日記」に記述

1981(昭和56)年01月 ◎清張から森へ年賀状の返礼の賀状

01月24日 山口県の竹島御家老家敷古墳出土の三角縁神獸鏡に正始元年銘、との報道について森に電話で意見を求めたと「清張日記」に記述

01月28日 ◎清張から森へはがきで礼状。著書贈呈と、好太王碑文と三角縁神獸鏡に関する中国学者の勉強会についての電話での紹介に(消印)

03月19日 「清張日記」に「倭人碑」に関する森の釈読について記述

05月31日 森、司馬が団長を務める訪中団に参加。雲南、蘇州、杭州、寧波、上海、成都などを訪ね6月14日に帰国

06月23日 ◎清張から森へ封書。丹田古墳群の報告書を送るよう依頼(消印)

06月29日 ◎清張から森へ封書で礼状。丹田古墳群の報告書に対し。7月19日昼に東京で会食したいと打診も(消印)

07月04日 ◎清張から森へはがき。会食は7月17日(19日の誤記か)午前11時40分に山の上ホテル地下の中華料理店で、と伝える(消印)

07月19日 ◎清張と森、山の上ホテルで会食。森「調査の記録」3記事。森は同日東京泊。20日夜は司馬らと四谷で会食か

07月26日 ◎清張から森へはがきで礼状。東京で会った件と、森の妻が田能遺跡(尼崎市)調査の村川行弘に連絡を取ったことに(消印)

08月24日 高輪プリンスホテルで「正倉院シンポジウム」に出席と「清張日記」に記述。杉山が司会、清張、森、鎌田茂雄、小川英雄

09月07日 京都で「正倉院シンポジウム」に出席と「清張日記」に記述。杉山が司会、清張、岡崎、田辺、西川幸治、吉田光邦

09月09日 「昨日、平城京資料館で佐原氏」に会ったと「清張日記」に記述。ほぼ15年ぶりの再会

11月14日 富山市で「日本海文化を考えるシンポジウム」。森がコーディネーターし清張が特別講演と討論の司会。黒岩重吾も出席。15日まで

1982(昭和57)年01月 ◎清張から森へ年賀状の返礼の賀状

08月01日 清張、鳥栖市教委主催のシンポジウム「鳥栖銅鐸と二千年前の日本」に佐原、門脇らと出席

10月23日 富山市で第2回「日本海文化を考えるシンポジウム」。森がコーディネーターし司馬が特別講演。24日まで

1983(昭和58)年04月10日 ○清張と森、座談会「古代を検証する」に出席(青木和夫、中西進と。學燈社。『國文學』同年9月号)。森「調査の記録④」記事

04月13日 ◎清張から森へはがき。前項の座談会で言及した万葉集の大伴卿の和歌について出典を伝える(消印)

07月31日 大阪で森編集の『古代学研究』100号の発刊を祝う会。司馬夫妻、江上、黒岩、陳舜臣ら435人出席。清張の名は見えず

松本清張(1909～1992)・森浩一(1928～2013)交友年譜 その4

○＝森の「調査の記録」による

|                         |                                                                 |
|-------------------------|-----------------------------------------------------------------|
| 1983(昭和 58) 年 11 月 23 日 | ○東京で「江上先生のお祝パーティー」。森「調査の記録④」記事                                  |
| 12 月 20 日               | 清張の著書『小説と古史への旅』刊行。森らが出席した同年 4 月の座談会「古代を検証する」再録。                 |
| 1984(昭和 59) 年 04 月 01 日 | ○森と司馬、陳が団長を務める訪中国に参加。上海、揚州、徳化、泉州、アモイ、香港を回り 4 月 11 日に帰国          |
| 09 月 28 日               | 森、金沢市での「環日本海(東海)金沢シンポジウム」に出席。司馬が特別講演。30 日まで                     |
| 10 月 29 日               | 清張、松江市でのシンポジウム「古代出雲王権は存在したか―弥生銅剣大量出土の謎に迫る」に佐原、門脇らと出席            |
| 1985(昭和 60) 年 09 月 15 日 | 清張、英仏の巨石文化を巡る取材旅行のため日本を出発。佐原が同行。10 月 9 日帰国                      |
| 1986(昭和 61) 年 03 月 22 日 | 清張、松江市でのシンポジウム「出雲。荒神谷は何を語るか―銅剣・銅鐸・銅矛、一括埋蔵の謎」に佐原らと出席。23 日まで      |
| 1988(昭和 63) 年 10 月 25 日 | 京都市北区に高麗美術館が開館。林屋辰三郎が館長、鄭が理事長、森、司馬、上田、岡部伊都子らが理事                 |
| 1989(平成 01) 年 04 月 19 日 | 福岡市で国際シンポジウム「古代日本の国際化」。清張と森が最後の対面。佐原、江上、門脇、大塚、王仲殊、金元龍ら。21 日まで   |
| 07 月                    | 清張の「逃げ水 邪馬台国」が『文藝春秋』7 月号に掲載                                     |
| 10 月                    | 富山市で「日本海文化を考えるシンポジウム」。森がコーディネーターとし司馬が特別講演                       |
| 1990(平成 02) 年           | 森の依頼により司馬が同志社大学で講演「キリスト教文化と日本」。終了後に「個體不羈」と揮毫                    |
| 1992(平成 04) 年 08 月 04 日 | 清張永眠(午後 11 時 14 分)。82 歳                                         |
| 08 月 06 日               | NHK 教育テレビ「松本清張・人と業績」放映。森と佐藤忠男、三好徹が出演                            |
| 09 月                    | 『オール讀物』9 月号「追悼特集 松本清張の世界」刊行。森が「考古学と氷の凶器」執筆                      |
| 10 月 20 日               | 『文藝春秋』臨時増刊号「松本清張の世界」刊行。森と江上の対談「松本古代史は何を変えたか」掲載                  |
| 1993(平成 05) 年 11 月 03 日 | 司馬が文化勲章を受章                                                      |
| 1996(平成 08) 年 02 月 10 日 | 司馬永眠。72 歳                                                       |
| 2002(平成 14) 年 07 月 10 日 | 佐原永眠。70 歳                                                       |
| 2005(平成 17) 年 03 月      | 『松本清張研究』第 6 号(松本清張記念館)刊行。森と門脇楨二の対談「清張古代史の現在を再検証する」掲載            |
| 2006(平成 18) 年 10 月 03 日 | 「森浩一の大切なもの展」が京都市東山区のギャラリー○△□で開幕。清張と共作の掛物「古代有情」など出品。10 月 14 日まで  |
| 2009(平成 21) 年 07 月 10 日 | 森が解説を書いた清張の『火の路』下(文春文庫)刊行                                       |
| 2012(平成 24) 年 06 月 16 日 | 愛知県春日井市の森浩一文庫で「天皇陵古墳と松本清張」展開幕。清張から贈られた天皇陵関係の資料公開。前後期 11 月 4 日まで |
| 2013(平成 25) 年 08 月 06 日 | 森永眠。85 歳                                                        |



第18回 松本清張研究奨励事業研究報告書

発行日 平成三十年(二〇一八)年三月三十一日発行

〔編集・発行〕

北九州市立松本清張記念館

北九州市小倉北区城内二―三

電話(〇九三)五八二―二七六二

〔印刷・製作〕

有限会社シーズ

本報告書掲載の本文及び資料の無断転載・複写を禁じます。  
松本清張記念館ホームページ <http://www.kid.ne.jp/seicho>  
登録番号 北九州市印刷物登録番号 第1709177F